OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	欧米でなく、アジアへ留学することの意義-留学前後の問題とキャリアパス ： 企業の視点を中心に
Author(s)	大西, 好宣
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12971
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「欧米でなく、アジアへ留学することの意義―留学前後の問題とキャリアパス：企業の視点を中心に」

―2005 年度 JAFSA 調査・研究助成事業報告書―

国際連合大学・留学生支援プログラム
プログラムオフィサー
大西　好宣　**Ph.D.**

はじめに

日本国内で評価のほぼ固まっている欧米留学経験者に比べ、近年、中国や韓国を中心に増加しているアジア諸国への日本人留学生については情報自体が少ない。帰国後の評価も定まっておらず、統計を含め関連する調査・研究も皆無に等しい。

しかしながら、飽和状態にある欧米への留学希望者に比べ、中国を中心とするアジア諸国への留学は今後の成長性が大きく見込まれる分野であり、留学を指導する大学職員にとっても、また当の学生にとってもタイムリーな情報提供や調査の充実が今こそ望まれているのではなかろうか。

このような問題意識を土台として、筆者は数年前、自らのタイ留学経験を踏まえ「日本と ASEAN の未来」[1]という論文を執筆した。そこで筆者は、もっと多くの日本人の若者がアジアの大学へ留学してほしいということ、それにしては日本に情報が少なすぎること、また、アジアの大学も日本人留学生を招くために本腰を入れていないこと、などを訴えたのである。

その論文自体は幸いにもある一定の評価を得たものの、情報不足は相変わらず解消されない。誰かが溝を埋めようと努力している気配もない。それならいっそ自分がやってみようと考えたのが、本研究の開始を思いついたそもそもの動機である。

さて、では研究の切り口を何にするか。しばらく悩んだものの、１）欧米留学との比較調査にすること[2]、そして、２）企業の視点・評価を中心に据えること、という結論に辿り着くのにそう時間はかからなかった。なじみのある欧米留学をものさしとして使うことは大方の理解が得られるであろうし、また留学というのは、つまるところ、より良い仕事を得るためにするものだと考えたのである。

そこで本調査では、次の２つを大きな柱としている。まず準備段階として、背景説明（第Ⅰ章）の後、アジアの大学や留学、企業の採用行動などに関する既存研究のレビュー（第Ⅱ章）をし、調査の方法論を明らかにする（第Ⅲ章）。その上で、第１に企業の人事担当者へのアンケート調査により、我が国を代表する企業がアジア留学経験者に期

[1]神戸大学主催懸賞論文・最優秀賞受賞、2004 年 10 月。
[2]欧米留学対アジア留学という二項対立の図式ではない。欧米留学は（良く知られているがゆえに）あくまでもものさしとして使うのである。

待するもの、また現実に彼らをどのように評価するかについて、欧米留学との比較という観点から明らかにする（第IV章）。

第２に、アジア諸国に留学経験のある日本人へのインタビューを通じ、留学の背景や現地での生活、帰国後のキャリアパス等、今まで明らかにされて来なかった様々な情報を同じフレームワーク[3]を使うことで整理・抽出する（第Ⅴ章）。そしてその上で、このような調査結果に対して筆者なりの解釈を加えつつ、情報を整理しまとめる（第VI章）。

したがって、本書を通して読む時間のない方は、第VI章のみをお読みいただいても本調査の最低限の概略はおわかりいただけるものと思う。さらにお忙しいと仰る方にはエグゼクティブサマリーも用意した。ご一読いただければ幸いである。

本調査は、もとより大海に投じた一石に過ぎない。しかしそれは、今後の同様の研究にとって重要な第一歩であると信ずる。たとえ微力でも、本調査がアジアへの留学を希望する学生や、留学相談を受け持つ大学職員にとって、留学の準備段階から帰国後のキャリアまで含めた全体像を把握し、アジア留学の意義をより深く理解することに役立つことを、心より願うものである。

なお蛇足であるが、筆者自身はアジア（タイ）と欧米（アメリカ）双方で留学を経験している。どちらにも正の側面と負の側面がある。したがって、どちらがより好ましい留学先かなどという短絡な価値判断はしないし、いわんやどちらか一方を敵視するものでもない。また、本稿は筆者個人の意見と調査結果を述べたものであり、筆者の勤務する国際連合（大学）の業務や価値観とは全く関係がない。この点、予めお断りしておく。

[3] 共通の質問。

謝辞

本研究はNPO法人・国際教育交流協議会（JAFSA）の2005年度調査・研究助成事業として実施された。助成金に加え、もともと予定にはなかった韓国・太田市における韓国国際教育担当者協会（Korean Association of International Educators：略称KAIE）年次総会[4]への参加の機会もいただいた。韓国の大学における留学生の受け入れについて、担当職員から生の声が聞ける貴重な経験であった。

JAFSAからのこのような理解と協力、また励ましがなければ、本研究の遂行はそもそも不可能であった。心から感謝を申し上げたい。同時に、韓国で筆者を受け入れていただいたKAIE事務局の方々にも、ひとかたならぬお世話になった。付してお礼申し上げる次第である。

また、本調査のために貴重なアンケートをお寄せいただいた東京証券取引所一部上場企業の担当者の方々にも、衷心より謝意を表したい。将来、若者のアジア留学の指針になるならと快く応じていただいた。各社の発展を切に願う。

合わせて、インタビューをご快諾いただいたアジア留学経験者の方々にも、この場を借りて心からお礼申し上げる次第である。中には、突然の依頼に戸惑われた方々も多いのではないだろうか。

インタビュアー（筆者）としての力量不足により、貴重なお時間をいたずらに浪費するなど、ご迷惑もおかけしたと思う。今後各分野において、ますますご活躍されることを祈念するものである。

さらに、FMICS（高等教育研究会）淵野辺研究会のメンバーには、大学職員としての立場に留まらず、様々な角度から的確な助言をいただいた。ここで１人１人の名前はあげないが、衷心よりお礼の言葉を申し述べたい。

そして、本書の執筆には何よりも家族の理解と協力が不可欠であった。特に妻には、アンケートの発送やデータの入力などについて殆ど手伝ってもらった。しばらくは頭が上がりそうもない。大いに反省しつつ、心から感謝している。

[4] 2006年10月26日～27日。

エグゼクティブ・サマリー

飽和状態にある欧米への留学希望者に比べ、日本からアジア諸国への留学は中国を中心として今後の成長性が大きく見込まれる。本調査では、１）日本人の留学やアジアの大学に関する先行研究をレビュー・整理し、２）欧米留学組との比較の観点から、企業は日本人のアジア留学組をどう評価しているかを明らかにする。さらに、３）アジア諸国に留学経験のある日本人へのインタビューを通じ、留学した側、採用される側からの視点を併せて提供する。

まず、アジアの大学や高等教育に関する研究は、80 年代後半のアルトバックによる研究をその嚆矢として、個別の大学について論じたもの、中国やベトナム、韓国などといったある特定の国の大学について論じたもの、或いはいわゆる従属理論的見地からアジアの大学に見る西欧の大学的特質の優位性を説いたものなど、質的にも量的にも実はもう十分なされている。

それらの研究を総合すると、まず制度の面では、欧米の一流大学との国際連携や、経営の独立性確保といった点で、アジアの旗艦大学は日本の大学と対等どころか、それ以上に素早くダイナミックな動きを見せ始めている。他方、研究や教育といった内容の面では自然科学分野を中心に立ち遅れが目立つ。例えば研究に関しては、設備の拡充や人材の早期育成、産業界の重層的な支援などが欠落していることが多い。

また、教育という点では、アジアの大学の多くは、たとえ旗艦大学といえども未だに暗記・詰め込み型が中心であり、創造的なアイデアや研究が生まれにくいという土壌を持つ。

しかしながら現実には、そのようなアジアの大学へ留学する日本人は中国を中心に増加の一途を辿っている。欧米留学経験者に比べ、アジア留学経験者を採用する本邦企業は製造業・非製造業共にまだ少なく、採用される人数も微々たるものである。その背景として、本邦企業の間では、欧米の大学の自然科学分野に比べアジアの大学のそれへの評価が低いことがある。

また、欧米留学経験者には向上心やコミュニケーション能力、交渉力などの一般的な能力が期待されるのに比べ、アジア留学経験者には語学など現地固有の事象に関わるものが求められている。そのため、ある国でビジネスを展開している企業とそうでない企業とでは、アジア留学経験者の採用について関心の差が激しい。

但し、能力や資質という点で、欧米留学経験者とアジア留学経験者との間に決定的な差異を認める企業は皆無である。よって、今後より大きな経済発展が見込まれる中国への留学経験者を中心に「採用を検討中」と回答した本邦企業は多い。この点で、アジア留学経験者の採用に関する限り、今はまだ過渡期であると言うことも出来よう。

また、多くの日本人アジア留学経験者は、予想以上に国際的な学習環境、語学のビジネス上の有用性、発展途上の国でしか味わえない貴重な異文化体験など、アジアへの留学経験を積極的に評価する者が多い。

しかしその半面、前時代的な詰め込み教育、カリキュラムや同窓会組織の脆弱性、教育内容に関する独自性と汎用性の欠落、などといった否定的な事実を指摘する者も少なくない。今後、研究や出版などを通じたより一層の正確な情報発信と、現地大学関係者との忌憚ない意見交換・意思疎通の拡大が望まれる。

図表索引

図一覧　　頁

図２－１：タイの大学におけるインターナショナル・プログラム数　31
図２－２：学歴別に見た新規学卒者の採用時に重視する性格や特徴　38
図２－３：採用の評価基準の重視度（サンプル数 625 社）　40
図２－４：留学で得たもの（複数回答）　42
図２－５：留学は現在の職業に業務面で役立っているか　43
図４－１：回答企業の業種（百分率）　52
図４－２：回答企業の規模（企業数）　53

表一覧

表２－１：Times Higher Education Supplement によるアジアの大学ランキング　6
表２－２：中国高等教育機関在学者数の変化　13
表２－３：光州・全南地域大学入学定員未充足の現状　15
表２－４：地域別・留学期間別日本人留学生数　22
表２－５：協定による国別の主な日本人留学先　23
表２－６：アメリカと中国への国別留学生数　24
表２－７：アジア主要国・地域の日本人留学生受け入れの現状　25
表２－８：就職活動に役立つものの変化　36
表４－１：回答企業の業種（企業数）　51
表４－２：留学経験者を対象とした採用活動を行っていると回答した企業数　53
表４－３：企業の留学生採用に関するクロス集計　54
表４－４：単回帰分析による回帰係数　56
表４－５：重回帰分析による回帰係数　57
表４－６：寄与率の回帰統計　57
表４－７：重回帰分析の相関行列　57
表４－８：評価される留学先　59
表４－９－１：大学の有名・無名（全体）　60

表４－９－２：大学の有名・無名（同一サンプル） 61
表４－10－１：企業が評価する専攻分野（双方採用企業） 62
表４－10－２：企業が評価する専攻分野（欧米留学のみ採用企業） 63
表４－10－３：企業が評価する専攻分野（全回答企業） 64
表４－11－１：企業が評価する留学生の能力や資質（双方採用企業） 65
表４－11－２：企業が評価する留学生の能力や資質（欧米留学のみ採用企業） 66
表４－11－３：企業が評価する留学生の能力や資質（全回答企業） 67
表４－12－１：短期語学留学への評価（アジア留学採用企業） 68
表４－12－２：短期語学留学への評価（欧米留学のみ採用企業） 68
表４－12－３：短期語学留学への評価（全体） 69
表４－13：学位の有無に対する企業の態度 69
表４－14：採用の必要性と能力への評価 70

目　次

頁

はじめに　i

謝辞　iii

エグゼクティブサマリー　iv

図表索引　v

第Ⅰ章：イントロダクション　1
- １．背景　1
- ２．研究の目的　3
- ３．研究の範囲と用語の定義　3
- ４．本研究の意義　4

第Ⅱ章：先行研究レビュー　5
- １．アジアの大学　5
- ２．アジアの大学への留学及び学生生活　20
- ３．就職と企業の採用行動　34
- ４．留学経験者の追跡調査　41

第Ⅲ章：調査の方法論　44
- １．本調査の構成要素　44
- ２．企業アンケート　44
- ３．インタビュー　47

第Ⅳ章：調査結果その１－東証１部上場企業アンケートから　50
- １．企業からの回答数　50
- ２．回答のあった企業の属性　51

３．企業の留学生採用の実態 53
４．企業が評価する内容 58
５．企業人事担当者の声 71

第Ⅴ章：調査結果その２―アジア留学経験者インタビュー 73
中国（国・地域名はアルファベット順）
１．会社員（30 代、男性、語学） 74
２．レストラン店員（20 代、男性、学部研究生） 76
３．会社員（20 代、女性、大学院修士） 78
４．都市銀行管理職（40 代、男性、語学） 81
５．会社役員（40 代、男性、学部学士） 84
６．会社員（30 代、男性、語学） 87
７．NGO 事務局長・通訳（30 代、女性、語学） 90
８．会社員（30 代、女性、学部聴講） 93
９．会社員（20 代、女性、学部交換） 96
10. 会社員（20 代、男性、語学） 98
11. 国立大学生（20 代、男性、学部交換） 100
12. 私立大学生（20 代、男性、学部交換） 102
13. 会社員（30 代、女性、学部研究生） 104
14. 派遣社員（30 代、女性、語学） 106
15. 通信社記者（30 代、男性、学部研究生） 109
16. 外交官（30 代、女性、大学院修士） 112
香港
17. 公立大学助教授（40 代、男性、大学院研究生） 114
インド
18. 会社員（20 代、女性、大学院修士） 117
19. 会社員（30 代、女性、大学院博士） 120
インドネシア
20. 日本語教師（30 代、女性、語学） 122

韓国

21. 日本語教師（30 代、女性、学部学士） 124

22. 会社員（20 代、女性、学部学士） 126

マレーシア

23. 政党シンクタンク事務局長（50 代、男性、大学院聴講） 129

ミャンマー

24. 政府系シンクタンク研究員（40 代、男性、大学院客員研究員） 131

フィリピン

25. 会社員（20 代、男性、学部交換） 133

シンガポール

26. 会社役員（40 代、男性、大学院修士） 135

台湾

27. 公立大学助教授（40 代、男性、語学） 139

28. 会社員（30 代、女性、学部学士） 141

29. 会社員（30 代、男性、語学） 144

タイ

30. 就職活動中（20 代、女性、大学院修士） 147

31. 私立大学生（20 代、女性、学部交換） 150

32. 会社員（30 代、男性、大学院修士） 153

33. 団体職員（30 代、女性、学部研究生） 155

34. 国連職員（40 代、男性、大学院博士）―筆者 157

ベトナム

35. 通訳（30 代、女性、学部聴講） 160

36. 私立大学教授（50 代、男性、大学院客員研究員） 162

第VI章：まとめ 165

１． 本研究の目的 165

２． アジアの大学に関する先行研究 165

３． アジアへの留学の実態とそれに関する先行研究 167

４． 企業の視点 170

５．留学経験者の視点 174
６．むすびにかえて 177

参考文献 179

巻末資料（企業アンケート質問票） 186

著者略歴 191

第Ⅰ章：イントロダクション

１． 背景

著名なジャーナリストであり、ニュースキャスターとしても活躍する蟹瀬誠一（2006）は、近著「４つの資産」で自らのフィリピン留学について短く触れている。

上智大学新聞学科の学生だった頃、氏はフィリピンへの交換留学プログラムに応募する。同氏によれば、当時「交換留学プログラム参加希望者の大半が英語学科の学生だった」とのことで、新聞学科の多くの学生は英語学科の学生との英語力の差を認め「あきらめて希望を取り下げてしまった」らしい。

そんな中、同氏だけはあきらめず、「新聞学科の仲間がどんどん脱落していく中で、最終的に僕ひとりが残り、みごと留学することができた」と、選ばれた喜びを誇りをもって語っている。

しかしそのような同氏も、同書の巻末にある自身の経歴には、１年間の米ミシガン大学への留学のみを掲載し、フィリピン留学は何故か正式な経歴としては紹介されていない。おそらく他の機会でも同様であろう。

同じくアジア留学の経験を持つ著名人に、著名な劇作家・演出家であり大学教授としても活躍する平田オリザの例や、本書・第Ⅴ章でインタビューした鈴木崇弘の例がある。平田は韓国の名門私大・延世大学への１年間の交換留学の経験がある。また、鈴木は2006年３月に設立されたばかりの自由民主党の政策立案・研究機関「シンクタンク2005」の理事・事務局長であり、東京大学卒業後、マレーシアとアメリカ双方への留学経験を持つ。

彼らのように社会的な影響力を持つ他の人たちの中にも、ひょっとするとアジアへの留学経験を持つ者は多いのかもしれない。だが、アジア留学の意義やその楽しさについて語る彼らの声は、残念ながら一向に聞こえて来ない。

言うまでもなく、このような状況を生み出しているのは、彼ら個人の責任ではない。実際、機会さえ与えられれば、彼らは自らの経験を語りたいと思っているのかもしれない。しかし、残念ながらそういう場所も機会も極めて少ないのが現状である。それは何故なのだろうか。

かつてわが国では、マスメディアなどに登場する回数の多さから、「外国人と言えば流行の衣装に身を包んだ白人を想像する人が多いが、それは問題ではないか」という議

論があった。同じことが今、留学についても言えるのではないだろうか。すなわち、日本で海外留学と言えば、多くの人は欧米へのそれを思い浮かべるだろう。

現実に、世界で最も多くの留学生を集めているのはアメリカとイギリスであり、ほぼ独占状態に近いと言ってもよい。特にアメリカの存在は質的にも量的にも極めて大きく、日本からばかりでなく、世界各国の俊英たちが目指す場所となっている。統計によると、アメリカへの留学生総数は、2005/2006 の期間で 564,766 人。それに対し、総人口では世界一の中国への留学生総数は 2003 年時点でまだ 7 万人台に留まっている（第Ⅱ章の表２－６を参照）。

したがって、現状追認という立場から言えば、ごく普通の日本人が海外留学イコール欧米留学と考えるのは、ある意味で仕方のないことと認めざるを得ない。言い換えるならば、欧米への留学というのは一般の日本人にとって最も容易に想像出来るし、また、実際に留学を経験した側からは、大衆や企業がそれを好ましいものとして受け取ることが、事前にある程度予期出来る。

それに比べれば、アジアへの留学と言われても、一般の日本人にはなかなか想像が出来ないであろう。上記で蟹瀬が米留学のみを正式な履歴として語っているのも、おそらくそのような一種の防御措置或いは諦観が無意識のうちに働いているのであろう。

しかし、世界は常に動いている。日本人にとってアジアへの留学が永久に傍流であるとは限らない。例えば 1980 年代後半には、地殻変動と呼んでも良いほど大きな変化があった。かつてアメリカと比肩されるほどの留学生を集めていたソビエト連邦や旧社会主義国の多くが雪崩をうつように崩壊し、留学生数の極端な減少を招いたのである。

その後しばらくは欧米圏のひとり勝ち状態が続いたものの、1990 年代には中国が経済的に台頭し、前述のように国策として世界中から多くの留学生を獲得し始めた[1]。21 世紀初頭には、日本もいわゆる留学生 10 万人計画を達成し、世界市場における留学生獲得競争に名乗りを上げて来た。

とりわけ、1996 年に 211 工程と呼ばれる国内の選ばれた大学を重点的に整備する事業を開始し、留学生獲得にも積極的に乗り出してきた中国の動向には、世界中から熱い視線が注がれている。だとすると、日本人のアジア留学は今が転換点或いは過渡期かもしれない。そのような前提に立てば、今ここで立ち止まって現時点での情報整備をしておくことは必要であろう。

[1] データ等は第Ⅱ章の表２－６を参照。

２． 研究の目的

上記で述べたように、日本人にとって、飽和状態にある欧米への留学希望者に比べ、アジア諸国への留学は中国を中心として今後の成長性が大きく見込まれる分野である。留学を指導する大学職員にとっても、また当の学生にとってもタイムリーな情報提供や調査の充実が今こそ望まれている。そこで本調査では、留学生にとって大きな関心事[2]のひとつである就職やキャリアの問題を取り上げ、企業の視点を中心に、アジア留学と欧米留学との比較を試みる。具体的には、

（１） 調査の予備段階として、日本人の海外留学やアジアの高等教育に関するこれまでの情報や知見を整理し、調査の基礎資料とする。その上で、

（２） 日本国内の企業の人事担当者にアンケート調査を実施し、わが国を代表する企業がアジア留学経験者に期待するもの、また現実に彼らをどのように評価するかについて、欧米留学組との比較の観点から明らかにする。さらに、

（３） アジア諸国に留学経験のある日本人へのインタビューを通じ、留学の形態や背景、現地での生活ぶり、日本を始めとする他国の大学との比較、帰国後のキャリアなど、今まで明らかにされて来なかった様々な情報を抽出し、整理する。

３． 研究の範囲と用語の定義

（１）海外留学の意味するもの

ここで言う海外留学とは、比較的広義のものを指す。すなわち、

①語学の上達を主目的とし、海外の語学学校や大学付属の語学研修機関に所属しながら、語学の習得を行う、いわゆる語学留学。

②日本で籍を置く大学を一時的に離れ、海外の提携校・協力校もしくは姉妹校などに、所属大学から公式に派遣される、いわゆる交換留学。そしてそれに準じる形態として、学生自ら留学先大学を選定したり、また国費などの公的資金に頼り研究生や研究員の身分で渡航するもの。

③より狭義な概念である学位取得目的の留学

[2] 第Ⅱ章の日米教育委員会調査を参照。

を全て含めたものが、本調査で言うところの海外留学である。

（2）欧米およびアジアの定義

欧米とは文字通り欧州とアメリカのみを指すものではなく、これらの国々に加え、歴史的にも社会的にもイギリスと関係の深いオーストラリアやニュージーランドも含める。欧州とは、EU 加盟国および EU 非加盟の東欧諸国など全てを指すが、現実的にはルーマニアやチェコなどの東欧諸国を留学先として想定する日本人はそう多くないであろう。

アジアの定義はさらに厄介であり、またそれを詳細に時間をかけて定義することも生産的とは言えない。したがって、本調査ではとりあえず、中国・韓国・台湾・モンゴルなどのいわゆる東アジアと、インド・パキスタン・バングラデシュ・スリランカなどの南アジア、そしてベトナム・タイ・シンガポールなど東南アジア 11 か国（ASEAN 加盟 10 か国＋東チモール）程度の範囲を指すものとする。

つまり、トルクメニスタン・キリギスタンなどの中央アジア、イスラエルやトルコなどの中近東は本調査で言うアジアには便宜的に含めないものとする。また、日本人の海外留学先として想定する以上、日本を対象に含めないことは言うまでもない。

４． 本研究の意義

本調査を実施することにより、次のような３つの成果が期待される。

（1） 短期的には、アジアへの留学を希望する学生に対し、留学の準備段階から帰国後のキャリアまで含めたトータルな情報が提供され、アジア留学の意義を理解する一助となる。

（2） 留学相談や国際交流業務を担当する大学職員に対しても上記（1）と同じ効果が期待される。すなわち、欧米留学についてもアジア留学についても必要な情報を学生に提供することが出来るようになり、バランスのよい指導へと変化することが期待される。

（3） 中長期的には、上場企業の人事担当者にとっても、日本人のアジア留学に関する理解が深まり、さらなる関心を喚起されることが期待される。

第Ⅱ章：先行研究レビュー[3]

１．　アジアの大学

（１）いわゆる大学ランキング

アジアの大学の全体像を俯瞰するため、いわゆる大学ランキングなるものを参考としてまず見ておこう。こういった大学ランキングの正確さや有用性については古くから様々な議論があるものの、それを気にする人は実際に多いし、何がしかの影響力を持っていることは確かである。東京大学総長の小宮山宏が語っている次の言葉が、おそらく多くの大学人の最大公約数的な意見を代弁しているのではないだろうか。

「この種のランキングに一喜一憂する必要はありません。ただ、他国の学長と会ってもこういう話になる。『We should not care, but sometimes we care.（気にすべきじゃない、だけど時々気にしてしまう）と。（笑）』」[4]

よって、大学ランキングなるものをまるっきり無視してしまうというのもいかがなものか、というのが筆者の考えである。しかし、実際には質が悪く、一目で信用の置けないものだとわかるようなランキングがあることもまた事実である。

大学評価・学位授与機構の米澤彰純は、そのような現実を踏まえ、現段階で信頼の置けるランキングとして、Times Higher Education Supplement（THES)と上海交通大学のそれが世界の２大潮流になって来たと述べている[5]。よって、ここではそのうちのひとつTHESのランキングを紹介しよう。下の表２－１はそのTHESが2006年に発表した最新の世界大学ランキングのうち、アジアの大学のみを抜粋してランキングし直したものである[6]。全部で９か国・地域の33大学がランキング入りしており、一見して日本と中国の大学が多いことが目に付く。試みに国別でランキングしてみると、１位は日本の11

[3] 所属や肩書きはいずれも論文発表時のもの。

[4]）「総長インタビュー　東大は世界の“上流”となるか： われわれは頂点に手が届く」『中央公論』2007年２月号、p78.

[5] 第７回私立大学研究フォーラム「国際大学ランキングの実像」（於：早稲田大学、2006年10月18日）での講演内容と配布資料より。

[6] 同様の抜粋作業はわが国のアジア学生文化協会や、中国の新聞なども行っている。但し、それぞれに「アジア」の定義が違うため、微妙に順位が食い違っていることに留意されたい。筆者の定義は既に第Ⅰ章の３で紹介した通りである。

表２－１：Times Higher Education Supplementによるアジアの大学ランキング

2006年 アジア順位	2006年 世界順位	2005年 世界順位	大学名[7]	国名
1	14	15	北京大学*	中国
2	19	16	東京大学	日本
2	19	22	シンガポール国立大学*	シンガポール
4	28	62	清華大学*	中国
5	29	31	京都大学	日本
6	33	41	香港大学	香港
7	50	51	香港中文大学*	香港
8	57	50	インド工科大学	インド
9	58	43	香港科学技術大学	香港
10	61	48	ナンヤン工科大学	シンガポール
11	63	93	ソウル大学*	韓国
12	68	84	インド経営大学	インド
13	70	105	大阪大学	日本
14	108	114	台湾大学	台湾
15	116	72	復旦大学*	中国
16	118	99	東京工業大学	日本
17	120	215	慶應義塾大学	日本
18	128	222	九州大学	日本
18	128	129	名古屋大学	日本
20	133	157	北海道大学	日本
21	150	184	高麗大学	韓国
22	154	178	香港市立大学	香港
23	158	202	早稲田大学	日本
24	161	121	チュラロンコン大学*	タイ
25	165	93	中国科学技術大学	中国
26	168	136	東北大学	日本
27	179	169	上海交通大学*	中国
28	180	150	南京大学	中国
29	181	172	神戸大学	日本
30	183	192	ジャワハルラル・ネルー大学*	インド
31	185	289	マレーシア・ケバンサン大学	マレーシア
32	192	169	マラヤ大学*	マレーシア
33	198	143	韓国科学技術院	韓国

（出典：Times Higher Eeducation Supplementによる各年のWorld University Rankingsから、アジア学生文化協会の作業を参考に筆者作成）

[7]第Ⅴ章でインタビューした人たちの留学先が含まれているため、大学名の後の星印で示した。

大学、２位は中国の６大学、３位は香港の４大学、４位は韓国とインドで３大学となり、これらがベスト５ということになる。

但し、金子（2001）の言に従えば「日本以外のアジアの大学の全体の水準はやはりかなり離れている」ということになり、アジアの大学とひと括りにしてその中でのランク付けをしてしまうのは、いささか問題なしとしない。金子は 1996 から 2000 年まで、Institute of Scientific Information (ISI)が発行する自然科学の国際的学術雑誌掲載論文データベースを利用し、総発表論文数に占めるアジアの主要大学のシェア（%）を計算した。言うまでもなく、このような論文の数は様々な大学ランキングで判定基準として用いられている。

その結果、世界では東大（0.7%）がハーバード（例年１%近辺）に次ぐ第２位であり、京都大学（0.5%）が５位、その他旧帝国大学が 0.4～0.2%に位置しているという。そしてこの下にやっと韓国、台湾、シンガポールといった国々が続き、（シンガポールを除く）東南アジアの大学に至ってはチュラロンコン大学が 0.025%、フィリピン大学が 0.013%、マラヤ大学が 0.004%となっており、金子によればこれらの大学は「『発展途上大学』の域を脱していない」と手厳しい。

金子の判定では「だいたい 0.2%以上のあたりを超えると、学術の世界で自律し、グローバルな競争に参加している国際的大学ということになるのでは」ということで、アジアでは日本の有名大学の他、ソウル大学、台湾大学、シンガポール国立大学の３校がぎりぎりそのラインである。因みに金子の試算では、後で中国有数の大学として紹介する北京大学や清華大学は２校ともこのラインに届いていない。

（２）アジアの大学研究（アジア全般）

アジアの大学に最初に目を向けたのは、ボストン・カレッジのアルトバック(Philip G. Altbach)であろう。彼の初期の考え方はいわゆる従属理論として知られ、その研究成果は著書「アジアの大学」[8]として結実している。その中で彼は、アジアの大学についてこう述べている。

[8] 原著は Altbach, Philip G (1989) ”*From Dependence to Autonomy: The Development of Asian University,*” Kluwer Academic Publishers B. V.　日本語版は馬越徹・大塚豊監訳（1993）「アジアの大学：従属から自立へ」玉川大学出版部

「二つの基本的な事実がアジアの高等教育システムを形づくっている。ひとつは基本となる大学のモデルが外国起源のものであることであり、もうひとつは、それが発展していくにつれ諸大学は、土着化していくということである」

続けて、その土着化の仕方は国によって異なり、その異なり方の大きな要因を植民地経験の有無に求めて歴史的な考察を展開している。アルトバックによる分類では、植民地経験を持たない国の例として、中国・日本・タイの３か国[9]、反対に持つ国の例として、フィリピン・インドネシア・インド・マレーシア・シンガポールが挙げられている。なお、韓国と台湾については、かつて同じアジアの日本の植民地であったとして別の章立てになっており、フィリピンなどとは異なったモデルとして考えられている。

そのように歴史的には異なった発展を遂げ、土着化の度合いも国によって違ったものになっているとはいえ、同書では従属理論モデルの観点から、結局アジアの大学は西洋のそれの影響を免れないとアルトバックは結論づける。少し長いが、下に引用する。

「外国留学のインパクトについては詳細な分析を要するが、アジアの場合、その人数がきわめて多いことや、留学国の大学システムとの間に継続的なつながりがあることから、外国での教育訓練が特に重要な意味をもってくる。また、相当数のアジアの大学人は西洋諸国で教えたことがあり、このことは彼らに西洋の学術の基本方向や慣行を吸収する更なる機会を与えたのである。こうした教授たちが本国に帰ったとき、彼らはしばしば自国の大学に対して影響を及ぼそうとする。一方、外国からアジアに来ている教授は、主として西洋の先進工業諸国の出身者であるが、彼らのインパクトも相当なものである。シンガポールや香港では、大学教授陣のかなりの比率の者が本国を離れた外国人である」

そして最終的に、アルトバックによるアジアの大学への評価は以下のような見方に集約される。

[9] 中国が植民地経験を持つか持たないかということに関しては異論もあろう。

「インド、中国、日本といったアジアの大国は必ずや学術面の『大リーグ』に加入することになるであろう。シンガポール、台湾、韓国といった小国だが大学に大きな比重をかけているところは、高等教育における『センター・オブ・エクセレンス』を創り上げる上で目ざましい発展を遂げてきた」

同じ著者による「比較高等教育論」[10]も、この分野の必読書として挙げられることが多い。同書では、教科書や学生、教授職の国際比較を試み、アジア関連では第２章で「アジア・ニーズ（NIEs）諸国の高等教育と科学発展」と題して、タイやマレーシアなど、東南アジアの国々の大学について言及している。

そこでも、アジアの大学発展については従属理論モデルが基調となっている。この点では前掲書「アジアの大学」同様、同氏の視点はいささかもぶれていない。そのような同氏の主張は、例えば「世界的に見て大学のモデルと考えられるものはただ一つしかない」[11]或いは「世界の近代大学のほとんどが西洋型の大学をモデルとしており、これに代わるモデルが見られないことについては多くの説明がなされている」[12]などの記述で明らかである。

但し、同書で新たに登場している別の用語は、第４章の「中心―周辺」（center-periphery または core-periphery）理論という言葉である。アルトバックはこの理論で、アジアの多くの大学が「周辺」の高等教育機関に陥りかねないことを警告している。例えば、「インドは世界第三の規模を誇る大学システムを有しているけれども、その多くの大学の質はかなり低い」[13]と述べ、デリー大学が外国から多額な援助を受けて国際的な質を保っていることを、その例外として挙げている。

そしてその前提として、「第三世界の大学であっても、特定の分野に多額の資金を投入することにより、その国が特別に必要としている領域の専門知識を蓄積することはできる」[14]と主張し、本来このような資金投入は自国でやるべきものなのに、実際には外国の援助頼みであることを嘆いてみせる。

---

[10]原著は Altbach, Philip G (1998) ”*Comparative Higher Education*,” Ablex Publishing Corporation. 日本語版はそれより先に出版されており、馬越徹監訳（1994）「比較高等教育：「知」の世界システムと大学」玉川大学出版部

[11] 同書 p13.

[12] 同書 p16.

[13] 同書 p122. 後述の読売新聞は全く逆の見解である。

[14] 同書 p121.

近年、アルトバック（2006）は馬越との共著で「アジアの高等教育改革」をまとめ、さらに問題意識を発展させている。第１章では「アジアの大学における過去と将来―二十一世紀への挑戦」と題し、インドやパキスタン、ネパール、そして中国や日本までも含むより広範なアジアの大学について論じている。

中でも、高等教育と経済発展の結びつきを語る上で最も興味深い例としてシンガポールの例を挙げている。同国では長らくシンガポール国立大学とナンヤン工科大学の２校しか大学がなかった[15]が、今世紀に入ってこの国では初の私立大学となるシンガポール経営大学が誕生しており、第７章ではそのような最新情報をもとにこの国の高等教育の現状と課題が語られている。

アルトバックは同書において、これからのアジアの大学が直面する課題として、１）大衆化、２）アクセス、３）区別化、４）適格認定と品質管理、５）研究、６）学術的専門職、７）グローバリゼーションと国際化、８）超国家化、の８つを挙げる。そして、これらの挑戦を既に受けて来たアメリカの大学を、アジアの大学は絶えず気にしなければならないとも説く。

馬越（1989）は、その著書「現代アジアの教育」で初等・中等教育も含め、アジアの教育全般を概観している。取り上げられている国は、中国・韓国・インドネシア・タイ・フィリピン・マレーシア・インドの７か国で、巻末には文献紹介もあるなど、最も優れた概説書のひとつである。中でも目を引くのは、設置形態別に見たアジア各国の大学事情を３つのモデルを使って説明している点である。すなわち、中国やマレーシアのように国公立大学が独占的存在であるⅠ型、タイやインドネシアのように国公立大学が主で私立大学がその周りを取り巻くというⅡ型、反対に韓国やフィリピンなど私立セクターが主のⅢ型である。

さらに馬越（2004）は、「アジア・オセアニアの高等教育」で、中国・韓国・タイ・マレーシア・インドネシア・ベトナム・シンガポール・フィリピン・インドの９か国を取り上げ[16]、近年の動向を分析している。例えばシンガポールでは、他の国に先んじた動きとして、各大学がペンシルバニア大学など、海外（主に英米）の有力大学との提携を近年強力に推し進めている様子を描いている[17]。さらに 2000 年には、シカゴ大学経営

[15] いずれも国立。
[16] 本稿が対象としない国では、オーストラリアとニュージーランドも含まれている。
[17] 執筆者は池田充裕。

大学院のような有名プロフェッショナル・スクールの分校を自国内に設立し、自国民だけでなく、海外から優秀な留学生を獲得しようというこの国の戦略が紹介されている。

加えて馬越は、アジア・オセアニア地域全体の高等教育に起こっている新しい動きとして、次の４つを紹介している[18]。最初の新たな潮流は、国内のみから国際競争に伍して行ける高度人材の育成という人材観の転換である。２番目は国立大学の構造改革と私立高等教育の育成及び質保証装置の創出、３番目は研究機能の重視、そして４番目は域内大学の横断的なつながりだ。一方で馬越は、それらの発展を阻む要因として、公財政支出の抑制と市場原理の普及を挙げている。

財団法人静岡総合研究機構（2005）による「アジア太平洋高等教育の未来像」も興味深い一冊である。ここでは韓国、中国、タイ、マレーシアの事情が紹介されており、上のアルトバックや馬越などとも共通する部分がかなりあるものの、各国の大学の置かれた状況だけでなく、その国の高等教育政策の方向性などが併せて報告されている点で貴重な文献となっている。

同書の中でさらに興味深いのは、巻末のパネルディスカッションである。中でも、タイの地域研究者であり、東京大学教授の末廣昭の次の発言は、アジア域内大学の自然科学系研究基盤の脆弱性を指摘した点で重要である。

「例えば、チュラーロンコン（原文ママ）大学で、先端的研究をやろうとしても、それを支えるすそ野や基礎研究がまだ整備されていない。チュラーロンコンの中で一番進んでいる分野の一つは化学だと思うんですが、国際的なレフリー制ジャーナルに、博士論文を書いて通った教員はほんとんど（原文ママ）いないわけです。そういう状況のもとで高度化、高度化と言っても、やっぱりむなしいのであって、ある程度の時間をかけて、すそ野から教育基盤をつくっていくというプロセスが必要じゃないかと思います。ですから数字の上で進学率は非常に上がったけれども、中身のほうがそれについてきていないというのが、私の印象です」

最後に喜多村（2001）の論考を紹介したい。この論考は「アジアの大学に学ぶ」という特集を組んだ雑誌『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号の最初に掲載されているものである。喜多村はそこで、われわれ日本の大学人はアジアの大学を知る必要があると説

[18] 同書 pp7-11.

き、その理由として次の５つを挙げる。すなわち、最初の理由はアジアの大学の方が分野によっては日本を凌駕しており、アジアの大学に学ぶべきだという主張。２番目は、国内における物的・人的資源の制約を補うため、アジアの大学との連携が不可欠であるということ。３番目の理由は、アジアは日本の隣人であり、相互に対等の交流が必要だということ。そして４番目の理由は、日本にはアジアの留学生が必要だということである。最後５番目の理由は、他の先進諸国に負けるな、取り残されるなというメッセージだ。

一読するともっともな主張なのだが、筆者には大いに疑問に感じられる箇所がある。それは、上の３番目と４番目の理由の矛盾だ。互いに対等と言いながら、日本の大学がアジアから留学生を受け入れることの重要性だけを説いている。対等と言うならば、日本人がアジアという、言わば相手の懐へ飛び込んでいくことは何故重要ではないのだろうか。実は、残念ながら「対等」という心地良い言葉を使った同様の主張は、喜多村以外の発言や論考にも比較的散見される[19]。本書が意図する問題の、正に核心に触れる部分なので、敢えて異議を唱えておきたい。

（３）アジアの大学研究（個別の国）

上記１（２）で紹介したアジアの大学に関する包括的な各研究書でも、各国個別の大学研究についてかなり網羅されている。本項では、それらの大学研究について、上記１の（２）以外の成果を紹介したい。

まず、各国個別ということになると、何と言っても中国のそれに関する書籍が他を圧して多い。わが国におけるこの分野の嚆矢となったのは、大塚（1996）の「現代中国高等教育の成立」であろう。中国における高等教育の構造的な特質を、著者の得意とする歴史的な手法で明らかにした名著である。焦点を当てたのは中華人民共和国建国前後の数年間で、大塚はその数年こそ同国の高等教育の原型が形成されていった時期だと見る。

[19] おそらくその嚆矢となったものは、1977 年８月 18 日に当時の福田赳夫首相がマニラで表明した日本のアジア政策の基本、いわゆる「福田ドクトリン」であろう。この中で、日本は今後アジアと「対等な協力者」として接すると宣言した。

表２－２：中国高等教育機関在学者数の変化[20]

	1993 年	1998 年	2002 年
普通高等教育機関（本科・専科）	2,535,500	3,408,700	9,033,600
成人高等教育機関（本科・専科）	1,862,900	2,822,200	5,591,600
大学院（修士・博士）	106,800	198,900	501,000

（出典：『IDE 現代の高等教育』2004 年４－５月号、p59.）

中国人の側からは熊（2004）の論考がある。中国における高等教育人口の急激な拡大を表にまとめ（表２－２）た上で、そのような成長の一因に私立高等教育機関＝民弁大学の増加を挙げている。

熊によれば、1997 年に 1,200 校以上あった民弁高等教育機関のうち、国家が承認する学歴発行資格を持つものはわずか 20 校に過ぎなかったものの、2004 年には 1,300 以上あるうちの 167 校にまで増えているという。

中島（2000）らは中国の高等教育の入学試験に焦点を当て、1978 年のいわゆる「改革開放」宣言後の同国の教育発展状況をも敷衍しつつ、わが国のそれとの比較により、同国の大学や高校を分析している。具体的には、入試の日程や管理方法、採点方法などが詳述されている。日本ばかりでなく、イギリスや韓国、台湾の制度とも一部比較研究がなされており、こと入試問題に関する限りでは最も優れた研究書のひとつとなっている。

同書によれば、中国の「全国統一大学入試は、受験生が一定のレベルに達しているかどうかについて判定を下すばかりでなく、もっと重要なのは、人材選抜の基準と数量に照らして、ほぼ同じ水準の高校卒業生の中から大学教育を受ける最良の人材を選ぶことにある」[21]とされる。また、この入試では、「毎年全国各省・自治区・直轄市の最低合格ラインはそれぞれ違うものになっている」[22]点も特筆すべきであろう。

最近では、広島大学高等教育研究開発センターと日本高等教育学会が実施したフォーラムの記録「日中高等教育新時代―第２回日中高等教育フォーラム/第 33 回（2005 年度）研究員集会の記録―」が、中国の高等教育を理解する上で大変参考になる。例えば、上海交通大学高等教育研究所長の劉念才による、中国国内における大学ランキングの総括、また、いわゆるカーネギー分類等を利用した中国の大学分類の試みは極めて興味深

[20] 元の表に記されていないため、100 名未満の数値は捨象した。
[21] 同書 p261.
[22] 同書 p262.

い[23]。さらに、蘇州大学教育学院長の周川による論考「中国における大学院教育の発展と課題」[24]は、近年重要性を増す同国の大学院教育の行方を理解するために非常に参考になる。

中国の個別の大学についても複数の報告・研究書がある。1995 年から２年間文教専家として北京大学の教壇に立った工藤(2001)は、「内外の注目を浴びる北京大学は、文字どおり中国の最高学府、全国一〇の重点大学トップの名門で、若者たちの憧れの的である。（中略）建学の精神『民主と科学』を旗印にした北京大学の動向は、中国全土を左右するほどの影響力をもっている」[25]と北京大学のことを紹介している。

北京大学については、かつて学生としてそこに中国人学生として在籍していた沖園（1993）も「中国には、大学は多い。全国で約六百校。南京大学、武漢大学、復旦大学など、日本にもよく知られた伝統校も数々ある。だが、北京大学は、やや色あいが違う。一流中の一流であり、したがって党中央の幹部が多大な関心を持って注目している。彼ら『お偉い』人たちは、できれば自分たちの子供たちが北京大学へ入学できればと願ってやまない。そして学生一万二千人のうち、党幹部高級公務員、軍人の子弟が約三分の一を占めている（後略）」[26]と述べている。

沖園は同時に中国の大学全般について、「中国の大学の教育内容は、知識の水準では外国と変わらないだろう。授業用の教科書を編纂するにあたって、教授たちはたいてい、自分の研究の結果に加え世界各国の教科書を参考にして作業を進めるから大きな差はない。しかし、大きな違いはその純知識性以外のところにある。つまり科学的客観性より政治優先が強くにじみ出ているのである。それは中国の政治家たちが強制する政治イデオロギーである」[27]と述べている。

先に THES の大学ランキングでは、中国の大学のトップは北京大学であった。しかし、胡錦濤国家主席ら歴代の政府要人を輩出し続けている清華大学こそ、中国のナンバーワンだと述べるのは紺野（2006）である。彼は言う。「北京大学は清華大学と並んで今も昔も中国を代表する最高学府の双璧である。しかし、政府が発表した大学格付け、それに基付く毎年の予算付け、総合大学としての学部の陣容、教壇に立つ人材の流れ、さら

[23] 同書 pp86-102.
[24] 同書 pp334-339.
[25] 同書 p38.
[26] 同書 p2.
[27] 同書 p31.

には輩出している国家指導者の数という点で歴史の慣性が働いているようで、最近の北京大学は清華大学に及ばなくなりつつあるようだ」[28]。

韓国については馬越（1995）の研究がある。同氏は近年、最も身近な隣国である韓国について、情報が余りにも少ないことを問題視し、同国の高等教育への関心を強めている。その著書「韓国近代大学の成立と展開：大学モデルの伝播研究」では、わが国を凌ぐ韓国の高い大学進学率、梨花女子大を代表とするミッション系大学の系譜、或いは開放的な校風からよくわが国の早稲田大学と比較される高麗大学が、実は歴史的に慶應義塾大学との関係が深かったことなど、興味ある数々の史実が明らかにされている。

前韓国大学総長協会会長の李（2004）は、韓国における国立大学の効率的運営方策として、連合大学設立の試みを紹介している。李によれば、既に 1996 年には釜山水産大学校と釜山工業大学が統合されて釜慶大学校が誕生しており（国立大学間で成立した初の統合事例）、同様の流れとして、国立光州・全南連合大学の例を詳しく紹介している。この背景には、わが国でも最近問題となっている大学の定員割れ問題がある（表２－３）。

表２－３：光州・全南地域大学入学定員未充足の現状

	2000 年	2001 年	2002 年
入学定員	28,525	28,200	29,220
不足人員	-4,564	-2,232	-4,440
未充足率	16%	7.9%	15.2%

（出典：『IDE 現代の高等教育』2004 年４－５月号、p66.）

李によれば、「日本の国立大学が既存の大学ごとに法人化されるのとは対照的に、韓国の国立大学は『連合大学』形態へと構造調整される展望にある」とのことだ。

それ以外の国の大学については、それほど多くの文献はないものの、最初にスローパー（1995）[29]らによるベトナムの大学レポートを紹介しておきたい。本書はベトナムの高等教育に関する概説書の嚆矢であり、高等教育政策、高等教育組織の管理運営、大学

[28] 同書 p106.

[29]原著は Sloper, David & Le Thac Can (1995) "*Higher Education in Vietnam: Change and Response*," Institute of Southeast Asian Studies. 日本語版は大塚豊監訳（1998）「変革期ベトナムの大学」東信堂

教職員の研究、研究と教育、高等教育財政など、かなり広範囲のトピックが網羅的に述べられており、今でも大半の論考はその価値を失っていない。

同書の中にある「68.8%の学生は、宿題や試験の評価が暗記した知識の量の多さを見ることに偏りすぎていると考えており、多くの教員は学生の創造力や批判的思考の発達に十分な注意を払っていないと考えているのである」という指摘は、他の多くのアジアの大学にも共通する重要な問題提起である[30]。

鹿児島（1998）らによる、ベトナムの経済・経営系の諸大学と高等教育政策についての研究も興味深い。1980 年代後半、ベトナムでは「ドイモイ（刷新）」と呼ばれる経済開放政策が実行に移され、それまでの計画経済から市場経済へのスムーズな移行を目指していた。したがって、同国の大学の経済・経営科目の劇的な変化はこの時期を象徴するような大きな出来事である。この中には拙稿「ベトナムの大学概観(An Overview)」も収められており、1990 年代初頭からの同国における大学改革の様子を概観している。

ベトナムの大学に関する研究書を著したスローパー（1999）にはカンボジアの高等教育に関する研究もある。殆ど情報のない同国の大学事情について、高等教育政策や個別の大学事情まで含め、現状を詳らかに報告した意義は極めて大きい。カンボジアでは、1970 年代後半のクメール・ルージュ時代、全国的規模で知識層が抹殺されるという悲劇があった。そのため、本書全体を通じて流れるのは、とにかく人材育成を早急になすべきという強烈な願いである。その意味で、この国ではとりわけ大学の責任が重い。

筆者の留学先であるタイに関しては、既に紹介したアルトバックや馬越らの研究成果に加え、拙著“The Impact of Middle Class and Open University Graduates in Thailand on its Economy”（チュラロンコン大教育学部博士論文、2004 年）を紹介しておく。アルトバックや馬越らによっても紹介されているように、タイには無試験入学が可能な公開型の大学が２校もあり、これは世界でも珍しい。当該論文はこの２校の卒業生に焦点をあて、教育経済学的な視点から伝統的国立大学の代表＝チュラロンコン大卒業生との比較を試みたものである。1980 年代のタイの経済成長を支えて来たのは、これら公開大学２校の卒業生であったことが従来から指摘されており、当該論文はそれを数値によって実証したものとなっている。

[30]実際、第Ⅴ章のアジア留学経験者へのインタビューでも、多くの人がそのような感想を述べている。

また、インドの大学については 2007 年２月１日の読売新聞に次のような記述がある[31]。すなわち、「インドの高等教育の水準は、国際的に見ても高い[32]。中でも、全国に７校ある IIT（筆者注：Indian Institute of Technology＝インド工科大学のこと）では、毎年約 30 万人の受験生のうち合格するのは 5,000 人程度に過ぎない。同大は、かつて理系エリート養成を目的に米国の支援で設立されたが、一度入学すれば、インドの代表的優良企業への就職は確実で、銀行からの学資融資も無利子だ」という。

同紙は続けて、「それだけに、受験競争は激烈だ。家庭教師を雇うなど余裕のある富裕層の子弟がどうしても有利になる」とも報告し、その打開策のひとつとも目される、インドの大学に関する最近のある動きを追う。同国にはよく知られる通り、バラモン（司祭）・クシャトリア（戦士）・バイシャ（商人）という上位カーストの下に、シュードラ（隷属民）などの後進諸階級、さらに最下層の指定カーストや指定部族が存在し、従来から IIT のような国立大学には最下層のカーストに入学定員の 22.5%にあたる優先枠を認めて来た。

読売新聞によれば、インドではさらにその優遇枠を拡大し、後進諸階級にも 27%を与えるという。実現すれば、総定員の半数を下位カースト出身者が占めることとなり、これに不満を持つ上位カーストの若者との間で大きな議論が巻き起こっているらしい。

これに対して、自国内のある特定民族だけを対象とした優遇策を続けるのがマレーシアである。いわゆるブミプトラ（土地っ子）政策がそれで、大学入学などに際して国内の多数派を占めるマレー系がこの国では優遇される。同国にはマレー系の他、インド系、中国系が居住するが、いずれもマレー系より比較的裕福だとされている。

そんな中で、マレーシア科学大学のリー（2004）は、マレーシアにおける高等教育機関について、４つの大きな潮流を報告している。まずひとつは、1995 年には１校もなかった私立高等教育機関の台頭である。リーによると、マレーシアには 2002 年の段階で、

---

[31] 読売新聞東京版１面及び９面「興隆インド　第１部　夢の大地へ３」2007 年２月１日。
なお、本記事の情報源は伊藤（2007）「IT とカースト　インド・成長の秘密と苦悩」（日本経済新聞社）であろうと思われる。フリードマン（2006）「フラット化する世界」（同）にも同様の情報がある。

[32] インドの大学の質が高いという意見は、本章の１（２）でアルトバック（1998）が言った「（インド）の多くの大学の質はかなり低い」という意見と真っ向から対立するものである。読売新聞の記事で、受験の厳しさと就職の良さが教育の水準と関連づけられているのは明らかに論理の飛躍で余り説得力がない。かと言って、アルトバックも質が低いという理由を必ずしも明示していないので、両者のうちどちらが正しいかについてここで論じても余り意味がない。

公立大学が 11 校、私立大学が 15 校、ユニバーシティ・カレッジが５校（うち１校は私立）、ポリテクニクが６校、教員養成カレッジが 27 校存在するという。

２番目は公立大学の法人化で、「企業体と同じように経営される」という点では、私立大学の台頭と同じ方向性を持つものだ。３番目は質的保証とアクレディテーション（認証評価）の強化・充実で、1996 年の国家アクレディテーション委員会（National Accreditation Board）及び 2001 年の公立大学のための教育省・質的保証部門（Quality Assurance Division）の設立を紹介している。そして最後は今後の動向として、大学レベルの遠隔教育、マレーシアの大学の国際化、産学連携、民族割り当て入学政策の再検討などを挙げている。

同じ東南アジアのミャンマーも、比較高等教育の分野ではなかなか研究対象として取り上げられない国である。文献も殆どなく、上のアルトバックや馬越の著書でも詳しくは扱われていない。同国では 1988 年にクーデターによって政権を奪取した現軍事政権が、1990 年総選挙の結果（少数民族政党を含む民主化勢力が地すべり的大勝利）を無視し続け、国際的孤立を深めている。

1988 年から 10 年以上にも及ぶ大学の閉鎖[33]も、軍事政権による非民主的施策のひとつである。大規模な学生デモや政府転覆の動きを軍事政権は極度に恐れ、そのような運動の中核となるであろう大学を閉めてしまったというわけだ。しかし、閉鎖された通常の（通学制）大学に代わって、ミャンマーでは学位取得のための通信制大学が徐々に多くの学生を集め始めた。拙稿（大西 1998）はその間の事情を含め、同国のこのような通信制大学の隆盛について報告している。

加藤（2006）はもう少し詳しく、ミャンマーの全体的な高等教育事情を紹介している。彼によれば、同国の高等教育機関は幾たびかの閉鎖にも関わらず、1988 年の 32 校から 2006 年には 156 校と約５倍に増えたという。しかしながらこの間、学生数が 6.9 倍に増えているにも関わらず、教職員数の伸びは 4.26 倍に留まっており、教員のかけもち授業増加による教育の質の低下を懸念している。

また、加藤によれば、ミャンマー政府は留学を目的とする外国人の入国にビザの発給便宜をはからないので、日本人を含む外国人がミャンマーに留学することは困難を極め

[33] ヤンゴン経済大学のＭＢＡコースなど、ごく一部の学部・学科を除く。

ると報告している[34]。しかも、実際に外国人を受け入れる可能性があるのは、ヤンゴン外国語大学、上座仏教伝道大学などごく少数の大学に限られるという。

最後に「アジアの大学に学ぶ」というタイトルで、アジア９か国・地域の大学を特集した『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号を、この分野の重要文献のひとつとして挙げておきたい。同書で取り上げられている国は、中国・韓国・ベトナムなど、既にアルトバックや馬越によって紹介されている国が多いので、ここでは中国の陰に隠れ余り触れられることのない台湾と香港の大学について記しておく。

台湾を取り上げたのは桜美林大学長の佐藤（2001）で、最近の動向として、英語教育の強化や観光・レジャーという新しい分野の専攻が国公私立ともに増加していることを紹介している。また台湾では、わが国と同じく少子高齢化が進行しており、大学全入時代を迎えて、教育・研究の質の重視という視点にも関心が高まっていることを指摘する。さらに、台湾は歴史的にアメリカとの関わりが強く、海外在住中国人（いわゆる華僑）の支援が不可欠であるが、かつてアメリカに支援を約束されて裏切られた東海大学[35]が、今では自立して経営に成功し、台湾のトップ私立大学として君臨していることを併せて説明している。

香港大学助教授の原（2001）は、来る 2011 年に百周年を迎える香港の高等教育に思いを馳せつつ、第二次大戦前に香港に初めて設立された高等教育機関＝香港大学、1963 年に設立された中文大学（今の香港中文大学）などの歴史をまず紹介している。続いて、香港における大学の数が少なかったことから、留学などによる優秀な人材の海外流出を招き、1980 年代には政府が大学教育拡大策を実施したこと、そして今や時代は少子化を迎え、増え過ぎた大学は定員割れに直面していることなどまでを報告している。

また、大学の国際化を達成するため、例えば香港大学では留学生を全学生数の 10％にすることを目指しているという。但し、その多くが中国本土からの留学生を想定しており、そのため、１）大衆化した香港の大学生と少数精鋭の中国人留学生が競争出来るのか、２）香港人が払った税金を中国人のために使うのはいかがなものか、などの心配や批判があることも併せて紹介している。

[34] この意味で、本稿第Ⅴ章における工藤の証言は貴重である。
[35] わが国の同名大学とは全く別組織。

２．　アジアの大学への留学及び学生生活

（１）アジア留学のすすめ

筆者は数年前、国益という観点から、政府が毎年海外に派遣する中央官庁職員などの「国費留学生の内、ある一定割合を欧米以外に振り向けること」を、日本人のアジア留学促進の具体的方法として提言した[36]。しかしながら、日本人のアジア留学施策をもっと積極的に展開すべし、と考えているのは何も筆者だけではない。例えば、元東京大学教授で現・静岡文化芸術大学長の木村尚三郎（2006）は、「広大なユーラシアの文化、物の見方・考え方を生活レベルで理解し、彼らとのつきあい方を全身で会得」するというような「新たな目的の留学生を、中国・インドのほか、（中略）中近東のイスラム諸国にも、国策として積極的に送り出さねばならない」と述べている。

自身も中国への交換留学の経験があり、現在は大学（院）生の留学相談を業務とする堀江（2005）は、「実際にアジアに留学し、その文化や人間関係を体感し、それを自らの言葉として表現できる学生が増え」れば、日本の大学で学ぶアジア人留学生との知識のギャップを埋めることが出来ると、アジア留学の効用を説く[37]。

また、鈴木（2006）は日本人のアジア留学が増えることで、それが日本の大学に与える影響を説く[38]。すなわち、「今日アジアを特徴づけているグローバル化とリージョナル化を同時に実現できる工夫と実行」が日本の大学にも求められるようになるというのである。具体的には、「英語教育の充実や英語での専門科目の修得だけでなく、アジア言語の教育、『アジア学』を促進するカリキュラム編成が必要」という。

立命館アジア太平洋大学教務部長の仲上（2001）の論旨はさらに明快である[39]。彼は日本人のアジア留学の意義を次の４つに整理する。すなわち、１）アジア地域の発展にとっての意義、２）留学する学生にとっての意義、３）企業などの各団体にとっての意義、そして４）（日本の）大学にとっての意義の４つである。順番に見て行こう。アジア地域の発展にとっての意義とは、日本人がアジアへ留学することによって、アジア地域の人材交流が双方向化し、ひいては地域全体の成長を促すということを指す。

２番目の日本人留学生個人にとっての意義とは、既に日本は全ての面でアジアのトップではないという現実を理解し、アジアから学ぶという姿勢を身に付けることが出来る

[36] 大西（2004）「日本と ASEAN の未来」神戸大学懸賞論文
[37] 同書 pp2-5.
[38] 同書 pp2-5.
[39] 同書 pp2-4.

ということである。第３の企業など各団体にとっての意義とは、留学によりアジアを知る日本人が増えることで、アジアを販路・市場とするわが国の企業群に効用をもたらすという観測である。そして最後の日本の大学にとっての意義とは、日本人留学生を通してわが国の人材育成や研究成果を世界に発信する、という大学本来の責務、或いは国際貢献を果たせるという意味である。

三上（2005）は工学専門家の立場から、次の３つの視点で日本人のアジア留学の効用を説く[40]。１点目は、大学卒業後「アジアの技術者との密接な共同作業に」携わるであろう工学部生には、学生時代にアジアを肌で知った経験が将来必ず役に立つというもの、２点目は、「科学技術で日本がリーダーシップをとる上で、学生が途上国の実際の問題に現場で接すること」の効用を指す。そして最後の３点目はさらにマクロな視点として、「アジア地域における地域経済統合の進展と日本の国際貢献にとって」日本人のアジア留学の効用は大きいと説く。

アジア留学そのものを推奨したわけではないものの、「二十一世紀は必ずアジアの世紀になる」「二十一世紀はアジアの発展が世界をリードする」と述べ、アジアにいち早く目をつけた人として松下幸之助がいる。高木（2005）によれば、松下が創始した松下電器では、1998 年の創業 80 年記念事業として「松下アジアスカラシップ」事業を実施し、日本人のアジア留学支援の先鞭をつけた[41]。その後、同奨学金事業は創業者の理念にも通じ、また現代的な重要性を持つとして松下国際財団に移管され、現在に至っている。

以上、各識者や民間団体の意見を紹介して来たが、ではわが国政府の公式見解はどのようになっているのだろうか。公式見解そのものではないものの、2003 年 12 月 16 日付で中央教育審議会から日本政府に答申された「新たな留学生政策の展開～留学生交流の拡大と質の向上を目指して～」がこの点で最も参考になると思われるので、ここではそれを紹介したい。この答申では、「アジアにおいても世界トップクラスを目指す高等教育機関が出現」[42]したと認めながらも、わが国に関する限り、留学生の「受け入れはアジア中心、派遣は欧米中心であり、均衡が取れていない」とその現状と問題点を認めている[43]。

---

[40] 同書 p13.
[41] 同書 p14-15.　松下幸之助の言葉も高木論文からの引用である。
[42] 本答申には何故か頁番号が付与されていない。これ以降の引用も同様。
[43] この点については筆者に異論があるので、後の第Ⅵ章で述べる。

同審議会のこれらの意見については個人的に疑義なしとしないものの、本章はあくまでも先行研究をレビューすることが目的である。筆者独自の見解や分析は第Ⅵ章に譲りたい。

（2）アジア留学の現状

さてここで、日本からアジアへ留学している人の数は具体的にどれくらいなのかを見てみよう。日本学生支援機構(JASSO)によれば、平成 17 年度に大学間の協定[44]によって海外へ留学[45]した日本人の数は以下のような数字になっている。

表２－４：地域別・留学期間別日本人留学生数

地域名	１か月未満（人）	１～６か月（人）	６か月～１年（人）	１年以上（人）	計（人）
アジア	2,542	837	1,139	209	4,727
中近東	15	0	12	4	31
アフリカ	5	4	22	5	36
オセアニア	1,232	1,430	538	51	3,251
北米	2,653	2,346	2,281	180	7,460
中南米	27	35	85	18	165
ヨーロッパ	1,827	1,511	1,444	237	5,019
計	8,301	6,163	5,521	704	20,689

（出典：2007 年１月 JASSO 発表「地域別・留学期間別日本人留学生数」統計）

この場合の「アジア」が筆者の定義と完全に一致するかどうかは不明だが、オセアニアや中近東は一応別になっているので、両者の定義はほぼ近いと見てよいだろう。そこで表２－４の合計人数を改めて見てみると、アジアへの日本人留学生数は北米、ヨーロッパに次いで第３位である。しかし、留学期間１か月未満では北米に次いで第２位、同１年以上ではヨーロッパに次いでこれも第２位である。特に、１か月未満の留学生数（2,542 人）が全体（4,727 人）の 53.8%を占めて中心的な存在となっており、ごく短期

[44] 以下 JASSO の説明。この調査でいう「協定等」とは、両大学長、学部長等の捺印又はサインを交わした正式文書だけではなく、正式文書としては両大学取り交わしていなくても、派遣に関わる事務文書が大学等に存在し、交流実績がある取決め又は覚書等も含む。

[45] 以下 JASSO の説明。この調査でいう「留学」とは、海外の大学等で受ける学位取得を目的とした教育又は研究等のほか、学位取得を目的としなくても単位取得が可能な学習、異文化体験、語学の実地習得、研究指導を受ける活動等をいう。

の留学が多いことがわかる。この点で、北米（2,653/7,460=35.6%）やヨーロッパ（1,827/5,019=36.4%）への留学とは明らかに違った傾向を見せている。

表２－５：協定による国別の主な日本人留学先

順位	国名	留学生数（人）
1	アメリカ	5,584
2	オーストラリア	2,395
3	中国	2,223
4	イギリス	2,127
5	カナダ	1,876
6	韓国	1,305
7	ニュージーランド	852
8	フランス	832
9	ドイツ	757
10	スペイン	399

（出典：2007 年１月 JASSO 発表「（協定留学による）主な留学先」統計）

前頁の表２－５は同じ JASSO の統計で、日本人協定留学生数を国別に見たものである。上位 10 位までに入っているアジアの国は、中国と韓国の２か国のみである。

しかし、これらはあくまでも協定校への留学生数である。情報が比較的行き渡っている北米やヨーロッパの大学なら、たとえ公式の協定がなくとも自ら選んで自由に留学出来る可能性は高く、実際そのような日本人は多いと思われる。したがって、協定校以外への留学も含めれば、アジアへの日本人留学生数と欧米へのそれとの差はさらに拡大するであろうことが容易に想像できる。

では、協定留学やそれ以外も含む全ての留学形態で、日本人はどのくらいアジアを目指しているのだろうか。2006 年 11 月 26 日の読売新聞（東京版９面）は、「求む！　日本人学生」と題して、日本人の海外留学者数を各大陸・地域別に紹介している。それによれば、多いところから順に、北米 42,295 人、次いでアジアの 16,028 人となっており、大陸・地域別に見れば第２位である。因みにその他の順位は、欧州 12,151 人、オセアニア 4,028 人、中南米 32 人、中東 17 人となっている[46]。上の協定留学では、北米への日本人留学生数はアジアへのそれの 1.58 倍に過ぎなかったが、この統計では（年度は違うものの）2.64 倍にもなっており、上記で予想した通りその差が拡大している。

[46] 2003 年文部科学省資料から読売新聞が推計。

次に、アジアにおける留学先の代表として中国を見てみよう。日本から中国へ留学している人の数は一体どれくらいいるのだろう。これについて OECD 経済開発協力機構（2006）はそのレポートの中で「中国に留学している学生の数に関するデータはない」[47]と断言しているが、これは正確には事実ではない。中国政府のウエブページには以下のような国別留学生数の統計がある。対比のため、アメリカの留学統計と並べて以下に掲げる[48]。

これらの統計によれば、アメリカ一国へ留学している日本人は４万人に迫る勢いであるが、中国へのそれはまだ１万人を少し超えた段階に留まっている。但し、アメリカへの留学生数では日本は第４位だが、中国では第２位であり、韓国と共に大切なお客様となっていることは記憶されて良い。

表２－６：アメリカと中国への国別留学生数

アメリカ（2005/2006）

No.	国名	留学者数
1	インド	76,503
2	中国	62,582
3	韓国	58,847
4	日本	38,712
5	カナダ	28,202
6	台湾	27,876
7	メキシコ	13,931
・	・	・
・	・	・
・	・	・
計	130 か国	564,766 人

中国（2003）

No.	国名	留学者数
1	韓国	35,353
2	日本	12,765
3	アメリカ	3,693
4	ベトナム	3,478
5	インドネシア	2,563
6	台湾	1,554
7	ドイツ	1,280
・	・	・
・	・	・
・	・	・
計	175 か国	77,715 人

（出典：アメリカは Institute of Education の下記ウエブサイト http://opendoors.iienetwork.org/　　中国は政府教育省のウエブサイト http://www.moe.edu.cn/english/index.htm）

[47] 同書 p186.

[48] 「留学生」の定義はアメリカと中国でそれぞれ違うであろう。しかし、統計の取り方、方法論の透明さから考えて前者のそれが後者のそれより緩いということはおそらくなく、そのために中国への留学生総数が高めに出ている可能性はある。

また、上の表２－６の 12,765 人という中国への日本人留学生数を、前記読売新聞のアジアのそれへの推計数 16,028 人で割れば 79.6%となる。つまり、中国は日本人のアジア留学の最大人気国であるばかりでなく、アジア留学全体の実に８割弱が中国一国で占められていることがわかる。既に独占的な存在と言ってもよいだろう。

他に重要な資料として、外務省人物交流室（2004）による「主要国・地域における留学生受入れ政策」報告書がある。この報告書では欧米の主要国の他に、アジアから中国・韓国・インド・インドネシア・シンガポール・マレーシア・台湾の実情が紹介されている。各国・地域の政策内容は別の項に譲るとして、ここでは留学生の受け入れに関する数字だけを紹介したい[49]。既に紹介した中国を除けば、以下のような現状となっている。

表２－７：アジア主要国・地域の日本人留学生受け入れの現状

国名	留学生受け入れ総数（人）	うち日本人（人）	割合（%）	順位
韓国	12,314	2,486	20.2	２位
インド	8,145	65	0.8	８位以下
インドネシア	1,763	151	9.0	３位
シンガポール	学部だけで 9,000 人超	不明	不明	５位以下
マレーシア	5,239	21	0.4	７位以下
台湾	7,331	1,832	25.0	１位

（出典：外務省人物交流室（2004）「主要国・地域における留学生受入れ政策」各国・地域のデータから筆者作成）

（３）わが国個別大学のアジア留学戦略

次に、わが国における個別の大学が、独自に行っているアジア留学促進策にはどのようなものがあるのか、以下順に見て行こう。まず、高橋（2005）は、その一例として早稲田大学の取り組みを紹介している[50]。中でも特に目を引くのは、中国の名門・北京大学や復旦大学とのダブルディグリー・プログラム、そしてシンガポールのナンヤン工科大学との MBA や MOT ダブルディグリー・プログラムである。

[49] 本調査は調査対象各国の統計に基づいており、いずれも発行年は 2003 年。
[50] 同書 pp6-9.

その他、小中（2001）は九州共立大学・九州女子大学による華東師範大学・大連外国語学院への短期留学推進制度を[51]、松尾（2001）は成蹊大学が実施する北京大学への短期派遣留学を[52]、鈴木（2001）は横浜市立大学の例を挙げ、同市と友好都市協約を結ぶ上海市への学生派遣を[53]、長田（2001）は名古屋大学とアジア諸大学との学生交流の試みを[54]、服部(2001)は年間 100 人以上の学生をアジアに派遣するという南山大学短期アジア留学プログラム（NAP）を[55]、近江（2001）は明海大学と中国の複数大学との学術協定を[56]、三上（2005）は長岡技術科学大学のハノイ工科大学とのツイニング・プログラムを[57]、鯉渕（2006）は亜細亜大学が実施する中国・大連でのインターンシップと語学学習を組み合わせた「アジア夢カレッジ：キャリア開発中国プログラム」を[58]、山田（2006）は東海大学とタイ・モンクット王ラカバン工科大学との長年にわたる交流をそれぞれ紹介している[59]。

その中でも特に小中は、日本人のアジア留学に関し、2003 年末に中央教育審議会が文部科学省に答申した「アジア太平洋大学交流機構(UMAP) が開発した UMAP 単位互換方式(UCTS)の活用が有効」という見解を既に 2001 年の段階で表明しており、注目に値する。

以上の例はどれも基本的に成功している、という内容で紹介されているが、所澤（2006）は貴重な失敗例を報告している[60]。彼は「アジアへの交換留学は不振」とはっきり断じる。所澤の勤務する群馬大学では、アジアの大学との「交換留学制度を活用する学生はきわめて少ない」という。そしてその理由として、日本が先進国だからという表層的なものでなく、次の３つの構造的な背景を挙げる。筆者なりにまとめれば、１）日本人学生はアジアの言語が出来ないこと、２）日本人学生のアジアに関する知識の不足、そして３）留学することで卒業が遅れることへの拒否感である。これらの点で、例えば台湾から群馬大学へ留学して来る学生たちは全く意識が違う、と彼我の学生の志の差を嘆いてみせる。

---

[51] 同書 pp12-13.
[52] 同書 pp14-15.
[53] 同書 pp16-17.
[54] 同書 pp14-15.
[55] 同書 pp16-17.
[56] 同書 p19.
[57] 同書 pp10-13.
[58] 同書 pp6-9.
[59] 同書 pp14-17.
[60] 同書 pp10-13.

また、現段階ではまだ成否はわからないものの、注目に値する試みとして神戸大学の「サンドイッチ・プログラム」がある。2007 年３月２日の読売新聞[61]が「国際協力のプロ育成」と題してその試みを紹介している。同記事によれば、このプログラムは「修士・博士両課程を併せた５年計画でじっくり院生を育てる試みで、発展途上国などへの留学も組み込まれている」というもの。留学先は発展途上国ということなので、アジアだけには限らないが、地理的・精神的な近さやコストの安さから、アジアの途上国を選ぶ学生は多いものと思われる。実際、記事ではインドやインドネシアの例が紹介されている。留学期間は修士課程の２年目に、１年から２年を予定しているとのことである。

単なる学生の派遣・交流というところから、教員の交流やカリキュラムの共通化まで枠を広げた、アジアの大学との共同カリキュラム開発に関しては岡崎（2005）の報告がある。岡崎は、論文執筆の前年 11 月に九州大学で開催されたアジア学長会議において、会議に参加する中国科学技術大、香港中文大、ハノイ農業大、シンガポール国立大、チュラロンコン大などを対象に、国際共同カリキュラムもしくは教育プログラムについて、その実施状況を調査した。その結果、残念ながら「東アジア、及び東南アジアの高等教育機関で海外の諸大学と連携して共同カリキュラム・教育プログラムが積極的に行われていないのは、日本と韓国だけ」と指摘している。ここで言う「国際」はもちろんアジアのみを指すものではないものの、国を越える大学連携の試みにわが国の大学が他の多くのアジアの国ほど熱心でない、という事実は記憶されてよい。

（４）アジア各国の留学生受け入れ策

この項では日本人留学生以外にも目を向けて、アジア各国の留学生政策について、その受け入れ策を中心に述べてみたい。最初に参考にするのは、先に紹介した外務省人物交流室（2004）の「主要国・地域における留学生受入れ政策」である。まずは中国を見てみよう。中国にとっての留学生受け入れはいわば国策であり、「規模の拡大、レベルアップ、質の保証、規範の管理」をその課題として挙げている。最初の課題である「規模の拡大」については、2007 年に留学生受け入れ総数 12 万人という目標を掲げている。重点国・地域は特にない[62]。

[61] 東京版第 15 面。
[62] 但し第Ⅴ章のインタビューで明らかになるように、実態としては発展途上国の盟主たらんとしてアフリカからの留学生を多く受け入れているようである。

人口では中国に並ぶ大国インドはどうであろうか。哲学や理念を重んじる国としては意外だが、この国に関する限り、留学生受け入れの目的は明確でなく、数値目標や政策は存在しない、という。重点国・地域が存在しないのは中国と同じである。

これに対し、韓国はより戦略的な方策を明確にしている。この国が留学生を受け入れる目的は、１）親韓・知韓人材の養成を通じた国際社会での影響力増進、２）韓国企業の海外進出基盤強化、３）教育の国際化、世界化を通じた教育競争力の強化の３つである。そして数値目標として 2010 年までに５万人という計画がある。受け入れにあたっての重点国・地域としては、「アジア系学生、特に急増している中国留学生に関心が高い」とされる。

台湾も目的や数値目標のはっきりしている国である。同国では、「国際教育交流及び国際親善の促進、国際理解及び台湾理解の促進」を留学生受け入れの目的として掲げ、2010 年までに留学生数倍増（15,000 人が目標）を目指す。受け入れに際しての重点国・地域は、当面ベトナムを特別優先扱いとし、その他に欧米と日本からの留学生増を目指している。

このように、外務省の調査によれば中国や韓国、台湾の留学生政策は「受け入れ」という受身または中立的なものでなく、むしろもっと積極的な働きかけを表すものとして「獲得」という言葉を使った方が正確のようである。この点、杉村（2004）は「今日、アジア諸国は引き続き留学生を送り出しながら、自国の高等教育の拡充と留学生受け入れにも着手しており、日本人学生も重要なターゲットとみなされるようになっている」と述べ、好むと好まざるとに関わらず、上記で述べたようなアジア各国の留学生政策に日本が既に巻き込まれてしまっている現状を報告している。

外務省の報告書以外で最も情報が多いのは、やはり中国の留学生戦略に関するものである。大塚（2006）は、1995 年に設立された政府の専門機関・国家留学基金会が海外からの留学生招聘事業を行っていることを紹介し、「留学生受入れ国への変貌」を遂げた中国が既に 150 か国余りと協定を結んで中国政府奨学金を与えている、という事実を挙げている[63]。また、中国の留学生政策を定期的にウォッチしている黒田（2003、2005、2006）は、中国の留学生政策の変貌を「『留学産業』としての留学生教育から『中国教育ブランド化戦略』へ」と表現している[64]。特に、「留学生向けの学位プログラムを設

[63] 同書 pp10-13.
[64] 黒田（2006）「グローバル化時代における中国の対外教育戦略」『留学生教育』11 号、p5.

置するなど、留学生を受け入れる新たな受け皿を提供することにより留学生受け入れ数を拡大してきた」ことこそ「中国の戦略的施策である」と指摘する[65]。

韓国については鄭（2006）の詳しい報告がある[66]。鄭によれば、韓国の留学生誘致政策は、それを産業のひとつとして位置づけるオーストラリアの影響を多分に受けているという。そして、具体的な誘致策としては、奨学金の額を増加させたり、学費を全額国費支給としたり、といった新たな改善点を同時に紹介している。また、個々の大学における留学生獲得策としては、同国の私立・清州大学による中国・日本・モンゴルからの受け入れ本格化、及び国立・ソウル大学の特別外国人留学生受け入れプログラムを例として挙げている。但し、後者のソウル大学の試みについては、「国費奨学金以上の好条件であったが」、募集人員 63 人のところ、初年度(2006)「の募集結果は二〇人に過ぎず、募集率[67]三三%の惨めな実績であった」とその失敗を嘆く。

横田（2006－１）はシンガポールで実施されている Singapore MIT Alliance（SMA)という革新的な試みを紹介している[68]。これはシンガポール MIT 連携プログラムと呼ばれるもので、シンガポール国立大学とナンヤン工科大学という同国を代表する２大学に、アメリカの名門マサチューセッツ工科大学（MIT）を加えた工学分野の共同プログラムである。このプログラムでは、MIT とシンガポールの２大学の学位が取得出来る他、全学生にシンガポール政府から奨学金が支給されるため留学生の人気を呼んでおり、2003 年時点で全学生の３分の２が留学生であるという。

シンガポールについては、池田（2006）も上で紹介した MIT の他、ペンシルバニア大学、シカゴ大学、欧州経営大学院など欧米の大学との共同プログラム群を紹介し、これら一連の素早い動きが 1997 年のゴー・チョクトン首相（当時）による「東洋のボストン（Boston of the East）」構想[69]にあることを紹介する[70]。また、これら欧米大学のシンガポール進出を促進するのと合わせ、旧来の伝統的大学であるシンガポール国立大学やナンヤン工科大学に課していた 20%という留学生枠を撤廃する、という動きも紹介している。

---

[65] 前掲書 p7.
[66] 同書 pp18-21.
[67] 競争率または定員確保率のことか。
[68] 同書 p3.
[69] アメリカのボストン市のように、シンガポールを世界から多くの高度人材が集まる国際学術都市にする、という国家的ビジョンのこと。
[70] 同書 pp14-17.

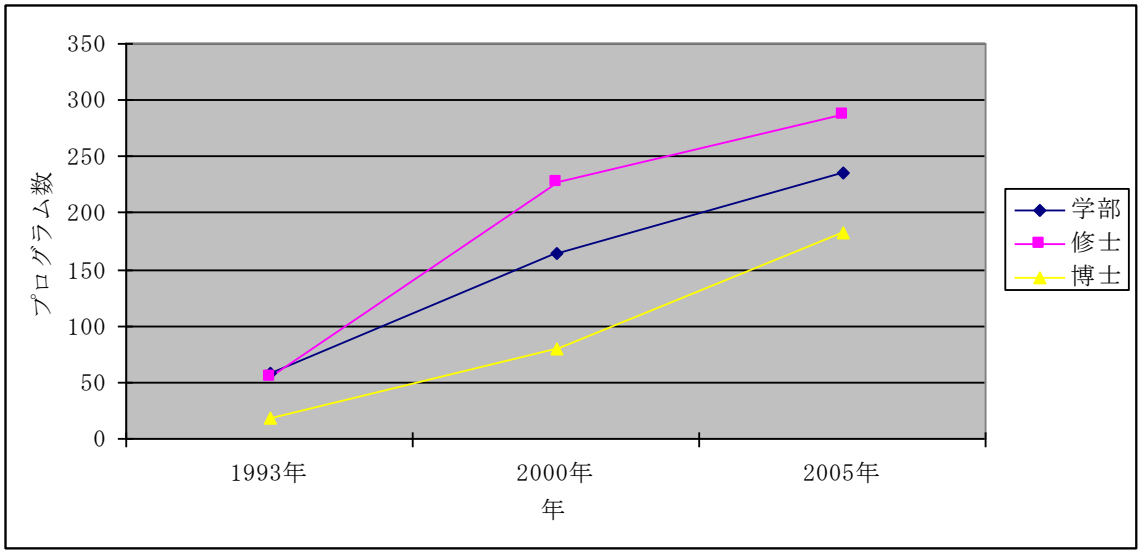
マレーシアでの同様の試みを紹介しているのは、杉本（2006）である。周知のように、マレーシアは国家目標として 2020 年までにイスラム国家として初の先進国入りを達成すると宣言している。それには短期間で多くの知的労働力が必要であり、そのために留学生を海外から獲得することを真剣に考えるようになった、と杉本は言う。具体的には、欧米の大学とのツイニング・プログラムを取り入れ、マレーシアにいながらにしてより低廉な価格で欧米の大学の学位取得を可能とすることで、「欧米の大学の学位を目指す中国人やインドネシアの学生を留学生として受け入れ」ているということだ。この点、杉本は「マレーシアで学ぶ欧米大学コースのアジア人留学生とはいったいどの国の留学生に分類されるのか」と、伝統的な概念には収まり切れない現実に思いを馳せる。

スネート（2006）はタイの留学政策について、インターナショナル・プログラム（IP）の重要性を指摘する[71]。最初の IP は、1990 年から 2004 年の第一次長期高等教育計画で導入が提言され、現在に至るまで徐々に具体化されていったという。IP の条件は、第一に主に英語を中心とする外国語を教授言語として用いることとされる。これは、留学生の獲得と共に、タイの学生に外国の教育水準と同等の教育を提供することが目的のようである。

次頁の図２－１のように、その数は年々増加しており、全体としては大学院、中でも修士課程がその中心となっている。大学設置者別に見れば、国立大学においては大学院が、私立大学においては学部が中心となっているとのことである。IP は導入した各大学が自由に単価を設定出来るため、通常のコースに比べ授業料がほぼ 10 倍となっていることも特徴のひとつである。

[71] 同書 pp26-31.

図２－１：タイの大学におけるインターナショナル・プログラム数



（出展：スネート（2006）「タイにおける高等教育の国際化と留学生施策の動向」『留学交流』2006 年２月号 p27 の表から筆者作成）

以上は留学生受け入れに関する国家の施策という、いわばマクロな視点の話であったが、現地で実際に留学生を受け入れる大学やその職員というミクロな視点も重要である。横田（2004）らは、中国・韓国・タイにおける留学生受け入れのための専門職団体について紹介している[72]。中国では Chinese Association of Universities and Colleges for Foreign Student Affairs（CAFSA）、韓国では Korean Association of International Educators（KAIE）及び Korean Association of Foreign Student Administrators（KAFSA）、そしてタイでは Thai Association of Foreign Student Affairs（TAFSA）がそれで、順に 1989 年、1998 年、1999 年、2000 年の設立である[73]。

これらの機関の構成メンバーは、主に大学や短大、専門学校で留学生受け入れを担当する職員や教員であるが、それぞれ参加資格に微妙な差異がある。例えば個人でも自由に参加可能な KAIE に対して、CAFSA では留学生受け入れ実績のある大学のみをその会員としており、2004 年現在の参加校は約 250 にのぼるという。

[72] 同書 pp333-336.
[73]因みにこれらの機関はいずれも、1948 年にアメリカで設立された同様の専門職団体 Association of International Educators（NAFSA）を模範としており、日本にも 1968 年設立の Japan Network for International Education（JAFSA）があることはよく知られている。

しかしいずれにしろ、少なくともこれらの国々ではより好ましい留学生対応策・受け入れ策が日夜研究されている、ということを示しており、日本人がアジアへの留学を考える際のひとつの目安にはなりそうだ。

（5）アジアの大学での学生生活

では、アジアの大学における日本人留学生はどのような暮らしをしているのであろうか。手始めに中国を見てみよう。近藤（1997）は中国の外国人留学生について、「中国の留学生の一年は九月にはじまる。三〜四月頃から母国の留学斡旋センターなどで手続きをはじめ、七月頃、志望の大学から入学許可がおりる。以前は入学に試験も制限もなく、入学許可を取るのものんびりしたものだったようだが、ここ数年、状況が一変している。どの大学も受け入れる留学生に学歴や中国語能力などの条件をつけたり、早々に留学生の受け付けを締め切ってしまうようになったのである」[74]と紹介し、近年における留学生数の急激な伸びという社会的変化と、それを受けた周囲の変わり様を報告している。

近藤は続けて、「その理由を一言で言えば、やって来る留学生側と受け入れる大学側の需給関係が完全に逆転してしまったからである。すなわち、中国市場ががぜん注目をあびる中、世界中から中国へ学びに来る留学生はうなぎ登りに増えているのである」[75]と言う。そしてその理由を、近藤の在籍する北京大学に留学して来たアメリカ人ハーバード大生の「世界中のエリート学生がハーバードに留学してくるが、当の我々が最も留学したいのが中国だ」[76]という言葉を引用して解き明かしている。

そうして苦労して入学した中国の大学では、しかし余りにも政治的な自由がないことを、沖園（1993）が自らの体験から紹介している。沖園が北京大学の学生だった 1980 年代後半、キャンパスで当局の不正を追及していたC君という現地の男子学生がいた。しかし、ある時公安に呼び出されその後二度とキャンパスには帰って来なかったという。「結局どうなったのかだれも知らず、噂によると、造反学生の首領と見られたC君は自殺したとも、消されたとも、投獄されたともいわれた」[77]らしい。

[74] 同書 p21.
[75] 同書 p22.
[76] 同書 p23.
[77] 同書 pp65-66.

同時に沖園は、中国における外国人留学生の地位について「留学生のなかには、スパイがまぎれ込んでいると当然予想できるので、留学生と話をするときは十分注意すること。国家の秘密に関連したことは、絶対に話題にしない。国家の研究中の事柄も話してはいけない」[78]という大学当局のお達しが中国人学生に対してあったことを報告している。合わせて、このような留学生の動向を探るために、中国人学生の同室者を陪住（ばいじゅう）と呼ばれるスパイとして潜入させるようなこともあったと言う。

また別の観点で、工藤（2001）は日本と中国との歴史的な経緯から、北京大学の日本語学習者であるＡという女学生に「日本語を勉強する私の悩み、それは仇の国の言葉を勉強することです」[79]と言われて大きな衝撃を受けたことを記している。

これら以外にもいわゆる留学体験記的なものはかなり数があり[80]、例えば藤田（2001）は上海中医薬大学の本科生として学んだ体験を[81]、川口（2001）は首都師範大学漢語本科生としての体験をそれぞれ披露している[82]。中には千葉大学（2006）のように、留学を経験した学生自身による留学体験記集（経験者座談会も収録）を発行しているところもある。

（６）その他―アジア留学ガイドブックなど

さて、留学を志した日本人がまず手に取るのは、留学のためのいわゆるガイドブックであろう。現在のところ、書店の棚の大半を占めるのは欧米留学のためのものであるが、アジア留学のガイドブック的なものも、以前から何点か発行されている。内容は欧米版のそれと同じく現地語学学校のリストであったり、留学体験中の学生による現地報告であったり、現地の生活指南であったりとごく他愛ないものが多い。詳述はしないものの、どのようなものがあるかについては短く触れておきたい。

この種のガイドブックの草分けとして、まずアルク出版社の「アジア留学事典」を挙げておく。1999 年版では、中国及び韓国を中心に、タイやベトナムなどがアジアの留学先として取り上げられている。翌 2000 年度からはタイトルを「中国・韓国留学事典」と改め発行されたが、2002 年度版を最後に休刊となっている[83]。また、1995 年から

[78] 同書 p117.
[79] 同書 p14.
[80] タイへの大学院留学体験を報告した拙稿（大西 2006）も是非参照されたい。
[81] 同書 pp18-19.
[82] 同書 pp20-21.
[83] アルク社編集部の話では、当時商業的に採算が合わなかったとのことであった。

2001 年にかけてダイヤモンド社から「成功する留学　中国・韓国・アジア留学」が出版されている。けれど、これも 2001 年発行の「成功する留学　中国・韓国・アジア留学（2002-2003）」が最後となっている。

但し、中国のみに関してはここに来て「中国留学サクセスブック　2006-2007」や「中国留学ガイドブック」など複数のガイドブックが発行されるようになり、一気に同国への留学が身近になって来た観がある。中でも日本学生支援機構・留学情報センターの相談員である秦（2000）が自ら執筆した「中国留学ガイドブック」は、内容量が非常に豊富かつ正確で、現在のところこの分野におけるひとつの頂点であろう。他の国に関しては、このように情報の整備された留学ガイドは残念ながら余り例がなく、各国大使館などの限られた情報に頼らざるを得ないのが現状である[84]。

３．　就職と企業の採用行動

（１）留学と就職という視点

この項ではまず、日本人学生が留学するに際し、どの程度真剣に就職という問題を考えているかを見てみたい。日米教育委員会・留学相談サービスが 2005-2006 年に実施した「アメリカ留学志望理由に関する調査」[85]によれば、日本人がアメリカ留学を志す理由上位 10 項目は以下の順となっている。

Ａ．学部課程志望者

１）英語力を向上させたい。
２）アメリカの大学で学ぶ経験をしたい。
３）国際性を身に付け、視野を広めたい。
４）様々な人々との交流を通じてネットワークを築きたい。
５）留学経験を将来の仕事に役立たせたい。
６）日本より学ぶ機会が多く、教育内容が多様で魅力があるから。
７）将来、外資系企業、又は外国で働きたい。
８）外国、特にアメリカで暮らすことに憧れていた。
９）学位を取得したい。

[84] JASSO 留学情報センターも多くの情報を所有している。
[85] http://www.fulbright.jp/study/howto/t1-college03.html

10 ）ある特定の専門分野の教育の質・内容が日本より優れているから。

Ｂ．大学院課程志望者

１）国際性を身に付け、視野を広めたい。

２）英語力を向上させたい。

３）留学経験を将来の仕事に役立たせたい。

４）アメリカの大学で学ぶ経験をしたい。

５）様々な人々との交流を通じてネットワークを築きたい。

６）学位を取得したい。

７）ある特定の専門分野の教育の質・内容が日本より優れているから。

８）日本より学ぶ機会が多く、教育内容が多様で魅力があるから。

９）将来、外資系企業、又は外国で働きたい。

10 ）日本にはない専門分野を学びたい。

この調査には語学留学が含まれておらず、また世界最大の留学生受入国ではあるにせよ、アメリカ一国のみを対象にしたものではある。けれども、他地域における同様の大規模調査がない現状では、日本人留学生の一般的な傾向を知るために大いに参考となると思われる。

まず、「留学経験を将来の仕事に役立たせたい」との回答は、学部で５位、大学院で３位といずれも上位を占めている。加えて、同項目よりも上位にある「国際性」「英語力」といった項目についても、それらを全く就職と切り離して考えているとは想像しにくく、この意味で結局は留学には就職という視点がやはり欠かせないのである。

（２）学生の側から

次に留学生以外の就職意識を見てみよう。安田（1999）は一般的な大学生の就職について、何が役に立ったかを活動の前後で比較している（表２－８）。男子学生では 10 項目中８項目、女子学生では７項目について、当初期待していたほど役立たなかったとしている。学生たちの驚きや失望が目に見えるようだ。海外留学の体験はおそらく「課外活動」という項目に含まれるのであろうが、これについては男女共に期待していたほどではなかったという結果となっている。

表２－８：就職活動に役立つものの変化

	男子学生（平均値）				女子学生（平均値）		
	活動前	変化	活動後		活動前	変化	活動後
大学名	3.71	↓	3.53		3.75	↓	3.66
授業内容	2.53	↓	2.24		2.75	↓	2.69
成績	2.88	↓	2.00		2.91	↑	3.00
課外活動	3.94	↓	3.63		3.58	↓	3.32
資格	2.12	→	2.12		2.63	↑	2.75
大学関係の友人	3.29	↓	3.12		3.41	↓	2.22
個人的な縁故	2.69	↓	2.25		2.75	↓	2.47
体格・容姿	3.76	↓	2.82		3.41	↓	2.78
大学就職部	3.71	↓	3.47		4.19	↓	3.69
就職情報誌	3.65	↑	3.76		3.81	↑	3.88

（出典：安田雪（1999）「大学生の就職活動：学生と企業の出会い」中央公論新社、p137.）

安田はさらに同じ文脈から、学生の側に立って、企業の面接時などにおける「採否の理由がわからない」との主張を紹介する[86]。友人のＡ君が受かって自分が落ちたという理由がまるで推測できず、次回に向けての判断・反省材料がないというのだ。そして結局、学生に「『ああ、もっと勉強しておけば良かった』というオーソドックスな反省が生まれることはまれ」で、勉学意欲にさえつながらないという。多くの企業が口にする「人物本位の採用」の学生にとっての不可解さを、安田はここで指摘する。

（３）大学の側から

同じく安田（1999）は大学の側にも立って、次のように企業の選抜システムを批判する[87]。すなわち、産業界が大学の教育に対する不満・不信を持つ→企業は学生の専門分野や成績を基準に採用を行わない→大学は学生の教育に熱意を失う→大学の教育の質が低下する（または上昇しない）→産業界が大学の教育に対する不満・不信を持つ、という絶えざる負の循環である。したがって本質的な問題は、大学教育の内容を評価しない産業界の体質であると説き、それこそが一流大学のブランド価値の固定化や大学生が真面目に勉強しないという状況を作り出すという。

[86] 同書 pp107-115.
[87] 同書 pp120-125.

しかし大学とて一枚岩ではない。元明治大学就職事務部長の西（1995）は、成績の悪い学生に向かってこうアドバイスする。いわく、「どんなに成績が悪くても、その必然的な理由があって相手を納得することができれば（原文ママ）、挽回のチャンスはあるのである。（中略）その必然的な理由とは、たとえば運動部にずっと打ち込んでいたとか、一年三六五日のうち三〇〇日は山に登っていたとか、または運動部の活動にかまけて勉強をやっていなかったとか、そういう類のことだ」[88]。成績の悪い理由に運動部が２度出て来るのもおもしろいが、成績なんてたかだかそれくらいの優先順位、とでも言わんばかりの発言が、大学側から出ていることは注目すべきだろう。

また、西は「採否の理由がわからない」という学生の不満・不安に対しても、明快にこう答える。いわく、当の企業側が「採用など運に左右されることもある」と言っているのだから、たとえ内定が取れなくても「運がなかったときっぱりあきらめ」、「内定をとれなかった理由をあれこれ詮索している暇があったら、つぎの活動をしたほうがいい」とアドバイスするのである[89]。

（４）企業の側から

学生と大学の立場に立って企業を批判した安田（1999）は、今度は企業の側の声も紹介する[90]。企業の採用担当者に聞き取り調査をしたところ、最も不満が大きかったのは大学生のマナーや一般常識の欠如であるという。挨拶や言葉使いなど、大学は一体何を教えているのだ、というわけだ。企業の採用担当者はさらに続けて、学生の成績はあてにならないので殆ど見ないともいう。安田によれば、そこには、１）大学で学んだことは実社会や企業では役に立たない、２）企業における業務遂行能力の優劣を判断・推測するのに、大学の成績はそもそも適当な指標でない、という２種類の考えがあるという。

日本労働研究機構（1999）は、文理双方の新規学卒者を採用する上で、企業がどのような視点で人を評価しているかを調べている。これを見れば、３（２）で述べた「人物本位の採用」の中身が実際にはどのようなものか、多少なりとも理解出来るのではないだろうか。

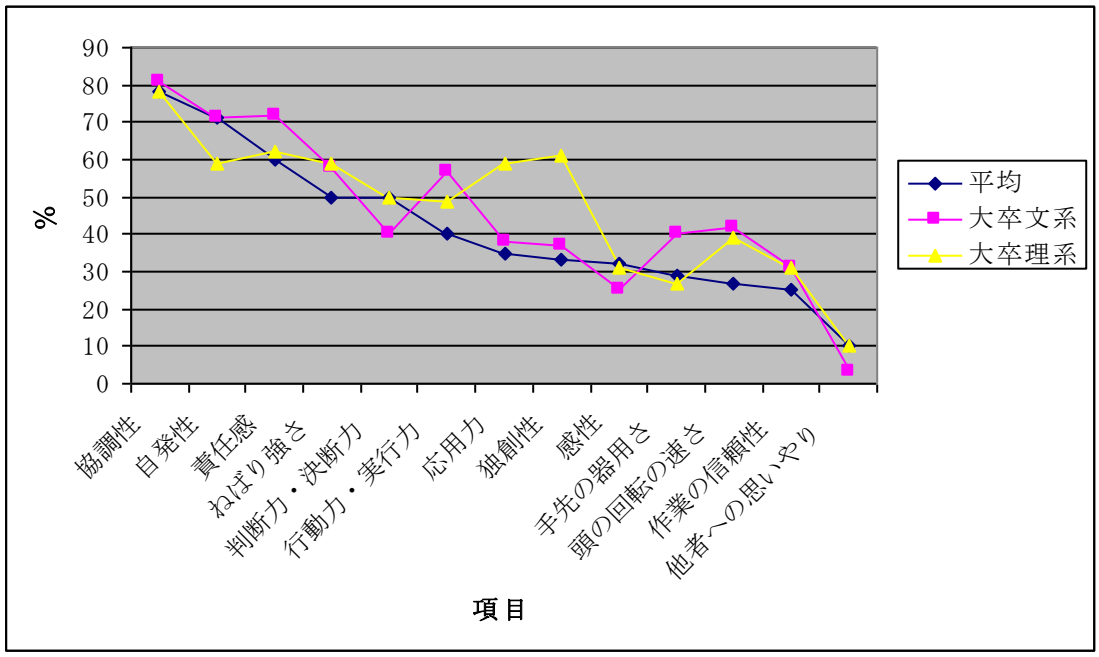
つまり、次頁の図２－２で見る限り、企業が最も評価するのは文系・理系を問わず「協調性」である。その一方で、社内のチームワークや人間関係を考える上で不可欠と

[88] 同書 pp162-163.
[89] 同書 pp176-177.
[90] 同書 pp115-119.

も思える「他者への思いやり」[91]が、本調査では最下位となっているのは奇異な感じもする。また、理系における「応用力」や「独創性」への評価が、平均・文系のいずれとも最も大きく乖離していることも併せて興味深い。

同じ調査では、文理双方に関して正社員の規模別（300 人未満及び 300 人以上）でそれぞれの違いを調べているものの、文系・理系共にグラフはほぼ相似形を描いており、採用の重点項目について企業規模による大きな相違は見られない[92]。目視での唯一の例外と思えるのは、理系の「独創性」の項目で、300 人以上規模の企業の方がそれ未満の企業より 10%以上高い数値を示している。

図２－２：学歴別に見た新規学卒者の採用時に重視する性格や特徴



（出典：日本労働研究機構（1999）「職業能力評価および資格の役割に関する調査報告書」p80 の２表より筆者作成）

また、日本労働研究機構によれば、業種別による同じ内容の調査では以下Ａ及びＢのような結果が出ている[93]。　なお、これらの結果は全て統計的な有意差に基づいている[94]。

[91] 原典では「他社への思いやり」となっていたので、筆者が訂正した。
[92] 同書 p81.
[93] 同書 pp83-85.

Ａ．大卒文系

- 「感性」について、建設業では人気薄、製造業では人気大
- 卸売・小売・飲食店では「他者への思いやり」人気薄なるも、「行動力・実行力」人気大
- 運輸・通信では「作業の信頼性」人気大
- サービス業では「作業の信頼性」「他者への思いやり」人気大、「行動力・実行力」人気薄

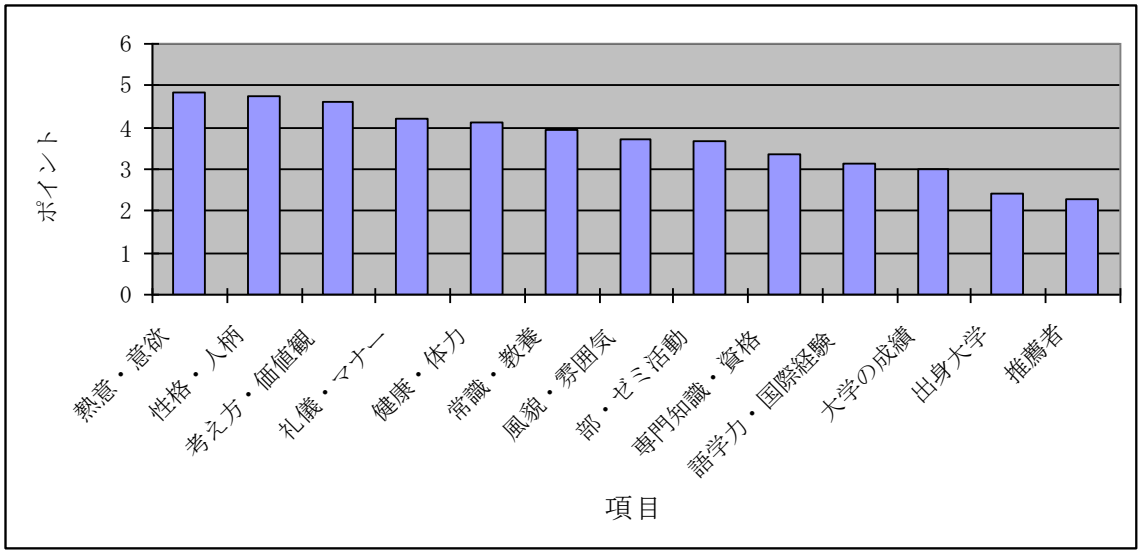
Ｂ．大卒理系

- 建設業では「協調性」「ねばり強さ」「行動力・実行力」人気大、「独創性」「感性」は人気薄
- 製造業では「独創性」と「感性」人気大、「協調性」「責任感」「行動力・実行力」は人気薄
- 金融・保険・不動産では「協調性」「他者への思いやり」人気大
- サービス業では「責任感」人気大、「ねばり強さ」人気薄

永野（2004）らは、企業の採用行動における語学力や国際経験に関して、ひとつの回答を提示している。まず、永野らは上場企業や大手外資系企業を中心に独自のアンケート調査を実施し、新卒学生の採用時に重視する項目を６ポイントを満点として素点化した（下記の図２－３）。

[94] 日本労働研究機構によれば、これらの差は χ^2 検定によって調整済み残差を算出し、その値＋1.7 以上であれば人気大、-1.7 以下であれば人気薄とした、とのこと。

図２－３：採用の評価基準の重視度（サンプル数 625 社）



（出典：永野仁編（2004）「大学生の就職と採用」中央経済社、p55.）

上のグラフで見るように、企業全体の調査結果では、「熱意・意欲」「性格・人柄」といった従来型採用の重要項目が第１位と第２位に来る。そこで永野らは、全体を幾つかの企業群に分類した上で、相互を比較することを試みる。

最初に、大卒文系について「新卒者にも即戦力が求められる」と回答した企業を即戦力採用企業（323 社）とし、それ以外の非即戦力採用企業（123 社）との比較において、各項目の重視度を統計学的に比較した。するとそこでは、「専門知識・資格」「語学力と国際経験」のみで有意差が見られ、前者の企業群がこれら２項目をより重視していることが明らかとなった。

また永野らは、学生の潜在的能力を重視する従来型の採用とは違って、主に顕在的能力や行動特性を重視するコンピテンシー採用が、外資系企業を中心に近年広まってきていると言う。そこで永野らは、このような採用方法をとる企業をコンピテンシー企業と呼び、そうでない企業群を非コンピテンシー企業と呼んだ。そして、即戦力採用企業と非即戦力採用企業の時のような、合理的に説明可能な差が計測されるか否か、コンピテンシー企業と非コンピテンシー企業との比較も続けて試みた。

まず、全 619 社中、コンピテンシー面接を採用しているなどと解答した前者の企業群は、わずか 71 社（11.5%）、後者が 518 社（88.5%）。そして、採用にあたってどのような項目を重視するかについて両者の差を比較したところ、「専門知識・資格」でこ

そ前者が後者をわずかに上回ったものの、「語学力と国際経験」では驚いたことに後者の方が若干上であった。つまり、コンピテンシー企業と非コンピテンシー企業との差は、即戦力採用企業と非即戦力採用企業との差と必ずしも同じではない、ということである。

４． 留学経験者の追跡調査

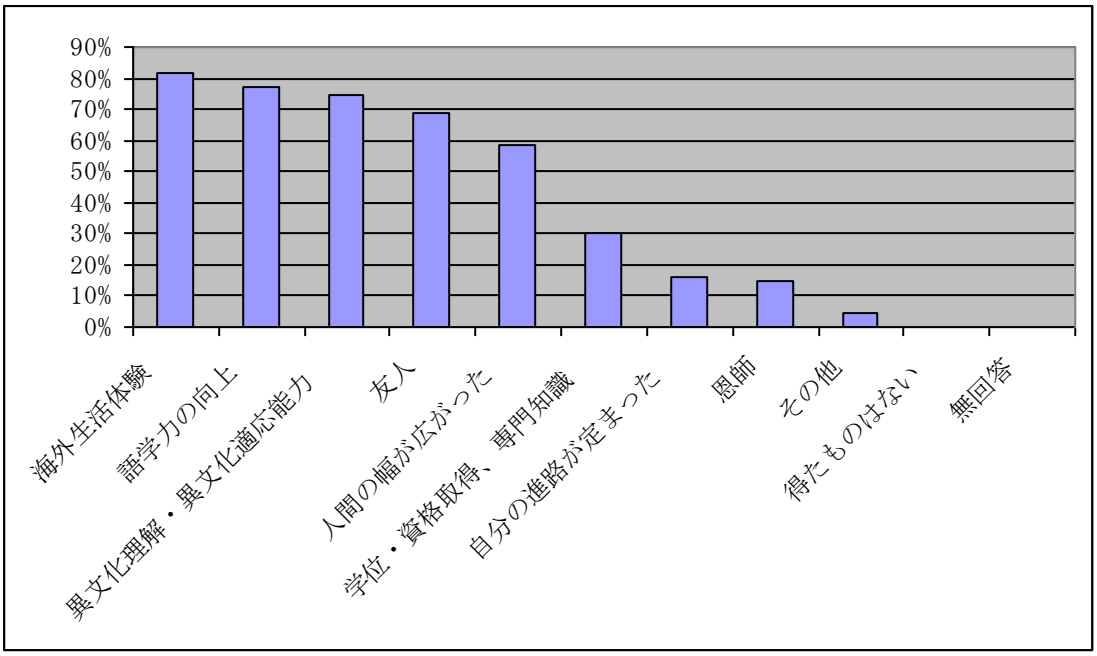
留学経験者を対象とした近年の追跡調査としては、JASSO 留学情報センター（2005）のものが最大であろう[95]。インターネットによる大規模な調査のため様々な層が回答しており、留学先も欧米一辺倒ではない。人数で見た留学先国の第１位はアメリカ、第２位はイギリスで、それぞれ 38.8%、16.9%と多くを占めているものの、中国が 6.8%、韓国が 3.7%、その他アジアが 2.4%を占めており、回答者の 10 人に１人はアジア留学経験者である[96]。

幾つかの質問の中で、１）留学で得たものは何か、２）留学は現在の職業に業務面で役立っているか、そして３）留学経験は今後の人生に役立つか、の３つにつき、第Ⅴ章のインタビューとの関連で紹介したい。

まず、留学で得たものについては以下のような結果になっている。

[95] 調査対象者数 1,543 件、全回答者 12,829 件。2005 年１月及び２月調査実施。
[96] 同調査報告書 p20.

図２－４：留学で得たもの（複数回答）

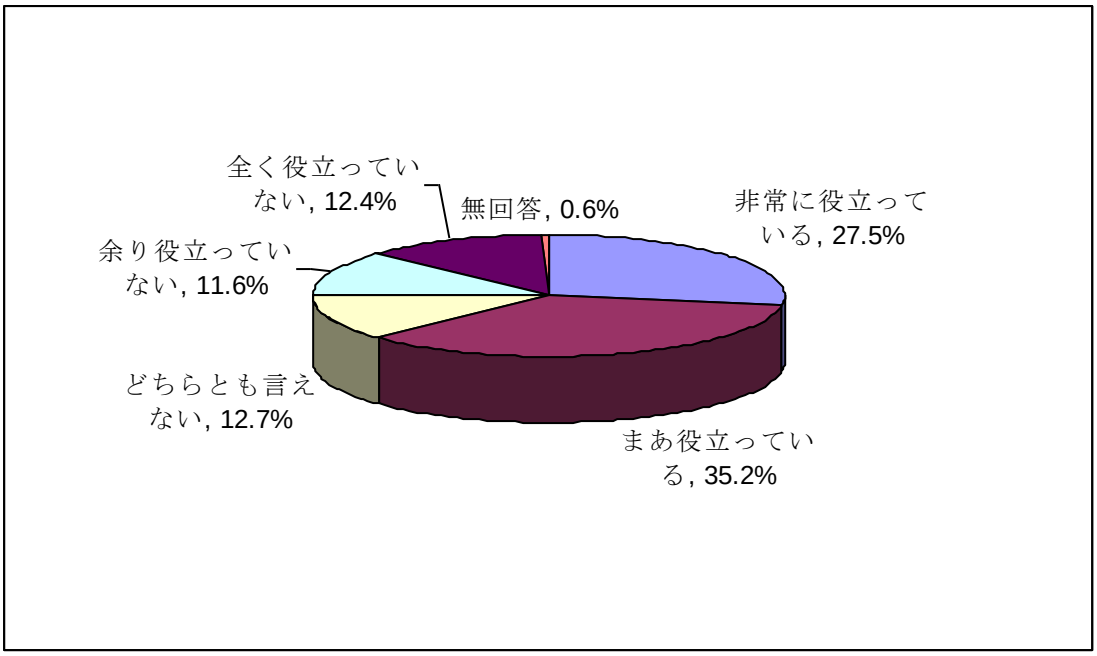


（出典：『留学交流』2005 年５月号、p23.）

また、留学が現在の職業に業務面で役立っているかどうかについては以下の図２－５のような結果である。

最後に、仕事に限らず、留学経験は今後も自らの人生全般に役立つかという質問には 95.3%が役立つと回答している（4.5%が役立つと思わない、と回答）。仕事への役立ち方では６割強に過ぎなかった好意的回答が、ここでは９割を超えており、より広い視野で留学体験を好意的に捉えている様子がうかがえる。

図２－５：留学は現在の職業に業務面で役立っているか



（出典：図２－４に同じ）

第Ⅲ章：調査の方法論

１．　本調査の構成要素

本調査は、１）企業アンケート、２）アジア留学経験者インタビュー、という２つの主要な項目から構成される。以下、それぞれの目的と内容、分析方法について説明する。

２．　企業アンケート

（１）アンケート調査の目的

わが国の代表的な企業が、日本人のアジア留学経験者を採用するに際し、その前後でどのような評価を下しているかについて、欧米留学経験者に対する評価と比較しながら明らかにする。

（２）アンケート調査の内容

①調査対象

一般に、東京証券取引所１部上場企業約 1,679 社(2006 年春の「会社四季報」による)は、内外で広くわが国を代表する企業群と認定されている。本調査では回収率が低いことを予め想定し、これら当該企業全てにアンケートを送付する。アンケート送付に当たっては当該企業の海外進出の有無やその程度は一切考慮しない。同時に、対象数を限定し絞り込むための無差別サンプリングなども行わないものとする。

この方法では著名な外資系企業やその日本現地法人が殆ど抜け落ちているが、ただ単に今回の調査対象にはしないということでご理解をいただきたい。

②調査方法

郵送式アンケート（回収率を見ながら適宜督促を実施）による。

③質問内容

日本人アジア留学経験者をどのくらい採用しているか、どのような専攻分野を重視するか、採用後の評価はどうか、など質的データと量的データの双方を網羅。具体的な質問項目は巻末資料を参照。

なお、留学期間の長短については企業アンケート時には特に明示しない。企業が社員の留学期間まで把握しているとは考えにくいからである。したがって、理論上は数週間程度の語学留学から、４年におよぶ正規の学士課程への在籍まで、企業アンケート調査

は含むこととなる。ただ現実には、数週間程度の観光を留学と申告する者が特に多いとは思われないので、この点に関しては無視しても問題ないと判断する。

（3）アンケート調査結果の分析方法

通常用いられる単純集計、クロス集計の他、適宜統計学的手法を利用する。以下にその方法を例示する。

例１：異なる２グループ間の百分率の差を検証する時

百分率の差に関する検証は、通常 Fisher の exact 検定か二項分布の正規近似法の２つがあり、本稿では後者を用いた検定を行う。検定すべき２つの仮説は以下の通りである。すなわち、今２つのグループＡとＢがあった時、

帰無仮説 $H_0 : P_A = P_B$

対立仮説 $H_1 : P_A \neq P_B$

となる。ここで、P_A と P_B はそれぞれのグループの百分率を表す。今、n_A 及び n_B を各グループのサンプル数、r_A と r_B を各グループサンプル中の発生数とし、$\bar{p}$ を以下の式で定義する。

$$\bar{p} = \frac{r_A + r_B}{n_A + n_B}$$

この時、検定統計量 u は以下の式で表せる。

$$u = \frac{P_A - P_B}{\sqrt{\bar{p}(1-\bar{p})(\frac{1}{n_A} + \frac{1}{n_B})}}$$

平均０、標準偏差を１とする正規分布において、上で求められた検定統計量uの絶対値以上となる確率が最終的に求めるp値である。このp値を用いて、通常利用される過誤率（有意差、または有意水準）５％或いは同10%での判定結果を示す。つまり、

p値が過誤率（例えば５％＝0.05）以下の時　→　帰無仮説H_0を棄却する。

p値が過誤率より大きい時　→　帰無仮説H_0を棄却しない。

例２：質的データを量的データに変換し、判別分析を行う時

例えば、「アジアへの留学生を採用していない」「アジアへの留学生を採用していない」など、得られたデータが質的なものである場合、それを量的なデータに変換し、なおかつ判別分析を行う手法として数値化理論がある。特に、説明変数・目的変数が共に質的変数である場合には、数値化理論Ⅱ類を使用する。具体的には、重回帰分析[97]でダミー変数を投入した場合と同じようにして、目的変数y及び説明変数xに関して次のような回帰式を得る（説明変数xの数は場合によって違う）。

$$y = a + bx_1 + cx_2 + dx_3 + ex_4 + fx_5 + \cdots\cdots\cdots\cdots$$

この回帰式を判別式として使うことにより、y＞０ならば、観測対象はＡグループに属し、y＜０ならばＢグループに属すると判別する。

例３：異なる２グループ間における対応のあるデータの中心位置を比較する時

２グループのデータが独立ではなく、ペア（対）になって得られている場合には、ノンパラメトリック法[98]の一手法であるウィルコクスン（Wilcoxon）の符号付順位検定を利用する。この手法における帰無仮説H_0と対立仮説H_1は以下のようになる。

帰無仮説H_0：２つのグループでデータの中心位置は同じ

対立仮説H_1：２つのグループでデータの中心位置は同じでない（つまりずれている）

[97] 説明変数がひとつの場合には単回帰分析となる。
[98] サンプル数が少ない場合やはずれ値がある場合などによく用いられる統計手法。

２つのグループ間における差の絶対値の総和をWとし、ウィルコクスンの符号付順位検定の数値表でパーセント点（$\underline{V}_N$、$\bar{V}_N$）とWとを比較し、上記の仮説に関する判定を下す。通常は過誤率５％が用いられるので、両側確率の場合には、

$W \leqq \underline{V}_N(0.025^{99})$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却する。

$W \geqq \bar{V}_N(0.025)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却する。

$\underline{V}_N(0.025) < W < \bar{V}_N(0.025)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却しない。

また、片側確率の場合には以下の２つの場合がある。

A：対立仮説H_1：グループBの中心位置はAより右にずれている。

$W \geqq \bar{V}_N(0.05)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却する。

$W < \bar{V}_N(0.05)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却しない。

B：対立仮説H_1：グループBの中心位置はAより左にずれている。

$W \leqq \underline{V}_N(0.05)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却する。

$W > \bar{V}_N(0.05)$　の時　→　帰無仮説H_0を棄却しない。

どちらを採用するかはその時の結果や目的次第である。

３．　インタビュー

（１）インタビュー調査の目的

アジア留学経験者の意見を聞くことにより、上記２の企業アンケート調査で得られなかった、採用「される」側の論理を明らかにする。また、調査対象者の年齢や性別、職業などを特定しないことで、２の企業アンケートには含まれなかった対象[100]、そしてそ

[99] 「両側」なので５％の２分の１。

[100] 具体的には、現在ばかりでなく過去の留学経験者の話が聞けたり、企業に勤務しない者（例えば主婦や学生）などの体験談を聞けたりする。さらには、東証一部上場以外の企業や組織（例

の声を拾うことが出来るため、企業アンケートを補完したり肉付けしたりする意味合いを持つ。

（２）調査の内容

①調査対象

アジアへの留学経験を持つ日本人男女 30 名程度。企業アンケートの際とは異なり、合計約１年以上の留学経験を持つ者のみを対象とする。性別や年齢は特に考慮しないものの、留学先国のバランスには配慮する。

原則として日本国籍を有する日本人とするが、いわゆる在日朝鮮人・中国人など、日本で生まれ育った外国籍の人々も同列に扱う。

インタビュー協力者の募集・告知は、１）インターネットによる公募、２）筆者の個人的ネットワーク、３）さらに１）及び２）で応じてくれた人による紹介、という３つの方法で実施する。

また、合計約１年以上というのはあくまでも原則である。例えば同じ人物がアジア２か国[101]への留学経験を持ち、一方が１年以上であればもう一方がたとえ１年以下の短期留学であっても、（せっかくの機会なので）その短期留学経験についてもインタビューすることとする[102]。

②調査方法

原則として直接面談形式によるインタビューによる。国外居住者など遠方の場合には電話や電子メールによる回答も可とする。

本調査では、留学形態を１）語学留学、２）学位取得目的以外の正規留学（交換留学や研究員など）、３）学位取得目的の正規留学、という３つに分類するが、これらは重複する部分もあるであろう。すなわち、交換留学で語学のみを習得したり、交換留学して現地で学位を取得したりするような場合がそれである。このような場合は、より上位の概念、つまり語学留学よりは交換留学を、交換留学よりは学位取得目的の留学を、当該人物の主たる留学形態として認めることとする。

えば NGO 職員や公務員）、またフリーランスで活躍する人たちの意見も紹介することが出来る。

[101] 例えば中国とインドネシアという風に。

[102] 実際のインタビュー（第Ⅴ章）でこのような経験者がいたため、インタビュー人数として実数１、のべ人数２という風にカウントしている。

また、当初は語学学校に留学したが、最終的には学位を取得して帰国したというような場合も、学位取得目的の留学に分類し、より上位の概念を適用することとする。

③質問内容

対象者の属性として、氏名（匿名は不可）、年齢、性別、所属と肩書、留学先の大学名と国名、留学形態（語学留学または学位取得目的）、留学期間を質問。そして、核となる質問は以下の６つである。すなわち、

Ｑ１．　なぜその国または大学を選んだのですか。
Ｑ２．　どのような留学生活を送りましたか。
Ｑ３．　その大学に留学して良かったこと、悪かったことは何ですか。
Ｑ４．　日本や欧米の大学と比較してどうでしたか。
Ｑ５．　社会人：アジアへの留学経験は仕事上どのように役立っていますか。
　　学生等：アジアへの留学経験を仕事上どのように役立てたいですか。
Ｑ６．　アジア留学を目指す若い人たちへメッセージをどうぞ。

（３）その他

必要に応じ、海外の大学などに勤務する留学事務担当者数名にもインタビューを行う。アルク（株）などの留学斡旋・情報提供機関にも、必要に応じインタビューを行う。文献やアジア留学経験者へのインタビューで得られた情報を確認したり、より最新の情報を得たりすることがその目的である。

第Ⅳ章：調査結果その１―東証１部上場企業アンケートから

１．　企業からの回答数

最終的に、東京証券取引所１部上場企業 89 社から回答が寄せられた。結果の分析にあたって、まずこの 89 という数字をどう見るかというのは大事である。回答を依頼した東京証券取引所１部上場企業は 1,679 社で、回答数はわずかその 5.3%に過ぎないからだ。第Ⅲ章の方法論でも既に触れたように、このような結果は事前に予想されたことではあった[103]。そのために、ある特定数の抜き取り調査ではなく、対象となる東京証券取引所１部上場企業の全てにアンケートを発送したのである。

しかしそれでも、この結果自体は厳粛に受け止めるべきであろう。回答率を高めるため、督促なども適宜実施したものの、結果としてこのような数字に留まったということは、それ自体何かを暗示しているとも考えられるからだ。すなわち、この背景には主に以下のような理由が推測される。

（１）採用計画は企業戦略の根幹にあたるため、企業の利益にならない今回のアンケート調査のために人事部として情報を開示したくなかった。

（２）留学生の採用を実施していない、または熱心でないため、人事部として今回の問題に対する関心がもともとない、或いは薄い。

（３）今回の問題に対する関心はあるものの、本来業務が忙しく、回答に要する時間がもったいない、或いはその作業自体が面倒と感じた。

（４）会社として、今回のような外部の調査依頼には原則として協力しない方針である。

実際、アンケート送付後に企業の人事担当者から寄せられる質問には、１）本調査結果がどのような形で公表されるか、２）具体的な社名まで開示されるか、という質問が最も多かった。このことから判断すれば、今の段階では上記（１）の理由が最も有力であり、事前の予想はこの点で間違っていなかった。

また、（３）及び（４）の理由はどのような調査にもつきものなので、ここで改めて論じる必要はないとしても、（２）の理由が（１）と同様に多かったとすれば、ことは本調査の本質的な部分にも関わるので重要である。すなわち、日本企業は日本人のアジ

[103] 助言をくれた FMICS 淵野辺研究会のメンバーには心から感謝したい。全数発送しなければ、さらに少ない有効回答数となるところであった。

ア留学経験者に対して、そもそも少しは関心を抱いているのか否か、という命題である。この真偽に関する分析は、下記の調査結果そのものを詳しく見ていきながら、追々説明することとしたい。

２．　回答のあった企業の属性

（１）業種

回答を寄せた 89 社のうち、回答拒否及び回答不能通告各 1 社を除いた、計 87 社を有効回答とした。業種ごとに多いものからまとめると、以下のようになる。

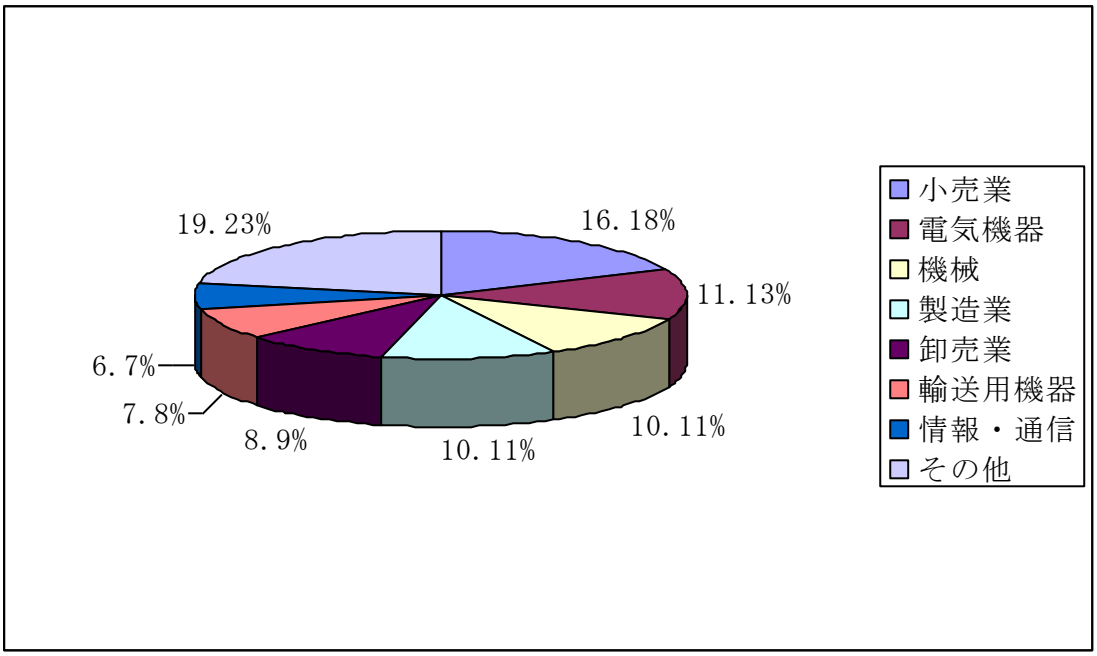
表４－１：回答企業の業種（企業数）

業種	社数
小売業	16
電気機器	11
機械	10
卸売業	8
輸送用機器	7
情報・通信	6
その他製品	4
建設	4
化学	3
サービス	3
金属製品	2
医薬品	2
陸運	2
繊維製品	2
倉庫・運輸	1
ゴム製品	1
不動産	1
ガラス・土石製品	1
精密機械	1
銀行	1
その他金融	1
合計	87

この業種分類は東洋経済新報社刊「会社四季報　2006 年 1 集」に基づく。但し、そこでは製造業がかなり細分化されすぎているきらいがあるので、関連のあるものを統合し、百分率で表したものが以下の円グラフである。様々な業種から、ほぼ満遍なく回答を得

たことがわかる。さらに製造業と非製造業という大まかな括りで分類してみると、前者が 44 社、後者が 43 社となり、ほぼ半々であることがわかった。

図４－１：回答企業の業種（百分率）



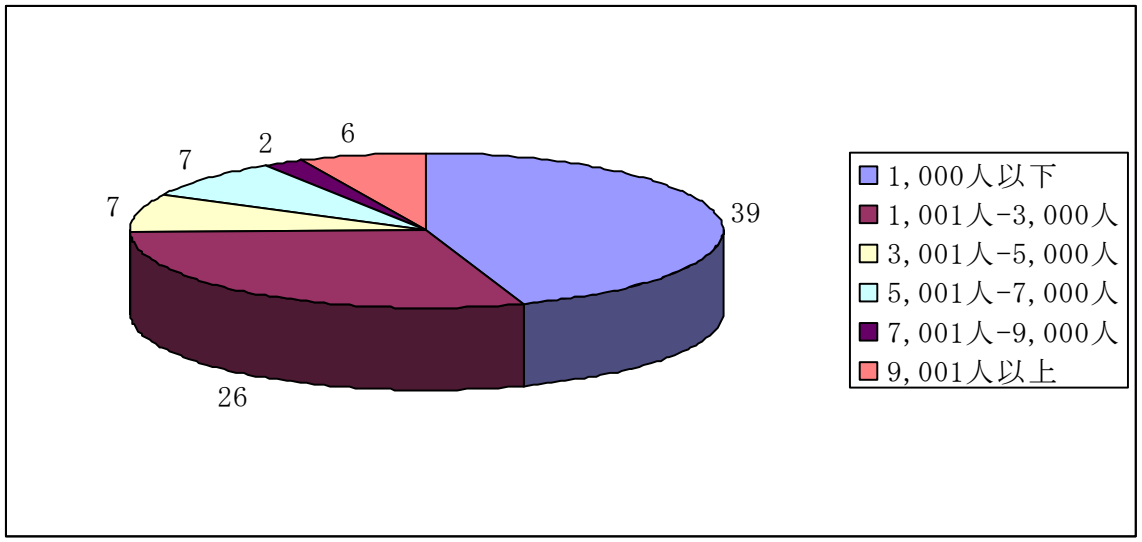
（２）規模

次に従業員数[104]で見た回答企業の規模であるが、全回答企業の平均は 3,094 人であった。但し、下は 42 人、上は 46,830 人と従業員数については各社のばらつきが大きく、このような場合の平均値（Mean）には余り意味がない。

そこで、中位数（Median）を計算してみたところ 1,167 人となり、およそこのあたりが平均的な企業像を表しているものと思う。実際、回答企業の中では従業員 1,000 人以下という企業が 39 社（44.83%）[105]と最も多くなっており、次に多いのが従業員 1,000 人超 3,000 人までの企業で 26 社（29.89%）である。円グラフで表すと以下のようになる。

[104] 2005 年８月現在。
[105] この中には従業員 100 人以下のいわゆる小企業が４社含まれる。なお、厚生労働省などが通常使用する企業の規模による分類は、従業員 100 人以下を小企業、101 人から 1,000 人までを中企業、1,001 人以上が大企業というものである。本論ではこの定義を利用している。

図４－２：回答企業の規模（企業数）



３．　企業の留学生採用の実態

（１）採用活動の有無

ここからは回答の内容を詳しく見ていこう。まず、欧米留学組を積極的に採用していると回答した企業は 22 社（25.3%）、アジア留学組のそれは 13 社（14.9%）であった。現に実施している企業数に限れば、一見したところ両者には差があるようにも思える。しかしながら、検討中のものも含めれば、欧米留学は 39 社、アジア留学は 35 社となり、その差は縮小する。アジア留学組に注がれる熱い視線が結実するのは、まさにこれからだということがここから見て取れる。

次に、業種別の傾向を見てみよう。上記２の企業属性で見たように、製造業と非製造業はほぼ同数であるので、この分類を使って欧米留学、アジア留学それぞれの採用活動に対する積極性を比べてみる。その結果が、下の表４－２である。

表４－２：留学経験者を対象とした採用活動を行っていると回答した企業数

	製造業（44）	非製造業（43）
欧米留学	15	7
アジア留学	7	6

二項分布の正規近似法を使って、統計学上の有意差を仮説検定してみたところ、過誤率５％水準では欧米留学、アジア留学双方の場合について、製造業及び非製造業の採用動向に差があるとは言えない。

試みに過誤率を 10％に落とし、同じ方法で再度検定してみると、欧米留学の場合のみ p 値＝0.056＜0.1 となり、両者の間には有意差が認められた。すなわち、欧米留学経験者の採用に関しては、非製造業よりも製造業の方が積極的だという傾向の違いが、ここでは微かに見て取れる。

また、欧米留学経験者とアジア留学経験者の採用について、両者をクロス集計したものが以下の表４－３である。最も多いのは、欧米留学経験者についてもアジア留学経験者についても、特別な採用は考えていないと答えた 45 社である。これらの企業では、採用に際して留学経験者を排除こそしないものの、彼らの能力や経験を特別視はしないとの方針である。したがって、結果として採用された応募者の中に留学経験者が混じっていることもあり得る。

表４－３：企業の留学生採用に関するクロス集計

	アジア留学			
欧米留学	実施済	予定なし	検討中	計
実施済	13	3	6	22
予定なし	0	45	3	48
検討中	0	4	13	17
計	13	52	22	87

また、上の表を見ると、アジア留学経験者の積極採用を実施していると回答した企業 13 社は、全て例外なく欧米留学経験者も積極的に採用していることがわかる。このことから、アジア留学経験者を現に採用している企業は、欧米留学経験者の採用で既に実績のある企業が多いということは言えそうである。

しかし、現に実施はしていないものの検討中と答えた企業まで含めると、いささか様相は違ってくる。表で見るように、欧米留学経験者の採用を実施している企業 22 社の

うち、アジア留学経験者の採用について実施済または検討中と回答したのは全部で 19 社（86.4%）[106]である。

その一方で、欧米留学組の採用について予定なしまたは検討中と回答した残る 65 社の中でも、アジア留学組の採用は検討しているというところが 16 社（24.6%）ある。両者（22 社中 19 社と 65 社中 16 社）の統計的な有意差を比較してみたところ、過誤率１%で p 値は限りなくゼロに近い。したがって、アジア留学組に対する採用実施状況に関し、欧米留学組の採用に積極的な企業群 19 社とそうでない企業群 65 社の間には明らかな差がある。これは事実である。

しかし、たとえ後者の企業群がアジア留学組の採用に関して比較的冷淡であるとしても、関心は全くゼロではない。率としては低いものの、欧米留学組の採用実績がない企業の中でさえ、アジア留学組に熱い視線を注ぐ企業は存在する。今後の企業の採用動向を占う意味でも、この事実は注目されてよい。

（２）アジア留学経験者を採用する企業

アジア留学経験者を採用する企業はどのような傾向があるのだろうか。ここまでの指標を手がかりに明らかにしてみたい。具体的には、数量化理論Ⅱを使って回帰分析を試みる。前章の方法論のところでも説明したように、数量化理論Ⅱはグループを予測したり特定したりするためのものである。

まず、表４－３で見たように、アジア留学経験者を採用するという行動は、欧米留学経験者を採用するという行動と何らかの相関関係がありそうである。そこで、

$$y = a + bx$$

という一次方程式を想定し、y（アジア留学生を現に採用、または採用を検討している企業群）と x（欧米留学生を採用、または採用を検討している企業群）との関係を単回帰分析による式で表してみる。単回帰分析の結果は以下の表４－４のようになる。

[106] 因みに、予定なしと回答した３社は、情報通信、精密機械メーカー、電気機器メーカーで、業種としての統一性はない。

表４－４：単回帰分析による回帰係数

	係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%
切片	-0.875	0.091588	-9.55368	4.09E-15	-1.0571	-0.6929
X 値 1	1.516026	0.136793	11.0826	3.51E-18	1.244044	1.788007

すなわち、回帰式（判別式）は以下の一次方程式で表される。

$$y = -0.875 + 1.516026x$$

この回帰式（判別式）を使い、$y > 0$なら観測対象はアジア留学経験者採用企業、$y < 0$なら観測対象はアジア留学経験者「非」採用企業に属する、と判別する。

通常、回帰式の妥当性を考える時、目安となるのは寄与率および自由度調整済み寄与率である。上の回帰式の場合、寄与率は 0.591、自由度調整済み寄与率 0.586188 であった。この自由度調整済み寄与率の数字が高ければ高いほど、回帰式の妥当性は高まるので、より妥当な回帰式を得るために説明変数 x の数を増やし、もう少し複雑な方程式を想定してみよう。今までに得た指標として、以下のようなものがある。

- 欧米留学経験者を採用（または採用を検討）しているか否か
- 製造業か非製造業か
- 企業規模は従業員 1,000 人以下、1,001 人から 3,000 人、或いはそれ以上のどれか

これらの指標を使って様々な組み合わせで重回帰分析を試してみたところ、自由度調整済み寄与率が最も高くなる、つまり最も妥当性が高いと判断されるのは、上記３つの指標全てを組み入れた回帰式であった。具体的には、自由度調整済み寄与率は 0.618486 となり、その他の関係数値は以下のようになる。

表４－５：重回帰分析による回帰係数

	係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%
切片	-0.62999	0.121822	-5.17136	1.61E-06	-0.87233	-0.38764
X 値 1	1.649033	0.13903	11.86098	1.79E-19	1.372457	1.925608
X 値 2	-0.19339	0.135038	-1.43215	0.155902	-0.46203	0.075239
X 値 3	-0.45545	0.158036	-2.88194	0.005044	-0.76983	-0.14107
X 値 4	-0.27965	0.16417	-1.70341	0.092279	-0.60624	0.046937

したがって、回帰式は以下の方程式で表される。

$$y = -0.62999 + 1.649033x_1 - 0.19339x_2 - 0.45545x_3 - 0.27965x_4$$

この時、y はアジア留学経験者を採用している企業群、X 値 1（x_1）は欧米留学経験者を採用している企業群、X 値 2（x_2）は製造業であること、X 値 3（x_3）は従業員が 1,001 人から 3,000 人の大企業であること、X 値 4（x_4）は従業員が 3,001 人以上の大企業であること、をそれぞれ表す。因みに、本回帰式における寄与率の回帰統計は以下の表４－６、相関行列は同４－７の通りである。

表４－６：寄与率の回帰統計

重相関係数	0.797641
寄与率	0.636231
自由度調整済み寄与率	0.618486
残差の標準偏差	0.609273
観測数	87

表４－７：重回帰分析の相関行列

	X 値 1	X 値 2	X 値 3	X 値 4	Y 値
X 値 1	1	0.243893	0.168884	0.060508	0.768765
X 値 2	0.243893	1	-0.0075	-0.00669	0.107779
X 値 3	0.168884	-0.0075	1	-0.37982	-0.02354
X 値 4	0.060508	-0.00669	-0.37982	1	0.008058
Y 値	0.768765	0.107779	-0.02354	0.008058	1

（３）採用人数

次に具体的な採用人数を見てみよう。2006 年秋から過去３年間、実際に欧米留学経験者を採用した企業は全部で 48 社、採用総計は新卒・中途合わせて 382 人である（新卒 288 人、中途 94 人）。先に、欧米留学経験者を対象とした採用活動を行っている企業は 87 社中 22 社だと紹介した。しかしながら、特に欧米留学経験者を対象とした採用活動を行っていない企業でも、結果として採用者の中に欧米留学経験者が入っていたという場合が多く、このような数値になっている[107]。採用実績のある 48 社に限って単純計算すれば、１社あたり１年に 2.7 人を採用していることになる。個別に見れば、３年間で 50 人以上という大量採用の企業もあり、最高は大手電気機器メーカーの 60 名である。

これに対して、アジア留学経験者を採用したと回答した企業はわずか 19 社を数えるのみである。「アジア留学経験者を対象とした採用活動を行っている」と答えた企業数 13 は結果として上回っているものの、その総採用人数は３年間でわずか 73 人だ（新卒 47 人、中途 26 人）。欧米留学のそれの約５分の１に過ぎない。１社あたりの採用人数は１年に 1.3 人で、欧米留学のそれの約半分に留まる。その中で最も多くアジア留学経験者を採用しているのは、大手小売業の 16 名である。

上記３（１）で見たように、アジア留学経験者に対して関心を抱く企業は数多く存在するものの、採用人数で見た場合、現状では欧米留学経験者の採用実績との間にこのように大きな差が存在する、というのが冷徹な事実である。しかしながら、一方では母数にそもそも大きな差があるということもまた事実である。つまり、第Ⅱ章で見たように、欧米への日本人留学生数はアジアへのそれの 3.4 倍[108]（オセアニアを含めれば 3.6 倍）の規模なのであり、上記のような採用総数の差はいわば当たり前という見方もここでは出来よう。

４．　企業が評価する内容

（１）企業が評価する留学先の国

次に、企業が高い評価を与えるという留学先の国々を見てみよう。欧米、アジアそれぞれ企業数の多いものから順番にまとめたのが、下の表４－８である。欧米ではアメリカとイギリスが、アジアでは中国と韓国が、それぞれ人気留学先としては二強とも言え

[107] もちろん、採用活動を行ったが採用出来なかった、という逆の場合もあるだろう。
[108] 読売新聞の統計数値による。(42,295 + 12,151)/16,028 = 3.39

る存在になっており、この点で両地域とも似たような構成になっていることがまずもって興味深い。

評価する留学先の国という質問項目では、３か国＋地域までの複数回答を可としていたため、結果として上表のように比較的多くの国が選ばれている。もし仮に、選べるのは１か国＋地域だけとしていたなら、おそらくアメリカ及び中国と回答した企業の割合はもっと高まっていたに違いない。

また、表の国名で「その他」となっているのは、多くの場合「特定の国は意識しない」という意味である[109]。ある特定の国に拘らず、とにもかくにも留学したという経験を幅広く評価していこう、という姿勢なのであろう。

表４－８：評価される留学先

欧　米

順位	国　名	企業数	割合(%)
1	アメリカ	30	43.48
2	イギリス	16	23.19
3	オーストラリア	5	7.25
4	フランス	4	5.80
5	カナダ	3	4.35
6	ドイツ	3	4.35
7	ニュージーランド	0	0.00
7	スペイン	0	0.00
7	イタリア	0	0.00
	その他	8	11.59
	合　計	69	100.00

アジア

順位	国　名	企業数	割合(%)
1	中国	14	45.16
2	韓国	5	16.13
3	台湾	3	9.68
4	香港	2	6.45
4	マレーシア	2	6.45
6	シンガポール	1	3.23
6	ベトナム	1	3.23
7	インド	0	0.00
7	タイ	0	0.00
	その他	3	9.68
	合　計	31	100.00

さて、個別に見ていこう。まず、欧米の留学先では、アメリカがトップである。半分にまでは少し届かないものの、その存在感はダントツと言えよう。フランスとドイツを除けば、残り９割が全て英語圏で占められているのも特徴的である。英語という事実上のリンガ・フランカを、企業がいかに重要視しているかということの表れと見ることも出来るだろう。この点は次項でまた論じる。

[109] 回答用紙にそう記述があり、電話でも確認した。但し、欧米で「オランダ」と具体的に記述してある回答が１件あった。

次にアジアであるが、まず中国の割合が非常に高いことに気付く。欧米におけるアメリカのそれよりも、むしろ高い割合になっている。便宜上、中国の一部である香港を別の選択肢としたが、これを加えるとさらにその割合は高まり、優に半数を超す。他にも、台湾やマレーシア、シンガポールといった、中国語を公用語とする国々の合計が２割近くあることにも着目したい。つまり、アジアの人気留学先としては、中国語圏が全体のほぼ７割のシェアを誇るというわけである。

要するに、企業の視点から見れば、欧米留学とは英語圏への留学であり、アジア留学と言えば中国語圏へのそれなのである。他の文化圏への企業の関心は、無視出来るほど小さい。つまり、たとえ「特定の国には拘らない」とした企業が数社あるにしても、わが国の企業に関する限り、留学という経験を幅広く評価するというよりは、ある特定の言葉を中心とする文化圏を好むという傾向は強い。

（２）留学先大学のブランド価値

では、もう少しミクロな視点を提供するため、留学先の大学へと目を転じよう。留学先の国としては、企業がアメリカや中国を高く評価していることはわかったが、それぞれの国の大学のブランド名は、企業にとってどれだけの価値があるのだろうか。それをまとめたのが以下の表４－９－１である。

欧米留学、アジア留学ともに、留学先大学の有名・無名を「気にする」と答えた企業はごく少数で、大多数は「気にしない」と答えている。そして、この表を見る限りでは、「気にする」と答えた企業の割合は、欧米留学に対しては8.16%、アジア留学では12.50%となっており、後者の方が若干高めのような印象を受ける。

表４－９－１：大学の有名・無名（全体）

	欧米			アジア	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
気にする	4	8.16		3	12.50
気にしないが、採用は有名大卒多い	9	18.37		5	20.83
気にしないし、採用結果も関係ない	36	73.47		16	66.67
合　計	49	100.00		24	100.00

しかし、試みに上でアジア留学に関して回答した企業 24 社のみを取り出し、当該企業だけで統計をとってみたところ（表４－９－２）、回答結果は欧米とアジアの間で殆ど差がなかった。すなわち、大学の名前に関し、24 社のうち 22 社が欧米・アジアで同じ態度を示し、わずかに２社が欧米で「気にしないし、（実際の）採用結果も（大学の名前は）関係ない」と回答したのが、アジアでは「気にしないが、（実際の）採用（結果）は有名大卒多い」と変化しているのみである。

表４－９－２：大学の有名・無名（同一サンプル）

	欧米			アジア	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
気にする	3	12.50		3	12.50
気にしないが、採用は有名大卒多い	7	29.17		5	20.83
気にしないし、採用結果も関係ない	14	58.33		16	66.67
合　計	24	100.00		24	100.00

この結果から言えることは、現にアジア留学経験者のための採用活動を実施していたり、意図しなくても結果として採用実績があったりするような企業ならば、欧米・アジアを問わず、大学の名前に関する考え方は方針としてほぼ定まっているということだ。

いずれにしろ、上のどの場合についても「気にしないし、実際の採用結果を見ても大学名は関係ない」と回答した企業は全体の半数を超える。この数の多さについて、にわかには信じがたいとの思いを抱く方も多いだろう。確かに、学生向けの企業説明会や、マスコミのインタビューなどで、多くの企業が語る建前と同じではないか、と考えても不思議はない。

しかし、留学経験者という点を考えた場合、仮に企業が彼らに対して語学の習得を第一に期待しているものとすれば、この結果にはさほど違和感がない。つまり、レベルにもよるが、語学の習得程度であれば留学先大学の有名・無名はそれほど大した問題とはならないので、企業はその点には無関心だという仮説である。この真偽については、企業が期待する学生の専攻という問題とも関係するので、次項で改めて検証してみる必要がある。

（３）企業が評価する専攻分野

下記の表４－10－１では、企業が高い評価を与える留学生の専攻分野に関し、アジア留学経験者の採用実績がある企業のみを取り出し、欧米とアジアそれぞれについてまとめてみた。企業がそれぞれの地域に留学した日本人に、一体何を期待しているのか、２つの地域の対比と共にうかがい知ることが出来て非常に興味深い。

表４－10－１：企業が評価する専攻分野（双方採用企業）

	欧米			アジア	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
ビジネススクール	6	15.00		3	10.34
ロースクール	2	5.00		1	3.45
語学・通訳	6	15.00		6	20.69
その他人文・社会科学	6	15.00		4	13.79
IT/理工学系	4	10.00		3	10.34
バイオ・化学・薬学系	2	5.00		1	3.45
その他自然科学系	2	5.00		0	0.00
特に気にしない	12	30.00		11	37.93
合　計	40	100.00		29	100.00

まず、わが国の企業が欧米とアジアそれぞれの日本人留学生に期待するもののうち、10%を超える項目に注目してみよう。「特に気にしない」という項目を除けば、欧米・アジアともに「ビジネススクール」「語学・通訳」「その他人文・社会科学」「IT/理工学系」の４項目が挙げられる点で、ほぼ同じような傾向を見て取ることが出来る。

しかしながら、欧米留学については 15%を示す項目が３つあるのに比べ、アジア留学では「語学・通訳」という項目だけが 20%を超え、やや突出した期待項目となっているように見える。欧米留学におけるこの項目は 15%なので、その差は 5.69%である。

次に、欧米留学経験者しか採用していないという企業に目を向けてみよう。うがった見方をすれば、これらの企業群は、欧米留学経験者の方がアジア留学経験者よりも信頼出来、かつまた優位にあると考えているのかもしれない。だとすれば、欧米留学のどのような点がアジア留学より勝っていると考えているのか。その点を知る上で、これら企業の意見は貴重なデータと言える。

表４－10－２：企業が評価する専攻分野（欧米留学のみ採用企業）

	欧米	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)
ビジネススクール	5	11.11
ロースクール	0	0.00
語学・通訳	5	11.11
その他人文・社会科学	6	13.33
IT/理工学系	10	22.22
バイオ・化学・薬学系	4	8.89
その他自然科学系	4	8.89
特に気にしない	11	24.44
合　計	45	100.00

表でまず最も多い項目に注目してみよう。「特に気にしない」という項目を除けば、「IT/理工学系」の 22.22%という数字は他の項目を圧している。同時に、「バイオ・化学・薬学系」「その他自然科学系」というような他の自然科学専攻も上記表４－10－１の欧米数値より伸びており、自然科学全体では全体の 40%にも達する。いわゆる先端技術の修得について、わが国の企業は欧米留学経験者をことのほか高く評価し、また同時に期待している、ということが手に取るようにわかる[110]。また、このことは本章の３（１）で明らかになった「欧米留学経験者の採用に関しては、非製造業よりも製造業の方が積極的」という傾向とも符合する。

これに対して、表４－10－１のアジア留学の同じ数値は 14%にも満たない。日本企業は、アジアにある大学の理系学部には、その教育と研究の質に関して過大な期待を抱いていない、ということの証左であろう[111]。

もうひとつ注目すべき点は、表４－10－２では「語学・通訳」の割合が表４－10－１の欧米数値より下がっており、アジア留学数値との差が 5.69%から 9.58%へとさらに

[110] この点で、澤（2005）らはカリフォルニア大学の中村修二氏の例を紹介している。画期的な発明とされる青色ダイオードの生みの親として有名な中村氏は、かつて日本の民間企業の研究者であった。彼が所属企業を離れる際、アメリカから 10 大学がスカウト合戦に参戦したのに、日本の大学はどこも手を挙げなかったというのである。優秀な研究者の獲得にアメリカの大学がどれほど必死に取り組んでいるかということがわかる話である。

[111] ただひとつ不思議なのは、アジアにおいて、IT/理工学系への留学を評価すると回答した企業が３社あったにも関わらず、インドへの留学経験者を評価すると答えた企業は１社もないことである（表４－８）。

開いていることである。欧米留学に比べ、アジア留学ではまず語学への期待度が企業にとって高い、という点がここでも如実に表れている。

話がやや脇道にそれるが、語学に関してさらに考えてみよう。語学が果たして専門と言えるかどうかは、人によって議論のあるところであろう。しかし、上の表で見る限り、アジア留学に関しては多くの企業が、欧米留学に関しても決して少なくない企業が語学を学んだ留学生を評価するのは事実のようだ。けれども、その数は前項４（２）で大学の有名・無名を「気にしない」と答えた企業ほどには多くない。つまり両者の整合性は必ずしもとれていない。

したがって、前項の回答結果はやはり企業特有の建前に過ぎないという可能性も高く、前項の結果からのみ「留学先大学の名前は関係ない」と結論づけるのは早計であろう。どんな大学でもよいから、とにかく留学して、IT やバイオ、経営学を学んでくれば企業は一律に高く評価してくれる、とはどうしても考えにくい。

また、前項４（２）で大学の名前を「気にする」と回答したのべ７社について、これらの企業が評価する専門分野に、何か共通点があるかどうかについて調べてみた。筆者はこれらの企業の関心が、ビジネススクールやロースクールに集中するのではないかという予断をもったのだが、実際にはこの２つの項目を選んだ企業は７社のうち１社もなかった。そして、７社が選んだ項目は特に何かに集中するということはなく様々であり、特筆すべき共通点のようなものは見られなかった。

表４－10－３：企業が評価する専攻分野（全回答企業）

	欧米			アジア	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
ビジネススクール	11	12.94		3	10.34
ロースクール	2	2.35		1	3.45
語学・通訳	11	12.94		6	20.69
その他人文・社会科学	12	14.12		4	13.79
IT/理工学系	14	16.47		3	10.34
バイオ・化学・薬学系	6	7.06		1	3.45
その他自然科学系	6	7.06		0	0.00
特に気にしない	23	27.06		11	37.93
合　計	85	100.00		29	100.00

話をもとに戻す。以上の結果から、企業が見る欧米留学とアジア留学との差は、誤解を恐れず一言で言えば、先進国への留学と途上国へのそれとの差だ、という感想を持つ方も多いのではないだろうか。なお、参考までに全回答企業のデータを上の表４－10－３で示しておく。

（4）企業が評価する能力や資質など

下記表４－11－１は、欧米・アジア双方の留学経験者を採用している企業について、評価する留学生の能力や資質についてまとめてみたものである。

表４－11－１：企業が評価する留学生の能力や資質（双方採用企業）

	欧米			アジア	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
語学力	19	29.69		18	29.03
留学した国・地域に関する知識	6	9.38		8	12.90
交渉力	3	4.69		3	4.84
一般的コミュニケーション能力	6	9.38		5	8.06
専門知識	2	3.13		1	1.61
発想の柔軟さ	3	4.69		2	3.23
異文化への適応力	7	10.94		8	12.90
向上心、チャレンジ精神	13	20.31		12	19.35
協調性	0	0.00		0	0.00
調査・研究能力	1	1.56		1	1.61
先進性	1	1.56		1	1.61
人脈	1	1.56		1	1.61
わからない、特にない	1	1.56		1	1.61
その他	1	1.56		1	1.61
合　計	64	100.00		62	100.00

そして同じく表４－11－２は、欧米留学組しか採用していない、或いはその計画があるという企業についてまとめてみたものである。

表４－11－２：企業が評価する留学生の能力や資質（欧米留学のみ採用企業）

	欧米	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)
語学力	18	24.32
留学した国・地域に関する知識	2	2.70
交渉力	5	6.76
一般的コミュニケーション能力	11	14.86
専門知識	2	2.70
発想の柔軟さ	3	4.05
異文化への適応力	7	9.46
向上心、チャレンジ精神	20	27.03
協調性	1	1.35
調査・研究能力	2	2.70
先進性	2	2.70
人脈	0	0.00
わからない、特にない	1	1.35
その他	0	0.00
合　計	74	100.00

まず、表４－11－１を見るとわかる通り、これらの企業では欧米留学組・アジア留学組それぞれについて、評価する項目に大きな差はない。差がある項目でもプラスマイナス１程度のことである。唯一の例外は「留学した地域・国に関する知識」という項目で、アジア留学組を評価する企業が２社多い。

表４－11－２の数値（割合）と、表４－11－１のアジアの数値（同）を比較し、アジア＞欧米となった上位３項目は次の通りである。

第１位　留学した国・地域に関する知識　差 10.20%
第２位　語学力　差 4.71%
第３位　異文化への適応力　差 3.44%

反対に、欧米留学経験者の方がアジア留学経験者よりも高く評価されたのは、以下の３項目である。

第１位　向上心・チャレンジ精神　差 7.67%
第２位　語学など以外の一般的コミュニケーション能力　差 6.80%

第３位　交渉力　　差1.92%

アジア留学経験者が比較的ローカルな能力を評価されたのに比べ、欧米留学経験者はより普遍的な能力を評価されていることがわかる。

なお、参考までに全回答企業のデータを下の表４－11－３で示しておく。

表４－11－３：企業が評価する留学生の能力や資質（全回答企業）

	欧米			アジア	
専攻分野・学校形態	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
語学力	37	26.81		18	29.03
留学した国・地域に関する知識	8	5.80		8	12.90
交渉力	8	5.80		3	4.84
一般的コミュニケーション能力	17	12.32		5	8.06
専門知識	4	2.90		1	1.61
発想の柔軟さ	6	4.35		2	3.23
異文化への適応力	14	10.14		8	12.90
向上心、チャレンジ精神	33	23.91		12	19.35
協調性	1	0.72		0	0.00
調査・研究能力	3	2.17		1	1.61
先進性	3	2.17		1	1.61
人脈	1	0.72		1	1.61
わからない、特にない	2	1.45		1	1.61
その他	1	0.72		1	1.61
合　計	138	100.00		62	100.00

（５）短期語学留学への評価

現在のところ、海外へ留学する日本人のうち、圧倒的多数はいわゆる短期の語学留学である。この中には、民間の旅行会社が営利目的で行う、いわゆるパッケージツアーのようなものも含まれているため、「あれは留学ではなく遊学」だと酷評する人々さえいる。確かにこの種の留学と、一般的な観光旅行との線引きは困難であり、留学の果実がどの程度得られるものか、その効果には疑問なしとしない。

けれども、将来の本格的な留学に備えるためのきっかけ作り、などの価値は少なくとも認められるであろう。加えて、実態としてそれを希望する日本人の学生や社会人が多いのであれば、それに対する企業の評価は本調査で聞いておくべきだと考えた。

そこで、アジア留学経験者採用実績のある 22 社のみを取り出し、当該企業について統計をとった結果として、下の表４－12－１を作成した。ご覧のように、同一サンプルなら欧米とアジアとの差は殆どないに等しい。例えば、このサンプルで、「大いに評価」を３点、「少しは評価」を２点、「余り評価せず」を１点、「全く評価せず」を０点とし、加重平均をとってみると、欧米への短期語学留学は 2.18 点、アジアへのそれは 2.14 点となり、両者の差は無視出来るほど小さい。

表４－12－１：短期語学留学への評価（アジア留学採用企業）

	欧米			アジア	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
大いに評価	5	22.73		4	18.18
少しは評価	16	72.73		17	77.27
余り評価せず	1	4.55		1	4.55
全く評価せず	0	0.00		0	0.00
合　計	22	100.00		22	100.00

また、本論は欧米留学について云々するものではないものの、参考までに欧米留学経験者採用企業が、欧米への短期語学留学をどのように見ているかについて参考までに触れておきたい。下の表４－12－２は、欧米留学組のみを採用している企業の、短期語学留学に関する評価をまとめたものである。

表４－12－２：短期語学留学への評価（欧米留学のみ採用企業）

	欧米	
	企業数	割合(%)
大いに評価	6	22.22
少しは評価	10	37.04
余り評価せず	10	37.04
全く評価せず	1	3.70
合　計	27	100.00

表４－12－１と表４－12－２を比較すると、「大いに評価」の項目は殆ど変わらないにも関わらず、一方で「少しは評価」の項目が 72.73%から 37.04%へと激減し、他方「余り評価せず」が 4.55%から 37.04%へと激増していることが注目される。「ほんの

ちょっと英語を勉強して来たくらいでは」という、欧米留学組の採用実績がある企業ならではの、短期語学留学に対する厳しい目がうかがえる。

次の表４－12－３は、回答のあった企業全体の、短期語学留学に対する評価をまとめたものである。

表４－12－３：短期語学留学への評価（全体）

	欧米			アジア	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
大いに評価	11	22.45		4	18.18
少しは評価	26	53.06		17	77.27
余り評価せず	11	22.45		1	4.55
全く評価せず	1	2.04		0	0.00
合　計	49	100.00		22	100.00

ここでも「大いに評価」に３点、「少しは評価」に２点、「余り評価せず」に１点、「全く評価せず」には０点を与え加重平均をとったところ、欧米への短期語学留学は1.96点、アジアへのそれは2.14点（前述）であった。この表で見る限り、アジアへの短期留学の方が企業の評価はほんの少し高い。

（６）学位の価値

企業は採用の時、留学経験者の学位をどの程度評価するものなのか。これは、次章でインタビューした石川文一氏（三菱東京UFJ銀行上席調査役。中国・北京大学留学）が「企業は学位など全く評価しない」と述べたことにヒントを得て急遽付け加えた質問項目である。結果は以下の表の通りである。

表４－13：学位の有無に対する企業の態度

	欧米			アジア	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
気にする	12	14.29		11	13.10
気にしない	42	50.00		41	48.81
どちらとも言えない	30	35.71		32	38.10
合　計	84	100.00		84	100.00

欧米留学組に対しても、アジア留学組に対しても、企業の学位への評価はほぼ同じような傾向を示し、残念ながら甚だ低いと言わざるを得ない。「気にしない」と答えた企業はどちらの地域でも全体の約半数に上り、「どちらとも言えない」と答えた企業の中にも「気にしない」と考える企業が何割か存在することを想像すれば、石川氏の言葉は全く正しかったわけである。

確かに企業は学校などの教育機関ではないので、学位の有無についてはアジア・欧米どちらの地域に留学しようとも、大抵は無頓着ということなのであろう。事実として受け入れる他ない。

（7）採用の必要性と能力への評価

最後に、欧米留学組とアジア留学組との間で、採用の必要性と能力への評価にはどのような差があるのかを見てみよう。企業が欧米留学経験者を採用する必要性、同じく企業が欧米留学経験者の業務遂行能力を評価する度合い、それぞれを仮に３点とした場合、アジア留学経験者のそれらは一体どれほどの数値になるのだろうか。それらをまとめたものが表４－13 である。

表４－14：採用の必要性と能力への評価

	採用の必要性			能力への評価	
	企業数	割合(%)		企業数	割合(%)
かなり上（５点）	2	3.45		0	0.00
少し上（４点）	3	5.17		0	0.00
同程度（３点）	49	84.48		45	93.75
少し下（２点）	4	6.90		3	6.25
かなり下（１点）	0	0.00		0	0.00
合　計	58	100.00		48	100.00

まず、アジア留学組の採用の必要性については、全回答企業の８割超が欧米留学組と同程度と答えている。欧米留学組を採用する必要性より上と回答した企業と下と回答した企業がほぼ同数になっているため、加重平均をとった結果は 3.05 点であった。この結果、アジア留学組の採用必要性は、欧米留学組のそれと同程度かそれよりも微かに高い必要性を企業が感じていることがわかった。

しかし、加重平均で 0.05 程度の差が、果たして統計的に有意なものと言えるかどう

かについては統計学的検定をしてみなければわからない。そこで、第Ⅲ章で紹介したノンパラメトリック法のひとつ、ウイルコクスンの符号付順位検定を用いる[112]。ここでは、アジア留学組の採用必要性の方が、欧米留学組に対するそれよりも高いか否かを調べるので、帰無仮説H_0と対立仮説H_1は以下のようになる。

帰無仮説H_0：２つのグループでデータの中心位置は同じ

対立仮説H_1：グループＢ（アジア留学）の中心位置は、グループＡ（欧米留学）よりも右にずれている。

２つのグループ間において差が生じるデータの数Nは９、それらの絶対値の総和Wは 19、ウィルコクスンの符号付順位検定の数値表でパーセント点（V^{-}_{N}）は過誤率５％、$N=9$の時 37 なので、$W \geqq V^{-}_{N}(0.05)$とはならず、帰無仮説H_0を棄却することは出来ない。したがって、採用の必要性に関する限り、欧米留学組に対する態度とアジア留学組へのそれには統計的に有意な差があるとは言えない。

一方、欧米留学経験者と比較した場合、アジア留学経験者の能力に対する企業の評価は、必ずしも高くない。現にアジア留学経験者を採用している企業を含めても、欧米留学経験者より上と評価した企業は残念ながら１社もない。逆に「少し下」と回答した企業が３社[113]あるため、９割以上の企業が「同程度」と答えているものの、加重平均の結果は 2.94 と、３点を微かに割り込んでいる。アジア留学経験者はこれを現実として謙虚に受け止め、これまで以上に切磋琢磨し、自らのアピール度を高めていく必要があるだろう。

５．　企業人事担当者の声

企業の人事担当者による、アジア留学やアジアの大学に関するコメントを以下順不同で全て紹介する。

[112] アジア留学に対する意見と欧米留学に対する意見については、（同一企業がペアで回答しているため）個々のデータは独立でなく対応がある。

[113] ２つのグループ間で差があるデータが３サンプルしかないため、ウィルコクスンの符号付順位検定では判定不能。

- 当社は関東で小売業を展開している企業であり、留学経験は国を問わず本人の積極性を判断する材料のひとつに過ぎないと考えている（小売業・従業員数 200 人台）
- 日本人留学生よりも、外国籍日本留学生の採用に力を入れている（機械・従業員数 1,000 人台）
- とりわけ中国への留学経験のある学生は価値が上がって来ると思う（繊維製品・従業員数 700 人台）
- 学歴より、その個人の持つ能力や将来性で判断している（サービス・従業員数 400 人台）
- 留学先が多岐にわたっており、留学先大学の情報量が少ない（陸運・従業員数 8,000 人台）
- 自動車メーカーの立場から、今後英語と中国語の２大語学に重点を置いていく。アジアの必要性が上がって来ると思われる（輸送用機器・従業員数 1,000 人台）
- 大切なのは自己の目的意識（建設・従業員数 12,000 人台）
- グローバル化した社会のため、視野の広い人材は必要（小売・従業員数 1,000 人台）
- アジアの大学に望むのは、日米欧などと同等の GPA を証明してくれること、また、日本の大学との交換留学などを積極推進し、日本語に強いアジア人を増やしてくれること（情報通信・従業員数 4,000 人台）
- 海外現地法人での優秀な人材の確保には、留学生が必要と考える（機械・従業員数 1,000 人台）
- アジア地域への留学生は知的レベルが低い印象がある。国内や欧米の大学に受からなかった人材といったイメージが出来てしまっている（電気機器・従業員数 2,000 人台）
- アジア・欧米など、地域を限定した採用戦略はとっていない。ただ、海外人材の採用については今後一層拡充して行く方針（化学・従業員数 800 人台）
- 中国などアジアに拠点を置く当社にとって、中国語が出来る留学生を歓迎している。今後は同じ位英米留学者も採用して行きたい（卸売・従業員数 300 人台）

第Ⅴ章：調査結果その２―アジア留学経験者インタビュー

以下がアジア留学経験者へのインタビューの概要と質問内容、そしてその記録である。

インタビューの概要

１）インタビュー実施期間：2006 年２月 27 日～2007 年２月 13 日

２）インタビューに応じてくれた人の数：実数 33 名、のべ 36 名[114]

３）男女別：男性 17 名、女性 16 名（以上実数）

４）年齢別：20 代 11 名、30 代 14 名、40 代６名、50 代２名（以上実数）

５）留学先：10 か国および２地域

―具体的な国・地域名：中国、香港、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、台湾、タイ、ベトナム（アルファベット順）

６）留学目的別[115]：語学留学９名、学位取得目的以外正規留学[116]14 名

学位取得目的正規留学 10 名（以上実数）

７）質問項目提示の時期：面接でのインタビューの際は、回答者から事前に特に要求のない限り、その場で初めて質問を提示した。但し、メールでのインタビューではこの限りでない。

インタビューの質問（再掲）

Ｑ１．　なぜその国または大学を選んだのですか。

Ｑ２．　どのような留学生活を送りましたか。

Ｑ３．　その大学に留学して良かったこと、悪かったことは何ですか。

Ｑ４．　日本や欧米の大学と比較してどうでしたか。

Ｑ５．　社会人：アジアへの留学経験は仕事上どのように役立っていますか。

学生等：アジアへの留学経験を仕事上どのように役立てたいですか。

Ｑ６．　アジア留学を目指す若い人たちへメッセージをどうぞ。

---

[114] １人が複数国に留学した場合があるため。

[115] 最初は語学留学でも、大学での講義の聴講を許可された場合は聴講生に、また、最終的に学位を取得した場合は学位取得のための留学に分類。

[116] 学部または大学院で語学以外の講義を聴講したり、研究したりすることを許可された者。いわゆる聴講生・交換留学・（客員）研究員などがこれに該当。

１．春木政宏氏（30 代、男性―後記 32 も参照のこと）

所　　属[117]：専門商社

肩　　書：社員

留学先　：復旦大学（中国）

留学形態：語学留学

留学期間：1997 年９月～1999 年 12 月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 13 日

（１） 中国には高校時代から憧れていました。当時の恩師の影響です。彼は高校では英語を教え、大学では中国語を講じるというマルチな人でした。「これからは中国だ」というようなことを当時盛んに仰っていたので、大学では中国語を学ぼうと思いました。語学は好きですし、得意でしたから。しかし、恩師からのアドバイスは意外にも「語学は第二外国語として勉強すれば十分。大学では他に何か専門を身につけた方がよい」というものでした。その結果、進学したのは同志社大学経済学部。予定通り第二外国語として中国語を選び、在学中に１年間復旦大学の中国語コースに留学しました。

（２） 私の在籍した復旦大学の語学コースには、主に日本人向けの中国語コースと、現地学生向けの英語コース、日本語コースなどがありました。留学したばかりの頃、現地の学生は真面目だと聞いていたので、私も負けないように勉強しようと思いました。自分で言うのも何ですが、実際、本当によく勉強したと思います。ところが、ある日の朝５時頃、偶然早く目が覚めたので寮の外に出てみたところ、中国人の学生が大勢いるのです。彼らは日本語コースなどに在籍している学生でしたが、皆一様にキャンパスのあちらこちらで教科書を音読しているのです。驚きました。聞けば女子寮でも同じようなことが起こっているらしいのです。女子寮では毎晩８時になると自動的に消灯になるのですが、その後も皆、非常用の小さな明かりの周りに集まってきて、勉強をしているというのです。中国人の学生は真面目だと聞いてはいましたが、これ程とは・・。一生懸命勉強している気になっていた自分が、心底恥ずかしくなりました。

（３） 良かったことは、本当の意味での学生のあり方に触れられたことです。中国人学

[117]肩書・所属はいずれもインタビュー時点のもの。

生の真面目さ、勤勉さは別格です。勤勉さで有名なタイ・チュラロンコン大学の学生（後段 31 参照）と比較しても、群を抜いていると思います。大学とは勉強するところだという原点に帰ることが出来ました。悪かったのは大学の施設ですね。私がいた頃の復旦大学は予算も少なかったので、建物は皆老朽化していました。備え付けのコンピューターも一様に古く、IT 技術に関しては教える内容も一昔前のものだと思いました。

（4） 復旦大学はとにかく大きな大学です。わけても、日本人留学生の数が多い。後で説明するチュラロンコン大の場合には、日本人の留学生が少ないので、名前と顔がほぼ一致します。しかし、復旦大学では余りにその数が多過ぎて名前さえわからない学生が一杯いました。勉強しない不真面目な留学生の数も、相応に多かった記憶があります。現地の学生が想像以上に勤勉であることは上記（3）で述べた通りです。それから、同じく（3）で復旦大学の施設が整備されていないとお話したのですが、今ではまるで別の大学になっています。最近、同校のキャンパスを再訪したのですが、近代的な校舎が幾つも建っていて驚きました。学生寮も新築され、すっかり見違えました。この点だけは復旦大学の名誉のために、訂正してお断りしておきます。

（5） せっかく１年かけて中国語を勉強したのですが、使わないので残念ながら今ではかなり忘れてしまっています。ですので、仕事で役に立っているということも特にないような気がします。私がいた頃の中国は余りに旧態依然とし過ぎていましたし、加えて余りに民族の独自色が強くて、私には合わなかったようです。

（6） 私の友人がベトナムで詐欺に遭いました。どの国にも悪い人はいるものです。特にアジアでは日本人が狙われやすい。日本人と見れば寄って来るのです。アジアへ留学したら、そんなことにも是非注意をして下さい。周りは全て盗人だと思うのも短絡ですが、逆に周りは全て善人だと考えるのもまた同様におかしいことですから。

２．姚国亮氏（20 代、男性）

所　　属：中国料理太湖飯店

肩　　書：店員

留学先　：北京語言学院[118]、北京大学、清華大学（いずれも中国）

留学形態：短期語学留学の後、学部への正規留学

留学期間：1997 年２月～４月（北京語言学院）、同７～９月（北京大学)、2000 年３月～2001 年２月（清華大学）

インタビュー実施年月日：2006 年５月 19 日

（１）私の名はヨウクニアキと読みます。お分かりになると思いますが中国系の人間です。といっても私の家は戦前から日本に住んでいますし、父も母も日本の学校に通っていました。私もそうでしたので、普通の日本人と大差ないと思います。ただ、やはり中国は自分のルーツです。いつか行ってみたいと思っていました。清華大学を選んだのは、当時は日本人があまりいない大学だったからです。戸籍上の出身地である浙江省にある浙江大学に行きたかったのですが、当時日本人留学生と現地学生との間でトラブルがあったため、北京の大学にしたのです。交換留学ではなく、一応私費留学という形でした。当時は、ちょっとした知人さえいれば外国人枠で比較的簡単に入学出来た記憶があります。当時の中国の大学は、外貨獲得という意味からも外国人の留学を奨励しているような雰囲気がありました。

（２）基本的には留学というか、研究目的というよりもよく言えば遊学という感じですね。中国をよく知るために、旅行などにもよく行きました。課外活動では太極拳などをやったりもしました。授業は当然ながら全て中国語でしたので、思考が全て中国語になったりしたのが面白かったです。当時は一日中辞典を引いたりなんかもしていましたね。清華大学の日本語学科の学生と相互学習もやりました。

（３）良かった事は、清華大学には中国や日本の他にも様々な国から留学生が来ていたことです。そういった人たちとの交流が楽しかったです。悪い点というのは多々あったのかもわかりませんが、私の場合、それはそれで楽しいなというように捉えていました。日本なら当然というようなことでも中国ではそうではないこと。そんなのは多々あるわけです。ですから、日本の常識に無理やり当てはめないこ

[118] 北京語言学院は以下何度も登場するが、現・北京語言大学のこと。

とが大事だと思うのです。悪いことやトラブルがあっても、それも面白かったなあと。郷にいったら郷に従えという言葉がありますが、そんな感じです。ただ、今の中国に関して言えば、私が初めて留学した 97 年頃と比べて環境が大きく変化してしまいましたね。昔は、住居の設備などが日本と比べたらひどいものでしたが、最近は日本で暮らすのと殆ど変わらないようです。インターネットも使えますし、日本の情報も簡単に手に入ります。何だかそれも少しつまらないですね。私にとっては、お湯もろくにでないような寮に住んだり、トイレにも扉がなかったりするような、そういう日本では考えられないような異文化体験みたいなものこそ、留学の醍醐味のような気がするのです。今はもう北京のような大都市だと、そういった経験は得られないでしょう。最近の留学事情を耳にする度、非常に味気なく感じます。

（4）他の国の大学とは単純に比較できませんが、やはり清華大学は重点大学ということで、中国人の学生は非常に優秀だったように記憶しています。留学生に関してなのですが、理系の学部への留学生が少なかったですね。中国の大学の中では、清華大学はどちらかと言うと理系に定評のあるところなのですけれど、やはり理系、特に工学系ですと、中国は当時先進的なイメージがなかったからでしょうね。理系で強いていうならば、農学系や漢方の勉強で留学していた方がいたように思います。

（5）仕事に直接役に立っているかはわかりませんが、留学中に得た知識などは実生活においてもプラスに作用しているように思います。また上記（3）で述べたように、各国の留学生との交流から、国・立場などが違えば色々な考え方があり、物事には色々な見方があるのだなあと思いました。そういった経験があるからこそ、仕事でも実生活においても物事を幾分多角的に見られるような気がします。

（6）周りの人がアジアだと言っているから留学するとか、欧米に比べて留学費用が安いから行くというのも結構なのですが、やはりそこに行く目的がきちんとあって行った方が色々吸収出来るものが多いと思います。

３．岡本聡子（20 代、女性）

所　　属：ジェネラル・エレクトリック（GE）社
　　リーダーシップ養成プログラム（ECLP）就職内定

肩　　書：なし

留学先　：中欧国際工商学院（中国）

留学形態：経営学修士課程（MBA）への正規留学

留学期間：2003 年５月～2004 年 12 月

インタビュー実施年月日：2006 年６月１日

（１） 中国へ留学したいと思ったのは、経済成長著しい国を一度見てみたい、できれば将来そこでビジネスをしてみたい、と考えたからです。活力のある国にはそれだけ世界中から優秀な人が集まるんだろうな、という期待もありました。学部（早稲田大学法学部）時代、中国語を第二外国語として選んでいたことも関係していたかもしれません。中欧国際工商学院（CEIBS）に決めたのは、本にも書いたのですが[119]、インターネットできちんと情報公開していたのはここだけだったこと、中国国内で英語だけで勉強出来る数少ない大学だったこと、東京で入学説明会に参加したところ印象が良かったことなどが決め手でした。最初は北京大学などのホームページを探したりしたのですが、英語での情報は案外少なかったのです。

（２） これも私の本をお読みいただければより深くおわかりいただけるのですが（笑）、CEIBS は上海交通大学と EU 企業が共同で作った大学院大学です。授業は全て英語で、モデルは欧米のビジネススクールです。授業が始まるのは朝８時 50 分。ケーススタディ、プレゼンテーション、グループワーク、講演会と内容は盛り沢山です。これらの授業は６週間が１つの区切りになっていて、区切りと区切りの間には１週間の休みがあります。中間試験や期末試験も６週間の中に組み込まれています。一度に履修出来るのは３～４科目ですね。なので、勉強は毎日夜中まで、土日も図書館にこもりっきりという学生生活です。全体で１年半のコースなのですが、途中に３か月のインターンシップがあります。私は香港や広東省の日本企業で経験を積みました。

[119] 岡本聡子（2005）「上海の MBA で出会った中国の若きエリートたちの素顔」、アルク社、p.221.

（3） 良かったことは、留学生という少数派として学生生活が送れたことです。ひとつ下の学年からは、留学生の数も 20 人と増えたのですが、私たちの学年は SARS のせいでもっと少なかったのです。授業中は英語でも、休み時間は中国語。食事やスポーツをする時も周囲の会話に入りにくいなあ、と孤独な気分になることがありました。そうした一種の疎外感は、日本ではなかなか味わえないことですから、私自身はよい経験をしたと捉えています。反対に悪かったことは、学生のメーリングリストで、時として差別的な内容のものが回覧されて来たりしたことでしょうか。特に、「小日本」などと日本を揶揄したような内容のものには、私は理性的に、しかし断固として抗議しました。けれども同時に、こういった件について多くの同級生は真摯に対応してくれましたし、私が日本人ということで気を使ってくれた人たちも多いのです。これは反対によい経験と言えるかもしれませんね。

（4） 日本では学部、留学先の中国では大学院なので、両者を単純に比べるということは出来ないでしょう。しかしひとつ言えることは、授業中の議論が余り深まらないということは、日中両国で共通しているということでしょう。しかし、私が思うにその理由は日中で全く違うのです。つまり日本では、授業で発言するのに勇気がいるのです。それは、他人にどう思われるか、目立ちたがりと誤解されるのではないか、という気持ちが先に立つからです。ところが、中国で授業中の発言が少ないのは、言っても無駄、どうせ自分の成績には関係ない、という功利主義的な気持ちが働いていると思います。実際、食事時やプライベートな時間には中国人学生は実に議論好きで、自分の主張に自信を持ち、相手を打ち負かすまで徹底的に議論します。しかし、大学院の授業ではそんな勢いはまるで影を潜め、発言するのは留学生ばかり、ということもありました。私自身も授業では結構発言した方だと思います。ある時、飛行機会社を扱ったケーススタディで私が熱弁を揮ったら、中国人の同級生に「どうしてそんなにムキになるの。飛行機が好きなの」と尋ねられて驚きました。中国人の学生は本当に冷めていましたね。彼らにとって、MBA は単なる通過点なのでしょう。

（5） 現在は中国で仕事をしていませんから、現時点に限っては人脈などは特に役立っていません。でも、いずれ中国でも仕事をしたいと思っているので、その時には必ず役立つだろうくらいに楽観的に考えています。また、これも本に書いたのですが、私はビジネススクールで学ぶ内容について、それが実践的かどうかという

点についてはかなり否定的です。CEIBS は欧米型のビジネススクールを目指していますし、そもそもビジネススクールというアイデアそのものが既に欧米的ですから。つまり、CEIBS のカリキュラムは欧米の企業でなら役立つような内容かもしれませんが、アジアではどうかな、ということです。しかし、中国人のものの見方、考え方が身体に染み込むまでわかったという意味では、この留学は大変役に立ちました。また、本を出版した関係で、日本にいる中国人から会いたいとよく言われるようになり、現役留学生たちの相談に乗る機会が増えました。ライフワークとして留学生支援をして行きたいので、プライベートな目標にもこの中国留学経験は非常にプラスでした。

（6） 50 歳くらいで本を書きたいなと昔から漠然と思っていました。そんな夢が、既に冒頭でご紹介したように、中国留学を契機として 20 代で叶いました。漠然とでも思いつづければ、夢は結構叶うもんです。これからアジアへの留学を考えている若い方々にも是非実感して貰いたいですね。

４．石川文一氏（40 代、男性）

所　　属：三菱東京 UFJ 銀行

肩　　書：国際業務部　中国業務支援室　上席調査役

留学先　：北京大学（中国）

留学形態：語学留学

留学期間：1991 年９月～1992 年７月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 14 日

（１） 私はチャンスがあって業務上の目的で中国へ留学しましたが、中国という国は私にとって決して第一希望の国というわけではありませんでした。勤務先の銀行に海外留学の制度があり、私はそれで留学させて貰いました。20代の後半に社内の選抜試験を２度受けています。最初に受験した際、私自身は英語圏への留学を希望していたにも関わらず、２次試験の面接で「中国はどうか」と聞かれました。大学時代に中国語を第２外国語として選択していたことが影響していたのだと思います。そのとき、中国語圏はあまり念頭になかったので丁重にお断りしたところ、あえなく不合格。２年後に再受験した際には、チャンスがあればどこの国でもという気持ちでした。やはり２次の面接で同じことを聞かれ、今度は「はい」と答えました。この機会を逃せば、自分には二度と海外留学のチャンスは巡って来ないだろうな、と考えたのです。結果は合格。留学する国は会社が決めますが、大学は自分で決めてよいことになっていました。北京には語学留学生を主として受け入れる大学として北京語言学院があるのですが、中国の大学のことは当時あまり詳しくなく、中国と言えば北京大学だな、と単純に考えそこに決めました。結果的には大正解だったと思っています。

（２） 当時既に結婚していたのですが、留学は単身でした。会社の決めた留学のルールがで、家族帯同は認めないということになっていましたから。当時の中国は現在のように経済発展していなかったので、不便なことは数え切れないくらいありましたが、その中でも一番困ったのが食事です。中国という異郷の地での生活で、やたら脂っこいとか塩辛いとか、異なる食習慣に適応しなければならないことに加え、食材の質に信用が置けないことが心底辛かったです。学内にある留学生向けの食堂の料理は特にひどく、米に藁や石が入っていたりして、ごはんを噛んで

いるときに歯が欠けそうになることが何度もありました（笑）。結果としては、自炊することになりました。北京大学は留学生の寮、中国人学生の寮、教授陣の寮など、大学関係者各層の住居施設があり、加えて薬局とかスーパーとか病院とか、生活に欠かせない施設も全て揃っていました。反面、娯楽は非常に少ないので、その分勉強に打ち込むことが可能でした。そのため、こと勉学に限っては日本で学生だった頃に比べても、留学当時の方が圧倒的に熱心でした。

（3） 良かったことは山ほどあります。例えば、私自身初めての海外生活だったこともあり、若いうちに異文化、カルチャーショックを受けることができたことです。何でもそうですが、やはり若いうちに色々経験する方が、吸収力が違うと思います。そして異文化と言えば、中国人との付き合いはもちろんですが、大学にいた各国の留学生との交流も私にとって大変貴重な経験でした。中国国内の各地を旅行で訪れ、今は世界遺産に指定されているような名所旧跡を多く見ることが出来たことも良い思いでのひとつです。悪いことは（2）で述べたように、食事などの生活環境が厳しかったということでしょう。

（4） 北京大学には全国から英才が集まるわけで、中国人学生は素晴らしく優秀でしたね。性格的には年の割りにとてもうぶな感じがしましたが（笑）。特にその記憶力はまさにすさまじいの一言。当時私は中国人の学生と語学パートナーになり、日本語・中国語の交換学習を行っていました。私はメモをとって必死に勉強するのですが、中国人のパートナーは一切メモを取らないのです。私から聞いたことは全て覚えているんですね。実に驚くべき記憶力です。記憶力が良いというだけでなく､彼らは実によく勉強します。図書館にこもっている時間も極めて長かったという印象があります。モチベーションも違うのでしょうね。彼ら中国人学生を見ていると、「俺たちこそが国家の将来を背負っているんだ」という意識をひしひしと感じました。但し、学力が高いということと、知的で創造的な話が出来るということはイコールではありません。実際、彼ら中国人学生と話をしていても、想像力とか自分自身の考え方の主張という点において、欧米人と話したときほどの知的刺激は受けないですね。日本も似たようなところはあるのかもしれませんが、暗記中心の学習の弊害でしょうか。

（5） 具体的な事例を挙げることは難しいのですが、異なるものの見方が身についたという意味で留学経験は今も役立っていますね。ずっと日本にいた人たちとは違う

視点を持っている、という自信にも繋がっています。その他、中国に関係する仕事をするうえで、「実際に中国へ留学した経験がある」という事実は色々な点で役に立っています。

（6） おそらくは、企業が人材を採用する上で、アジアへ留学しようが欧米へ留学しようが、そしてそこでどのような学位を取得していようが、採用にあたってはさほど重要な要素ではないというのが現状ではないでしょうか。つまり、留学したという経歴だけではあまり価値を持たないのです。語学力はもちろんある程度重視されるとは思いますが、それだけではセールスポイントになりません。大事なのはあくまでも総合的人物像ですから。留学でどのような経験をし、どのような考えを持つに至ったか。異文化の中でどのような能力を身につけたのか。それら全てを含めた、社会人としてのトータルな部分を企業は見ます。留学を考えている若い人は、帰国後の就職にあたってのこのような現実を念頭に置いた方がいいですね。でも、帰国後の就職に有利とか不利とかいった目先の目的だけ捕らえて留学するのではなく、留学をして何を学ぶのか、何を経験するのか、何を身に付けるのか、留学後にどのように経験を生かしてゆくのか、というような長期的な目的を明確にし、現地においては勉学、生活ともにアグレッシブにチャレンジすることが大事だと思います。異文化の中で生活することは、絶対日本では経験できない貴重な財産をもたらしてくれます。自分で決めて留学するということは、折角の機会ですから、留学先で日本人だけで固まったりせず、色々な国の人と話をし、旅行をするなどして、その国の生活を肌でしっかり感じて下さい。留学後の人生を充実させるために、人間をひと回りもふた回りも大きくするんだという積極的な気持ちを持って出国して欲しいと思います。

５．高畠俊久氏（40 代、男性）

所　　属：株式会社ケー・インターナショナル

肩　　書：取締役

留学先　：北京語言学院、北京大学（いずれも中国）

留学形態：語学留学および歴史学部への正規留学

留学期間：1983 年９月～1988 年５月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 26 日

（１）私の場合、日本では大学へ行っておりません。行きたい大学はあったのですが、残念ながら合格しなかったのです。そんな時、父から中国の大学はどうかと聞かれ、そこで初めて中国への留学を考え始めました。当時、父は中国を相手に仕事をしており、土地勘と人脈があったのです。私も父から言われたからといってすぐ従ったわけではなく、中国という国の将来性に私自身も大きな魅力を感じていたことが最終的な決め手になりました。進学先に北京語言学院を選んだのは、父が人脈を持っていたからです。当時の中国は、一般の外国人の場合誰か現地のつてがないと入国さえ困難な状況でしたから。

（２）最初の進学先である北京語言学院では、１年間みっちり中国語を勉強しました。渡航前の３か月間、日本でも留学に備えて中国語を勉強していたのですが、残念ながらそのレベルでは現地で全くと言っていいほど使いものになりませんでした。そのため、語言学院での勉強には自然に力が入りました。もともと外国人を対象とした学校でしたので、ここにはアフリカを含めた世界各地からの留学生がおり、彼らとの交流も楽しかったです。同じ学校には、英語などを学ぶ現地の中国人も在籍していたのですが、残念ながら私たち外国人とは余り付き合いがありませんでした。卒業後は北京大学歴史学部に入学しました。北京大学は中国国内で最も競争が激しく、入学の困難な大学として知られていますが、北京語言学院の卒業生は無試験でこの大学に優先入学出来る枠があります。当時、留学生には文学部、歴史学部、哲学部の３学部しか進学を認められていませんでした。私は文学部で古代の中国語文献を読むことにも、哲学部で現地語による論理的かつ高尚な話を組み立てることにも自信がなく、残った歴史学部へ進むことにしました。一種のネガティブ・チョイスです（笑）。北京語言学院を卒業して北京大学の学部へ正

規に進学すること自体は、語言学院入学時に既に自分で決めていました。中国語の勉強は学部進学以降も続けましたし、学部に進学してからは中国人の友人も出来ましたので、会話能力などはある程度のレベルにはなったと思います。プライベートでは、学外のサッカーチームに入ったりしていました。

（3） 良かったことは、まず学部のクラスで友人がたくさん出来たことです。中国人も日本人もいました。各国の留学生との交流もとても印象深いです。あとは、中国と日本との物価の違いゆえに、日本人は中国人よりも一般的にお金を持っていますから、私自身結構裕福に過ごせたことでしょうか。特に、「食」の面ではとにかくお金を払いさえすればいいものが食べられるということで、幸運だったと思います。悪かったことは、私の拙い中国語能力のせいで、学部進学当初、授業を理解するのが大変だったことでしょうか。もちろん徐々に改善はされましたが。他に悪かったことは余り思いつかないですね。食事や生活の面で確かに途上国特有の不便はあったものの、そんなものだと思えば何とかなるものです。私自身が我慢強い性格のせいかもしれません。要は気の持ちようですよね。

（4） 私の専攻は歴史でしたので、近現代史の授業では日本がよく話題になりました。普段は穏やかな口調の先生が「あの日本人どもめが・・」などと口走るのを耳にするにつけ、これが中国の現実かな、という諦めにも似た気持ちがありました。日本や欧米の大学と異なり、先生に逆らう、ということは中国では殆どあり得ないことなので、私も特に何もコメントはしませんでした。但し、日本でよく言われるように、中国の歴史観が偏向しているというのはちょっと違うような気がしました。彼らの視点からすれば、こういう見方もあるかなと、私には自然に思えました。あと、中国人学生のメモ能力は凄いですね。先生の言ったことを細大漏らさずノートに書き写していました。日本の学生はあんなにメモはしないでしょう。あれが彼らの勉強スタイルなんですね。

（5） 実際の仕事で役に立っていることは、残念ながら余りないですね。強いて言えば、一に中国語、二に中国留学体験があるのを、ある時、会社で評価して貰ったことくらいでしょうか。まず中国語に関してですが、確かに中国人のビジネスパートナーと中国語で会話するという状況はあるのですが、一定レベル以上の中国人は英語を話す人も多いですから、結果としてもっと英語をやっておけば良かったと（笑）。次に会社が評価してくれたという件ですが、実は北京に滞在中、大手生

命保険会社の社長とお会いする機会があり、それがご縁で就職が決まりました。就職後すぐの頃にもロシア赴任の話があり、「あいつは中国でもサバイバル出来たのだから、ロシアでも大丈夫だろう」ということになって、私が指名されたりしましたし、マレーシア大使館へ出向出来たのも、中国留学を周りが評価してくれたからだと思います。

（6） まず一般論として、アジアでも欧米でも留学される時には日本のことを一番に勉強されておいた方が良いと思います。日本人が海外で聞かれるのは、大抵の場合日本の事情ですから。次に、日本人が最初の留学先として中国を選ぶのは果たして賢明な選択かどうか、よく考えた方が良いと思います。中国語が第一外国語になる、ということですから。しかし私の経験では、中国に住んでいた時でさえ、外国人が集まった時のコミュニケーション言語は英語なのです。その意味で、英語はより重要な言語だと言えます。そうすると、中国に留学するというのは結果として余り大きな見返りを期待出来ないだろう、という判断もあり得ます。熟考の末、私のように中国に留学されるなら、それはそれで良いのではないでしょうか。その時には、現地の中国人や各国の留学生との交流も大事ですが、同じように留学している日本人とも良好な交友関係を築いておいた方がいいと思います。これは帰国して仕事を始めてから気づいたことですが、そういう言わば同窓会のような繋がりは、ビジネスで実際に役に立つことが多いですから。

６．小野崎諭氏（30 代、男性）

所　　属：紅洋海運株式会社

肩　　書：舶用資材本部　営業部主任

留学先　：上海交通大学（中国）

留学形態：語学留学

留学期間：2002 年９月～2003 年６月

インタビュー実施年月日：2006 年７月 22 日

（１）私が当時勤務していた大手電機会社が、５年間で中国語に堪能な社員500人を育成するという方針を決めたのです。選抜された社員は、国内研修組と海外研修組に分かれて中国語をひたすら勉強するわけです。私の場合は部長の推薦があり、初年度の海外研修員の枠２人のうちの１人になることが出来ました。東京外国語大学・中国語学科出身だということが決め手になったのではないかと思います。しかし、言うなれば私自身が応募して勝ち取ったものではないので、中国という国を留学先に選んだのは、あくまでも会社の業務命令に過ぎません。それに比べ、大学を選ぶのは私個人の意志に任されました。まず都市を選ぶ際に北京か上海かで迷いました。会社の事務所は両方の都市にあったのです。ただ、北京には私の所属する部からの駐在員がいませんでしたので、最終的には上海にするのが色々な意味で都合がよいと思いました。そして、会社の作成した中国の大学に関する資料を読み、大学の知名度や学生寮の雰囲気などを勘案して上海交通大学に決めました。

（２）学生寮に学食にと、キャンパス内に何でも施設が揃っていたので、留学中は殆どキャンパスの外へ出ることはありませんでした。住んでいたのは外国人留学生用の学生寮です。３割が日本人でしたが、多くは学生或いは現地駐在員の奥様方で、私のような企業派遣はほんの数人でしたね。残りの留学生ですが、同じく３割が韓国人、その他にはタイやインドネシアなどの東南アジアと、カナダ、オーストラリア、アメリカ、イタリアなどからの留学生がいました。但し、欧米の国々から来ている人たちは両親のうちどちらかが中国人という人が多かったように記憶しています。勉強はもちろんしましたが、留学中はそれ以外の時間が自分のためにほぼ自由に使えました。これは大きかったです。そのため、そのような課外時

間を使って、学生寮にいない現地中国人との接触機会をもっと多く持ちたいと思い、日本語と中国語との交換学習を行うことにしました。インターネットと、あと上海には外国人用のフリーペーパーのようなものがあったので、そこにも広告を出してパートナーを募集したところ、すぐに何人か応募がありました。

（3） 良かったことの筆頭は、もちろん中国語が上手くなったことです。その他には、上記（2）で説明した交換学習などを通じ、友人がたくさん出来たことですね。中国はもちろんですが、学生寮での付き合いを通してその他様々な国の人たちと知り合いになれました。語学留学は学位目的の留学に比べ、授業の縛りはそれ程きつくないです。なので、課外時間をうまく使えば必然的に友人と仲良くなれる可能性や度合いも大きいのではないかと思います。悪かったことは余り思い浮かばないですね。学食のご飯がおいしくない、しかも日本人には脂が多過ぎて時々食あたりのようなこともあったなど、生活環境は確かに日本よりも悪いのですが、私自身は当たり前と思っていましたから。要は本人次第ですね。ただ、中国というのは怖い国だなと思ったことは一度ありました。丁度私の留学期間中に、アジアの数か国でSARSの騒ぎがあったのですが、当時の中国はベトナムなどに比べても遥かに厳格な情報統制を敷いていました。情報を小出しにしましたよね、特に感染者数などについては。いわゆる外圧というものがもしなければ、それ（＝情報を小出しにすること）さえもどうなっていたかと、今でも考え込むことがあります。

（4） 日本や欧米の大学に比べれば、まず学費が安いというのは確実に言えますね。それ以外で目立つ違いは、学生の勤勉さでしょうか。中国人の学生は、留学生に比べれば学生寮ひとつ取っても劣悪な環境に置かれています。しかし、彼らはそんな状況下でも、勉強や自己鍛錬には我々の想像以上に熱心です。早朝や深夜の学習はもはや当たり前です。キャンパスのあちこちで、大きな声を張り上げて教科書を朗読している中国人たちがたくさんいます。ジョギングやマラソンで体力を鍛える人も多いです。ある晩10時頃キャンパスに帰って来たら、ザクッザクッと砂を踏みしめる音が暗闇の中から聞こえるのです。何をしているのかと目を凝らしてみると、どうやら照明なしの真っ暗なグラウンドを何人もの学生がただひたすら走っているようなのです。こんな時間に、しかも真っ暗な中をと、とても驚いたのを覚えています。

（5） 仕事で役立っているのはもちろん中国語です。あと、中国人のビジネスパートナーと初対面の時、私は中国で勉強したことがある、住んだことがある、と告げた時に少し私への信頼感が増すような気がします。中国人というのは、ただでさえ地縁血縁を重んじる類の人たちですから、これは大きいですね。留学当時に築いた人脈は、今となってはあくまでもプライベートなものなので、直接仕事には役に立っていません。ただ、そんな彼らに、例えば2005年に中国国内で起こったいわゆる反日運動について、その裏事情を気軽に聞けるというのは、現地に人脈を持つことのひとつの強みではありますね。

（6） アジアへ留学する日本人はまだまだ少ないので、留学すればおもしろい経験が出来ると思います。実は私が留学する際、語学力をつけるなら上海のような大都市もいいけれど、大連の片田舎にでも住んで一般家庭に長期ホームステイをするのもおもしろい選択では、とアドバイスされたことがあります。当時は諸般の事情で叶いませんでしたが、今思い起こしてみると確かにそれもおもしろい選択だったでしょうね。但し、身の安全を考えておくことは必要です。滞在先はあくまでも海外で日本ではありませんし、反日暴動などの可能性もありますからね。

７．尾上皓美氏（30 代、女性）

所　　属：くろーばー（NGO）

肩　　書：事務局長（他にフリーランス通訳）

留学先　：北京大学、北京第二外国語学院

対外経済貿易大学（いずれも中国）

留学形態：語学留学

留学期間：1993 年３月と 1994 年３月（北京大）

1995 年８月～1995 年 11 月（北京第二外国語学院）

1998 年８月～1999 年１月（対外経済貿易大学）

インタビュー実施年月日：2006 年８月 24 日

（１）日本の大学（慶應義塾大学）へ進学した頃から、将来は国連職員になりたいと思ったりしていました。国連職員になるためには英語以外にもうひとつの国連公用語が出来ないといけないのですが、フランス語は競争が激しそうだと思い、中国語を第二外国語として選択しました。いわばネガティブ・チョイスのような形で始めた中国語学習だったのですが、自分の名前が中国語で発音された時の美しさなども手伝って意外におもしろく感じたのです。もっと勉強してみようと思い、１か月だけ短期語学留学することにしました。最初に選んだ留学先は、日本でも一番有名だという理由から北京大学でした。二番目の北京第二外国語学院は、留学を申し込むのが遅れて、もうそこしか残っていなかったという、これもいわばネガティブ・チョイスですね。最後の対外経済貿易大学に留学した頃は、既に社会人として働いた経験があったので、経済や貿易について学んでみたいという具体的な目的があってそこに留学しました。

（２）最初の北京大学への留学は１か月と短かったのですが、日本語科にいた新入生の中国人学生と友達になることが出来ました。この時の留学は旅行会社のパッケージでしたので、そういう機会が予め設定されていたのです。お互いに片言の日本語と中国語で話をしたのが良い思い出です。１年後にまた同じ所へ留学し、その友達と会ったのですが、彼女は私の中国語以上に日本語が上達していて焦りました。でも、学生時代にこうした刺激を受けたことはとても良かったと思います。３回目に今までより少し長い留学をしたのは、丁度就職活動が終わったばかりで

した。当初志望していた職が得られず、自分に自信を失いかけていましたので、その時の留学では現地の人たちから勇気や力を貰った気がします。最後に留学した頃は、日常会話程度の中国語には不自由しませんでしたので、中国での就職活動を含め、色々な活動をしました。例えば、現地の日本人会や日本の同窓会（慶應義塾北京三田会）などで企画委員をしたりしました。全般的に住むところには困らなかったですね。留学生用の寮に入っていましたので。

（３） 良かったことは、色々な国の人と友達になれたことですね。彼らを通じてものの見方が変わりました。例えば国についての考え方がそうです。留学生仲間にアメリカに長く住む台湾人の男性がいたのですが、彼の両親はもともと中国本土の出身なのです。「あなた何人？」と聞かれて彼は満足に答えられませんでした。日本にいた時は国というのは空気のような概念に過ぎなかったのですが、こういう価値観に出会うと考え込んでしまいますよね。それから、私自身が自分の国について余り知らなかったこと、一方的な情報しか与えられていなかったことにも気づかされました。中国人に日本の戦争責任について聞かれても、当時は私自身余り知らないので答えようがなかったんです。加害者としての歴史よりも、広島に代表される被害者としての歴史ばかり学校では教えられて来ましたから。大事なことを余り知らずに、これまで平気で生きて来てたんだなあ、と反省しました。留学して悪かったことは、私に限って特にないですね。現地で騙されたという話は友達から何度か聞いたのですが、私自身はそのような経験がありませんから。

（４） 中国の学生はよく勉強しますね。それは確かです。

（５） 通訳をしていますので、まず語学は役に立っていますね。あとは中国人のものの考え方を知っているというのも、仕事では強みのひとつです。中国人は面子を大変重んじますから。これを知っているのと知らないのとでは大違いです。今私は、日本国内に住む外国人の生活支援をしているのですが、日本人の夫から暴力をふるわれ、仕方なく離婚した中国の女性がいます。「母国へ帰れば？」と言う人もいるのですが、中国の人はそんなこと恥ずかしくて出来ないんですよね。面子がありますから。習慣も違いますよね。ある時、日本のある団体が中国で現地の団体と日中友好のためのイベントを実施する、そのお手伝いをしたことがあります。双方、明朝９時に集合、と決めたのはいいのですが、日本なら集合時間の10分前には来て、９時には仕事を始められる体制でなければならないところ、中国では

そうではありません。案の定、中国の人は皆９時ギリギリに来たんですよ。数人の日本人が怒り始めたのを見て、つくづく文化の違いというのは大きいと感じました。日中友好のイベントだった、というのが何とも皮肉ですよね。

（６） 中国は近いので、特に何も考えず留学する日本人が多いのです。日本の大学に入れなかったから、という理由で来る人もいますし。そういう人たちの中には自堕落な生活をしている人も残念ながら多いです。本科生と言いながら、実際には余り中国語を話せない留学生を実際に何人も見て来ました。あんなに広くて、なおかつ大きなチャンスの転がっている国に留学している、そんな幸せを噛み締めることが出来ないのでしょう。わかっていたらもっと勉強するはずですから。私自身も大きなことは言えないのですが、これからの若い人は、留学をする前にきちんと自分の考えをまとめた上で来てほしいですね。

８．木下紗希氏（20 代、女性）

所　　属：日立マクセル株式会社　本店経理部

肩　　書：社員

留学先　：西北大学（中国）

留学形態：語学留学兼政治学科聴講生

留学期間：2004年８月～2005年８月

インタビュー実施年月日：2006 年８月 26 日メールにて

（１） 幼少期の７年間をアメリカで過ごしたため、もともと海外には興味がありました。帰国して同志社国際高校から同志社大学法学部政治学科に進み、派遣留学制度を利用して、まずは香港に留学することにしました。合格は決まっていたのですが、運悪く2003年から2004年にかけてSARSが流行したため已む無く中止、再度中国への留学に挑戦することにしました。当初は北京の有名大学を考えていましたが、当時熱心に教えて下さっていた先生の強い推薦により西安を希望しました。理由としては、標準語が通じる範囲で出来る限り田舎を、且つ日本人のなるべく少ない地域をと考えたためです。未だに中国の半分以上が未発展地域であることを考えると、中国の実態や全貌が見渡せる西安を選択したのは正解でした。また、西安の中でもどうして西北大学なのかというと、私は語学と並行して、政治的な勉強を重視していたからです。この大学は2003年秋に行われた文化祭において、日本人留学生が現地学生との間で文化摩擦を引き起こした、いわゆる「寸劇事件」の舞台でした。また、12年前には西安市のホテルで日本人３人が殺害され、６～７年前に同志社大学から西北大学へ留学された方が未だ行方不明になっています。中国人と日本人の摩擦が激しい地域で、付き合い方を学びたかったというのが原動力にありました。

（２） この学校では特に申し出が無い限り次の学期にはエスカレーター式にクラスが上がっていくというシステムになっており、長くいるだけで特に中国語力向上に誠意や意欲の見られない人も同じクラスになり得ます。このことが、授業レベル・進行速度・他の学生の学習意欲に残念ながら悪い影響を及ぼしていると感じました（後述）。私自身は下半期（2005年２月末～2005年８月）にクラスがひとつ上がり、一番上の高級班の授業に出ることになりました。授業内容を簡単に説明し

ます。「報刊」という事業では主に新聞の記事をテキストに、書面用語や外交文書などを勉強します。日頃からテレビや新聞のニュースに注目していればそれほど難しく感じません。「読写」では中国に伝わる童話や故事を学び、文化理解と表現力の増強を図ります。描写方法や舞台背景に注目し、日本における国語の授業に匹敵します。「聴力」ではテープを聴いて問題に答えます。内容はニュースであったり、とても口語的な日常会話であったりと様々です。中国に来て最初の半年は慣れるまでの準備期間のようなものでした。上半期（2004年８月～2005年２月）に机に向かって黙々と勉強した内容が、下半期には生活上で使えるようになり、また知らなかった用法も教えて貰えるなど、ようやく使いながらの勉強が出来るようになります。私の場合も下半期には表現力が豊富になり、敏感な話題でなければ積極的に話すことが出来るようになりました。このような授業以外にも、10月には留学生の修学旅行が、11月にはマラソン大会などの課外活動があり、そのようなイベントにも積極的に参加しました。

（３） 一番嬉しかったことは、中国人に親友と呼べる友達が出来たことです。日本に元々興味を持っていた訳でもなかった中国人が、私と出会ったことで客観的視点を取り入れてくれたのです。今では互いに尊敬し合える仲になりました。他に、福建省とチベット以外は全国全省を回りました。名所旧跡巡りがメインではなく、各地域の中心街に行きました。中心街には若者が多く、彼らの暮らす空間を見ておきたかったのです。それに、中国では日本ほど大手チェーン店が町に及ぼす影響が強くないので、今も多種多様な町並みが見られます。それぞれの地域の特徴や雰囲気、他省への見解などに触れ、とても興味深かったです。観光というより調査旅行のようでした。次に悪かった点ですね。一番私をイライラさせたのは、実は日本人留学生でした。万年留学生のような方も少なくなく、日本人社会を作り上げて人間関係を複雑にしていたことが耐え難かったです。授業にも悪影響を及ぼしていましたし、海外に出たことでより排他的になっておられました。また、授業は完全に教科書に沿って行われ、とても事務的で躍動感と実践性に欠けます。教材もそれ自体の質は良いのですが、武漢大学と西北大学はともに北京語言大学出版の教材を使用しており、違う都市に留学したのに同じものを学ぶのは大変惜しいと思いました。

（４） 西安は一人っ子政策が執行されている場所ですので、学生は皆一人っ子です。将

来の両親を支えるのはその子一人しかおらず、そのため両親は小さい頃からやっきになって教育します。大半の中学校と、全ての高校及び大学は全寮制であるため学校側が求める勉強量も半端ではありません。勉強が出来るというのは何よりも親孝行であるという考えが普遍的です。他方、アルバイト（家庭教師除く）や部活（スポーツ推薦除く）といった行動は白い眼で見られる傾向も強まっています。これらは日本では社会勉強の重要な要素と考えられている事項であるし、就職面接で胸を張って言える事でもあります。しかし、中国では「他の活動＝勉強をしない＝親不孝」のような式が成立している気がします。よって中国の大学は勉強への圧力は凄まじく、日本のような国から短期間だけ留学するというのは引き締められて丁度いいかもしれません。

（５） 私は今年（2006年）４月に就職したばかりで、今は経理部の決算グループに所属しています。その中の連結決算というのが私の担当で、子会社や工場が殆ど海外にある今、それぞれの数字を連結させる作業に語学は不可欠です。英語が主な手段ではありますが、即席の資料や、現地でのやりとりの資料であれば中国語のまま提出されます。また、提出期限に遅れている会社へ電話する際にも大いに役立っています。それとこれは私情ですが、仕事を何も知らない社会人一年生というのはなかなか緊張し、居辛いものです。だからこういった語学などの得意分野がひとつでもあると、先輩の役に立てた気がして多少勇気付けられるものです。そのためにも、学生のうちにとことん頑張っておいてよかったと思います。

（６） 危険も多いので十分な準備、強すぎるくらいの警戒心、根拠のある自信を持って下さい。そしてせっかくなら世界有数の政治戦略のプロ達からも学んで欲しいと思います。

９．中野尚美氏（20 代、女性）

所　　属：専門商社　海外営業部

肩　　書：社員（営業補助）

留学先　：中国人民大学（中国）

留学形態：交換留学

留学期間：2004年９月～2005年７月

インタビュー実施年月日：2006 年８月 26 日メールにて

（１） 中国を選んだのは、中国のポップスが好きだったからということと、大陸の雰囲気に魅かれたから、というのが主な理由です。中国人民大学を選んだのは、標準的発音の普通話を身につけたかったからというのが第一。また、人民大は法学部に良い先生が多いと聞いたのも、ここを留学先に決めた理由です。日本の大学では法律学科にいましたので。

（２） 留学では、何と言っても語学をとても勉強したと自信を持って言えます。苦労したのは、口語と聴力がなかなか上達しなかったこと、そして留学後半で体調を崩し気味になって法学の授業に出られなかったことです。あと、旅行や観光に余り行かなかったことも、今となっては悔やまれますね。楽しかったことは一杯あります。留学生や中国人の友達とご飯を作って食べたり、遊びに行ったりしたこと、様々なおいしい物が安く食べられたこと、中国語の歌や映画がたくさん観賞出来たことなどです。

（３） 良かった点は、語学がある程度上達したこと、そして友達がたくさん出来たことです。 悪かった点は、行きたかったのに行けなかった場所が多いということでしょうか。

（４） 比べると言っても、日本と中国しか知らないのですが・・。ひとつ確かに言えるのは、中国人の学生の方が日本人の学生よりも数段勉強していると思う、ということです。そして、人民大は特に大学の食堂や売店、運動場などが充実していましたね。

（５） 今の私の仕事は中国との連絡係なので、中国語は役に立っています。しかし同時に、たった１年の留学では仕事上の通訳をするには全く不十分であるとも感じています。

（6） 勉強するもよし、遊ぶもよし、旅行するもよし。ただ、留学中は日本人とばかり一緒にいない方がいいと思います。 それから、留学先の環境（気候、食べ物、宿舎）も少しばかり考えに入れた方がいい気がします。

10．奥田晃生氏（20 代、男性）

所　　属：民間企業

肩　　書：社員

留学先　：北京語言大学（中国）

留学形態：語学留学

留学期間：2001 年９月～2002 年７月

インタビュー実施年月日：2006 年８月 26 日メールにて

（１） 中国を選んだのには幾つか理由があります。まず、幼少時代より香港を初めとした中国映画に非情に関心があり、自分も話せるようになりたかったというのが基本的な背景としてありました。そして、日本で大学（立命館大学）に入った頃から中国人留学生の友達が多かったので、相手の言葉をもっと理解したいと思いました。加えて、ゼミの研究テーマが日中経済だったので、中国語の書物も論文の参考にしたいと思いました。北京語言大学を選んだのは、この大学が外国人に中国語を教授する教育機関として長い歴史と評価があったことが最大の理由です。実際、中国全土で出版されている中国語の教科書は、ほぼこの大学から出版されていると言って良く、それなら本家本元へ行こうと思ったわけです。

（２） 留学していた1年間は日本人との交流を出来るだけ最小限に抑え、中国人学生、他の外国人留学生との交流に努めました。渡航後間もない頃は、日中間の文化的差異、生活様式の不便などが多少ありましたたが、それらも含めて中国を知る良い経験になったと思います。

（３） まず良かった点ですが、中国は非情に物価の安い国で、留学費用が他の国に比べてそれほどかからなかったという点が挙げられます。また中国人は非常に情が厚く、何事に対しても常に積極的な姿勢を持っていました。これは私たち日本人も見習うべき点だと今でも思います。反対に悪かった点は、衛生面です。 宿舎、食堂を初め、外でも衛生については非常に気を使わされた記憶があります。今は改善されつつあるらしいのですけれど。あと、交通の不便さも当時はかなり頭を悩ませたものでした。加えて、中国人独特の面子にこだわる性格、自己主張が強い、謝らないなどの性格は正直言って直してほしいですね（笑）。

（４） 学費が安い。これが何と言っても一番です。と言っても中国人学生の何倍かは払

わされているのですが。それでも安いですからね。施設はやはり他の大学に比べて不便なところが多かったように思います。特にインターネットなどの環境ですね。

（５） 現在貿易商社で中国、台湾向けの輸出をおこなっているため、中国語でのやり取りが多く、留学経験は大いに役立っています。

（６） 中国、韓国をはじめ、アジアの国々は欧米諸国に比べて距離も近く、文化、習慣などあらゆる点で日本と似通ったものが多いと思います。ですが、それでも全く異なった観点、また日本に対する独特な視点（これは欧米諸国よりも注意が必要）を持っているため、それらに対する予備知識、言葉の勉強をしっかり行ってから留学に行ってほしいと思います。頑張って下さい。

11. 八木澤哲氏（20 代、男性）

所　　属：神戸大学国際文化学部地域文化学科アジア・太平洋文化論専攻

肩　　書：学生（４年生）

留学先　：中国人民大学（中国）

留学形態：（学部間協定による）交換留学

留学期間：2004 年９月～2005 年７月

インタビュー実施年月日：2006 年８月 26 日メールにて

（１）（日本で通っている大学の）第二外国語で中国語を選択していて、学部に交換留学制度があったからです。

（２）学部間協定による交換留学とはいえ、実質的には語学留学のようなものでした。日本の大学は実家から通っていたため親元を離れて暮らすのは初めてで、そのことが一番楽しかったです。思っていたより留学生仲間の友人が多く出来ました。その分生活が乱れやすくなってしまったかもしれません（笑）。 あとから思えばもっと熱心に勉強すべきでした。中国各地を旅行したり、サークルのようなものを作って活動したりしたことが楽しい思い出です。

（３）良かった点は、交換留学のため補助金の支給を受けたので、経済的な負担が非常に軽かったことですね。あとは人的・空間的な面での行動範囲や、視野が広がったことでしょうか。また、以前と比べ格段に語学能力が上がったこと、海外で過ごすときのノウハウを得られたことも留学して良かったことのひとつです。反対に悪かった点は、高いレベルの語学能力や専門的知識・視野を身に付けるまでには至らなかったことです。そして、留学後についての具体的な展望を描けなかったこと。人によると思いますが、自分にとっては１年というのはあくまで「さわり」程度の期間だと感じました。もう少し時間がほしかったですね。

（４）他の国と言っても日本の大学しか知らないのですが、中国では大学という場所が居住空間であり生活空間でもあるという面が日本より強いと感じました。また、学生は日本と比べて勉強熱心である傾向が強いとは言えると思います。

（５）もちろん語学能力を生かしたいとは思いますが、まだまだ自分で満足出来るようなレベルではないし具体的なイメージが出来ていません。それより特に留学を通して自らの視点（国際的というだけでなく）を広げられたと思うので、将来を考

える上でむしろそちらの方を役立てられれば良いと思います。

（6） 頑張って下さい。時代はアジアです。

12. 堀祐一氏（20 代、男性）

所　　属：佛教大学文学部中国語中国文学科

肩　　書：学生（３年生）

留学先　：西北大学（中国）

留学形態：交換留学

留学期間：2005 年４月～2006 年３月

インタビュー実施年月日：2006 年８月 26 日メールにて

（１） 大学に入学してから中国語を勉強し始めましたが、中国には大学に入学する前から興味がありました。大学の選択理由としては、佛教大学の提携大学が西北大学だったこと、そして、中国語を選択していて、学部に交換留学制度があったからです。中国語のスキルアップを目指すために留学を志しました。

（２） 西北大学には縁があり、今回で３度目の訪問でした。そのため、不安はさほどありませんでしたが、長期留学という点で心配ではありました。中国人の先生による講義だったので、日本語が全く通じませんでした。つまり、自分の言いたい事は中国語でないと伝わらないのです。それに加え、中国人の話すスピードについていくこと、この二つに特に苦労しました。今回の留学生活で一番の思い出は、中国全国全省を制覇したことです。本や雑誌などでは見たことがあっても、実際に自分の目で見たことがなかったのです。それなら、実際にその場所を訪れ、自分の目で見てみよう、と決めました。旅行するのが好き、そして鉄道が好きということも私の背中を押しました。言葉が通じず苦労したこともありましたし、自分の計画通りに進まないこともありました。事故に巻き込まれたことも何度もありました。しかし、今となっては、それらのこと全てが良い思い出になっています。

（３） 良かった点は、交換留学生だったので、学校でトラブルがあれば、日本の大学に連絡するとすぐに解決していただけたということでしょうか。他には、大学の留学生課に日本語が話せる方がいらっしゃったということ、留学生の交流をはかるために、毎学期ごとに参加費無料の旅行があったことなどです。反対に悪かった点は、大学のキャンパス内の灯りが少なく、外を出歩くのには不便だったこと、大学のキャンパス内にあった中国銀行（日本円を中国元に換金する場所）がなく

なったこと、キャンパスの移転に伴い、西北大学の日本語学科の学生との交流の場がなくなったことなどです。

（4） 日本と中国の大学しか知らないので余りわかりませんが、留学生だったこともあり、授業数が少なかったです。中国では予め時間割が決まっていたのですが、自由に決められたら良かったなと思いました。

（5） 今のところ、中国に精通した仕事に就きたいと思っています。中国留学で目標を達成したように、仕事に就いてからも、自分の掲げた目標に向かって、日々努力したいと思っています。

（6） 留学はいい経験になります。日本では出来ない事を学ぶことができます。チャンスがある方は是非留学してください。行きたいと思ったら、すぐ行動しないと絶対に後悔します。日本とアジアはとても縁が深い関係です。その国を見て、知り、学び、日本との架け橋になって貰いたいと思います。それと、留学するということは、その留学先の国の事を知るということですが、日本を再確認するということでもあります。今まで、当たり前のように生活していた事が違った角度から見えるのです。私の例で言うと、両親の有り難味を知るということです。朝起きると、当然のように朝食がありました。帰宅すると、これも当然のように夕食が準備してありました。洗濯物は洗濯籠に入れておけば、翌日にはきれいにたたんで置いてありました。普段は当たり前にように感じていても、実際、家を離れて一人で生活すると、両親への有り難味がわかるものです。両親の支えがあってこその自分だということ。それも、留学生活で気づいて欲しい点でもあります。

13．三上綾子氏（30 代、女性）

所　　属：株式会社ムラカミ　海外事業部

肩　　書：社員

留学先　：中国人民大学（中国）

留学形態：（中国政府奨学金による）学部研究生

留学期間：1996 年９月～1998 年４月

インタビュー実施年月日：2006 年９月２日

（１） 父が中国に傾倒していたので、幼い頃から中国に関心がありました。あと、NHK が時々放送していた中国残留孤児の情報番組で、通訳の人が正義の味方に見えて恰好良かったんです。収入も良さそうだったし（笑）。偶然ですが、中学の時に課外授業として中国語講座がありましたので、中国語の勉強をその時から始めました。そういった様々な理由が相俟って、高校の頃には既に将来は中国語を使う仕事をしようと決めていました。進学したのは東京外国語大学の中国語科です。当時私は老舎という著名な中国人作家に傾倒しており、老舎研究では中国で最も有名な人民大学に留学することに決めました。

（２） 日本で通っていた大学は休学したので交換留学という形にはならなかったのですが、文部省（当時）から奨学金を得ることが出来ました。ですので、人民大学で取得した単位は東京外大では認められなかったものの、金銭的な心配はしないですみました。留学の目的は学部の講義の聴講です。ですが、当初はヒアリングの力も十分ではなかったので、始めの数か月は語学だけを徹底的に勉強させられました。聴講が認められてからは、当初の目的であった文学部での老舎研究は二の次にして、貿易学部の授業を中心に聴講しました。将来仕事で役立つのではないかと考えたからです。親からは「節操がない」と言われましたけれど（笑）。おもしろかったのは、様々な国からの留学生と交流を深めたことです。私のいたところは何故かラオスからの留学生が多くて、彼らとはいつも一緒でした。クラスの数人を除いて、日本人とは余り付き合いませんでしたね。

（３） 良かったことは、やはり各国の留学生との交流が深められたことでしょうね。その中に現在の夫もいたのですが（笑）。悪かったことは余り中国国内を旅行しなかったことでしょうか。もっともそれは彼らのせいではなく、専ら自分のせいな

のですけれど。あとは余りありませんね。寮など施設への不満もありませんし。中国留学中は東京外大を休学していたので、日本の大学を卒業するのが２年も遅れましたが、それは悪いこととは思っていません。東京外大では先輩方もそのように回り道をする方が多かったですし、もともと自分でも４年で卒業しようとは考えていませんでしたので。

（４） 日本の大学との違いというと、学生に関わる部分が大きいような気がします。第一に、中国人の学生の方がよく勉強しますね。人民大キャンパスの中に、夜いつも人だかりがする場所があったのです。ある時それは何だろうと思って近づいてみると、英語が聞こえてくるんですよ。中国人同士で英会話の実践練習をしていたんですね。しかも毎晩。こういうことは日本人の大学生は普通しないでしょう。あともう一つは、学生のバックグラウンドが日本とは異質だということでしょうか。今はどうかわかりませんが、当時、人民大の学生と言えば地方出身のエリートばかりでした。凄く地味なんですよね。ですから、キャンパスライフの話でも、将来の夢でも、彼らとの話はなかなか接点がなく、付き合うのに苦労した思い出があります。それから大学全体の雰囲気なんですが、キャンパス内に病院から美容院から住居から、ありとあらゆるものが揃っているというのが日本の大学とは違いますね。ですので、学生もですが、先生もキャンパスの中に住んでいることが多く、それだけでひとつのコミュニティを形成しています。

（５） 中国語は今も仕事で使っているので、これは現実に役立っています。あと、普段は意識しないのですが、中国の文化や中国人の考え方を知っている、というのもどこかで役に立っているのかもしれません。「こういう風に言えば、中国人からはこういう反応が返って来るだろうな」というのを予め想像出来るのと出来ないのとでは違うと思います。

（６） 自戒を込めて言うのですが、やはり現地の学生との付き合いを意識して心がけた方が良いと思います。私は留学生との交流の方がおもしろく、そちらに流れてしまったのですが、せっかく中国にいるのですからやはり中国人との付き合いを深めることを第一に考えるのが筋だと思います。

14. 宮田幸子氏（30 代、女性）

所　　属：朝日新聞総合サービス株式会社

肩　　書：派遣社員

留学先　：復旦大学、上海戯劇学院（いずれも中国）

留学形態：語学留学

留学期間：2004 年２月～2005 年１月（復旦大学）

2005 年２月～2005 年７月（上海戯劇学院）

インタビュー実施年月日：2006 年９月 13 日

（１） 大手電機会社の人事部に勤めていた頃、中国茶の奥深さに関心を持ちました。中でも龍井（ロンジン）茶です。中国茶と言えば龍井茶という程有名なお茶で、上海の近くにある浙江省杭州の西湖の名産です。お茶のために観光で一度そこを訪れてからというもの、中国という国自体への見方が変わりました。それまでは中国と言えば途上国というイメージが強かったのですが、杭州の発展ぶりを目の当たりにして、中国に文化的な関心も高まったのです。語学もそのひとつでした。中国語が話せたら楽しいだろうなと考えたのです。そこで私は週に一度、中国人の先生（女性）に中国語を習うようになりました。しかし、週に１度２時間では全然足りないと思い、もっと中国語に慣れるよう NHK 教育テレビの中国語講座も並行して見たり聞いたりするようにしました。その番組の中で紹介されていたのが上海にある復旦大学でした。この大学がとても有名だというのは、留学を決めてから知りました。

（２） 勤務先を退職し、貯金をはたいて留学したは良いのですが、中国に着いて早々、街角でスリを見てしまって・・・。踏み切り待ちをしていたら、男性が女性の鞄に後ろから手を突っ込んだんですよ。素早く財布を抜き取って、そのまま知らん顔でどこかへ行ってしまいました。被害にあった女性は盗まれたことも気がつかなかったようです。もうびっくりしてしまって。何て怖いところだろうと縮み上がりました。一方、キャンパスでの生活は平穏でした。例えば、住む所にも困りませんでした。留学生寮が準備されていましたから。それ以外にルームシェアという選択もあったのですが、一人の時間を大事にするために留学生寮の個室を選びました。ただ、門番のような寮監の人が怖かったのがちょっと・・・（笑）。

留学生のクラスは日本人と韓国人が半々でした。当時は中国でも韓流ブームが起きており、それを話題に韓国人留学生ととても仲良くなれたのが良い思い出です。授業には留学当初は真面目に出ていたのですが、そのうち段々欠席することも多くなりました。授業で習うよりも実際の生活で使った方が中国語は上達するんじゃないかと考え始め、それを言わば実践していたわけです。そのせいでしょうか、漢字を書くのが最後まで苦手でした。１年で復旦大学から上海戯劇学院という大学に転校したのは、もう少し中国語のレベルを向上させたい気持ちと、新しい環境でまた心機一転頑張ってみたかったのとが理由です。市の中心部にある上海戯劇学院に拠点をおき、上海生活をより楽しみたかったという気持ちもありました。転校の手続きや、引っ越しなど、自分一人で動いて不安もありましたが、問題なく事が運び、自分に対して自信が持てました。結局合計１年半で初級から中級の上の方まで進むことが出来ました。

（３） 良かったことは留学のための費用が安かったことでしょうか。100 万円あれば、大学の学費を含めて半年暮らせますから。欧米の３分の１位の経費ですむのではないでしょうか。私は自分の貯金で留学したのですが、旅行にも何度か出かけられる程の余裕はありました。失望したのは、自分たちが教わっている先生が、実は本職の方々ではなかったという事実です。将来先生になりたいと考えている大学院生が多かったようです。ですので、真面目にはやってくれていたのですけれど。わかった時は結構ショックでした。こちらもちゃんと学費を支払っているわけですし。英語なら TESOL（外国語としての英語教授法）という共通の資格があり、それなりの大学や語学学校ではこれらの資格（学位）を持っていない人が先生になることはないと聞きます。中国語ではそこまでの縛りがないため、このような事態になっているようです。

（４） 中国人の学生は頭のいい人たちだなあと思いました。よく勉強もしますし。これは中国留学経験者の共通の印象なのではないでしょうか。先生が本職でない、というのは上でお話しした通りです。大学職員の方々は日本とはかなり違いますね。働く、ということへの認識が異なっているからではないでしょうか。例えば、日本なら隣の職員が忙しそうに働いていたら周囲の人が助けると思います。中国ではそんなことは余りなく、ただ傍観しているのみです。最初は怠け者と思っていたのですが、理由を聞いてみるとどうも違うようです。仕事を手伝うとその人の

仕事を取ってしまうことになるので、そういう失礼なことはしない、という考え方のようなのです。驚きました。そういう捉え方もあるのかと。あと些か蛇足なのですが、日本の大学と違うのは、キャンパスの内外で男女学生の非常に親密な様子が見られたことです。上海という比較的開かれた土地柄だからなのかもしれませんが、見ているこちらが恥ずかしくなる程の熱い抱擁を繰り広げるカップルもおり、最初はかなり驚きました。現地の方々は寛容なようですね。この点でも中国人への見方が変わりました。

（5） 残念ながら、今は中国留学の成果を発揮出来るような仕事をしていません。中国語が話せることをもっとアピールすればいいのかもしれませんが、普通、企業は私のような中途採用希望者に対してプラスアルファを要求するのです。中国語以外に何か出来ること、というのが大事なんですよね。中国への留学経験だけで押して行けるのは、おそらく新卒だけでしょう。私の場合には、人事部でのキャリアをもっと積極的に売り込めばいいのかもしれません。ただ、私の中では、中国留学を是非とも仕事に直接役立てようという気持ちは特別強くないのです。例えば、将来ボランティア活動をする時に、学んだ中国語が役立てば、それはそれでいいのではないかと。例えば、留学当時お世話になった中国人が日本に来たりしたら、その時には何らかのお役に立てればなと。その程度の気持ちでいます。

（6） 現地でしかどうしてもわからないことがあるので、一度は留学というものを経験した方がいいですね。そして、留学するとすればまず日本のことをよく理解することが必要です。特に留学初期は、留学生同士でお互いの国の文化紹介みたいになるので、自国の文化をきちんと外国語で説明出来るようになっておくことはとても大切です。加えて、日本人としての誇りを持っていること。これも日本から一歩外へ出た時にはとても大切なことです。

15．佐々木宏氏（30代、男性）

所　　属：時事通信社

肩　　書：記者

留学先　：吉林大学（中国）

留学形態：（文部省による）派遣留学

留学期間：1992年９月～1994年２月

インタビュー実施年月日：2006年９月19日

（１）高校３年時の予備校冬期講習の世界史（論文）の授業を通じ、日本はアジアの一員であり、自分もアジアの人間だということをようやく認識し、それが契機となって、東京外国語大学の中国語学科を選びました。当初はタイ語を専攻しようと思っていましたが、就職など将来のことを考えて中国語を専攻することにしました。それまではアジアは基本的に嫌いで、「ただの遅れている国」と見向きもしていませんでした。留学先を吉林大学にしたのは幾つか理由があります。私が合格した文部省（当時）派遣の留学制度では、国費留学生を受け入れる大学自体がそもそも限られており、その中で、出来るだけ標準的な中国語を学べるところ、北京と上海以外の日本人が比較的少なく勉強に集中出来るところなどの基準で吉林大学を選びました。前年夏に、吉林大のある長春に旅行で行った時、街の印象がよかったことも理由のひとつです。

（２）学部で中国語を専攻していたため、留学時には既にある程度中国語が話せました。そのため、吉林大では留学生向けのクラスで中国語の勉強もしましたが、聴講生として中国の学生に混ざって学部（中文系）の授業に出ることも許可されていました。私の研究対象は中国現代文学で、王安憶という文革世代の女性作家を主に研究していました。慣れてくると、学部に加えて大学院の授業も聴講させてもらい、もう１人の日本人留学生と一緒に、院の教授に個別に講義していただいたりしました。学部の授業に出られたおかげで、中国の学生とも深い交流ができました。今でも覚えているのは、あるクラスメートに発生した事件です。彼がある日、自分の妹が人身売買の被害にあって内モンゴルにいると私に打ち明けたのです。身内の恥なので他人には言わないでくれと口止めされたのですが、聞いてしまった以上、こんなに大事なことを黙っているわけにはいきませんので、他のクラス

メートに私から事情を話しました。彼が直接出向いて妹を救い出すことになり、私は軍資金を提供しました。幸い、彼女は発見され保護されたのですが、中国では村ぐるみで人身売買をするような地域も多く、警察が必ずしも正義を実現していないことなど、日本にいてはわからない、中国人が置かれている極めて困難な状況を深く理解しました。

（3）留学先の吉林大学は、中国と朝鮮半島との国境にある吉林省の大学で、留学生は日本人のほか、韓国人やロシア人、北朝鮮人もいました。但し、北京や上海など大都市の大学に比べれば留学生の受け入れに慣れているとは言えず、不都合なことがありました。生活支援のノウハウも、それ程あるとは思えませんでした。同じ寮に北朝鮮から来ている留学生の男性がいたのですが、彼は時々他人のものを盗んだり女風呂を覗いたりしていました。それは留学生誰もが知っている事実でした。一度寮で、日本人留学生の机の中を物色していたところを見つかったこともあります。言わば現行犯ですね。当然、大学当局を通じて警察が事情を聴きに来ましたが、結局ことはうやむやに。最後にはしっかり「卒業」しましたが、どこにそんなお金があったのだろうと思うようなテレビや洗濯機などの家電類を山のようにお土産にして帰国しました。不愉快な思い出のひとつです。反対に、留学して良かったことは本当にたくさんあります。日本人を含めたくさんの友人が出来たこと。日本にいた頃は自宅から大学へ通っていたので、実は吉林での留学生活が初めての一人暮らしでした。一人暮らしも大変貴重な体験でしたし、そこで多くの友人たちに巡り会えたことは今でも私の財産です。また既に述べたように、すべてではないにしろ、中国という国の現実を身をもって理解出来たことは最大の成果でした。中国の大学は、定期的に共産主義を学習する時間があるのですが、これにも２度程参加しました。普段は政治のことは殆ど話さない同級生が、この集会では「私は将来、国のために共産党員になりたい」などと発言するのに驚きました。留学生の管理が厳格な大学だったら、このような集まりに留学生が参加するなどということは到底許されないのでしょうが、当時の吉林大学はその点でもいい意味で「ゆるい」大学でした。

（4）学生がよく勉強すること、勉強の仕方が詰め込み型であることなどでしょうか。とにかく暗記している、というイメージが強いです。半面、授業では非常に活発に発言するところは新鮮でした。たとえば、ある唐詩の解釈を学生に質問すると、

何人もの学生が挙手して自分の考えを述べるというように。それから、当時は都会育ちの裕福な学生ももちろんいましたが、大多数は真面目だが田舎出身の貧乏な学生でした。私は四川省の農村地帯にあるクラスメートの実家へお邪魔したことがあるのですが、生活は本当に貧しいものでした。残された家族がぎりぎりの状態で暮らしているのに、１人息子を大学に進ませているのです。一族の期待は相当なものだし、本人もそれを自覚しており、都会育ちの学生よりもこういう学生の方がよく勉強していました。

（５）中国へ留学したことで、日本での大学卒業が２年遅れました。就職活動で不利になるのではと最初は不安でしたが、留学経験は概してプラスに評価されました。今勤務している通信社もそのひとつです。私はそこで記者として経済を担当しています。直接中国語を使って仕事をする機会はありませんが、経済的な発展に伴い、仕事で中国のことを耳にする機会が増えており、その意味では留学したことが間接的ではありますが役立っていると言えます。いつか中国に駐在してみたいという希望も持っています。

（６）留学の目的や自分の思い描く将来のキャリアなど、事前に色々と考え準備した上で留学することが大事です。私は卒業後の進路について、留学してから決めようと思っていましたが、留学先で学習を進めたり人脈を開拓する上でも、事前に進路を決めていくことが理想だと思います。少なくとも方向性だけは決めていったほうがいいと思います。これから行かれる方々には勉強だけでなく、留学する国と日本との架け橋になれるよう、友達をたくさん作ってほしいと思います。頑張って下さい。

16. 萩谷久美氏（30 代、女性）

所　　属：在上海日本国総領事館

肩　　書：副領事

留学先　：復旦大学（中国）

留学形態：国際関係・公共事務学院修士課程への正規留学

留学期間：2002 年９月～2004 年６月

インタビュー実施年月日：2006 年 10 月 11 日メールにて

（１） 子供の頃台湾に住んでいたので、引き続き中国語を勉強しようと考えました。また、中国語を勉強する場所として、職場の規定で中国大陸以外の地域（台湾、香港など）は認められなかったので、中国を選択しました。さらにその中国の中では、上海市が便利であると考え上海市を選択しました。上海市には中国の全国重点大学が複数ありますが、単純に最も有名な復旦大学を選択しました。また、母校慶應義塾大学の教授が、復旦大学の教授と懇意であったことも復旦大学を選ぶきっかけとなりました。

（２） 修士課程であったため、授業について行くのが大変でした。予復習及びレポートに追われる留学生活でしたね。時間があるときは上海市中心部にショッピングに行き、生活には特に不便はありませんでした。また、長期休暇には中国のその他地域を旅行したりして、大変楽しかったです。

（３） まず良かったことは、復旦大学には自由な校風があり、クラスメートと比較的友達になりやすかったことです。反対に悪かったことは、キャンパス及びその周辺がちょうど再開発中であったため、あらゆるところが工事中で、環境が最悪だったことでしょうか。

（４） 中国への留学は、復旦大学に限らずどんな名門校であっても、外国人は簡単に入学出来ます。さらに、入学後も基本的に特別扱いをされる（中国人の学生と同じレベルを求められない）ため、レベルの低い留学生が多いことが大きな欠点です。学士、修士課程などであれば若干やる気のある留学生が集まっていますが、多くの留学生は留学生課程（学位のない ESL のようなもの）に所属しており、こういった課程は外国人であれば基本的に誰でも入れるので、全くやる気のない学生が大量に留学に来ており、全体の雰囲気を怠惰なものにしています。また、留学生

課程には中国人学生が全くいないので、中国人と友達になる機会が少ないことも欠点と言えます。こういった点が欧米への留学との大きな違いではないかと思います。但し、学費が安い（年 30 万円程度）というメリットはあり、怠惰な雰囲気を個人のやる気でカバー出来る学生にはお勧めの留学先ですよ。それから、日本の大学と比べた場合ですが、私の経験では、日本の大学は受験後のバケーションのような雰囲気があり、やる気がある学生が少ないように感じるので、中国の留学生活と結局は大差ないと考えます。

（5） 現在の仕事は中国と深く関わっているため、語学面はもちろんのこと、留学を通じて中国を多少理解出来たことが仕事上大変役に立っています。また、中国人の友人に仕事上のアドバイスを求めることもあり、人脈という意味でも非常に助かっています。

（6） 中国に限って言えば、留学生課程ではなく、学士課程以上に所属した方が圧倒的に役に立つと思います。事前に１～２年中国語を勉強すれば、学士課程以上に入学することは可能です。また、留学先は将来のキャリアに結構影響するので、長く付き合うつもりで本当に好きな国に留学することをお勧めします。中国留学はビジネスには役立つであろうし、就職にも有利になるでしょう。しかし、日中関係は今後も歴史問題などを巡って暗い部分を持ち続けるでしょうから、厄介な事象の多さに疲れを感じる可能性も考えておいた方がよいと思います。もっとも、欧米への留学で言えば、潜在的な有色人差別などに疲れを感じる可能性もあり、また、途上国であれば治安の悪さや生活の不便さに疲れを感じることもあるでしょう。まあですから、自分の性格を考えた上で、ずっと付き合って行きたい国を選ぶのが結局はベストだと考えます。

17. 吉田均氏（40 代、男性―後記 27 も参照のこと）

所　　属：山梨県立大学

肩　　書：国際政策学部助教授

留学先　：香港中文大学（香港）

留学形態：大学院修士課程への正規国費留学[120]

留学期間：1988 年８月～1989 年６月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 25 日

（１） 1987 年に台湾から帰国した私は、研究意欲に目覚め大学院へ進学することにしました。そして、そこでは香港を次の研究対象とすることにしました。当時の中国は、本土、台湾、香港と大きく３つに分裂しており[121]、既に台湾は経験していましたから。研究のテーマを「香港と広東省との経済補完関係」に定め、理想的な留学先として香港中文大学を探し当てました。この大学と当時交換留学協定を結んでいた日本の大学を幾つかピックアップし、結果的に筑波大学大学院地域研究科修士課程東アジアコースへ入学したのです。普通は日本の大学に入学してから、留学先を探すという順番なのでしょうが、私は逆でした。そういう意味では我ながら用意周到でしたね。

（２） 当時の香港中文大学では、留学生はほぼ全員が国際交換計画学部というところに所属することになっていました。私ももちろんそうです。研究の方法ですが、入学早々、大学から各自の関心領域を聞かれ、それに相応しい先生を後で紹介して貰うというような手順でした。基本的には好きな科目は殆ど取れます。希望する人には語学のコースも用意されていました。宿舎は中国人学生と同じです。私の指導教官（中国人）は日中関係が専門で、在香港日本総領事館とも交流があったため、私も領事館の専門調査員などが参加する研究会に参加が許されました（後述）。このように、大学以外で学んだことも多かったですね。

（３） 最も良かったことは、世界史に刻まれるような歴史的瞬間に立ち会えたことです。私が香港滞在中、中国で天安門事件が起こったのです。地続きの香港でも、当時大規模なデモが起こりました。これを実際に見聞出来たのは研究者として大きい

[120] 研究生として分類。
[121] マカオを含めれば４つ。

ですね（後述）。あとは優秀な学生に囲まれて研究が出来たことでしょうか。香港中文大学の授業では、常に英語と中国語（マンダリン）、そして広東語の３か国語が飛び交っていました。言い換えると、中国人の学生は皆これらの言語をごく普通に話せたということですね。これには大変驚きました。時には日本語さえ飛び交っていましたし。悪かったことは、留学資金が本当に足りなかったことですね。私は筑波大学の学生として、日本政府から奨学金を貰って留学していたのですが、月当たりの支給額が６万円そこそこと非常に安いのです。普通の生活にも困るような状況でした。当時の日本政府の基準では、香港への留学には、インドネシアなど東南アジアの国々と同じランクの額しか支給されないことになっていたのです。物価水準が全く違うにも関わらずです。現状を見る目を欠いていますよね。日本の私立大学から交換留学で来ている学生の方が余程支給額が多く、羨ましかったです。

（４） 香港中文大学は香港大学と並ぶ難関大学ですから、図書館などあらゆる施設が立派でした。大学として大きな山をひとつ所有しており、その山に白い綺麗なビルが幾つも建っているという光景です。日本と比べ学生が優秀で勤勉なのも、台湾留学の時と同じ印象ですね。

（５） 研究者としてのモノの見方を体得したのは、この香港留学でしょう。特に天安門事件の経験が大きいです。既に述べましたが、当時私は日本領事館の職員や現地駐在員が多く参加する研究会に参加させて貰っていました。ある時、競馬場の近くで小さな集会やデモが頻発しました。その直後の研究会で、ある中国人の学者が「最近の集会やデモは、今までに起こった同様の動きとは明らかに違う。中国国内の動きとも合わせ考えれば、香港でも近々大規模な動きがあるはず」と現状分析したのです。出席していた日本人の多くは信じませんでした。本気にしていなかったのです。しかしその２週間後、香港では前代未聞という 100 万人規模のデモが起こり、やがて本土の天安門事件へと推移して行きました。この一件から、私は海外の日本人社会は余り情報収集力がないことを知りました。そこで、自分にも在外公館での情報収集・研究活動が出来るのではないか、と思い始めました。そしてそれは後で実現しましたから[122]、この留学がなければ私のキャリアは変わっていたでしょう。

[122] 吉田氏は 1996 年から 1998 年まで、在瀋陽日本総領事館に専門調査員として勤務。

（6） 留学する前の私は、自分自身がまるで社会の歯車の一部であるかのように感じていました。自分の意志とは無関係に、社会においてある一定の役割を果たさなければ、というような思いです。しかし、台湾へ留学してから（後記 27 参照）人生は自分のものだと考えるようになりました。若い時に異文化に触れるというのは、それほど影響が大きいのです。出来るだけ若い時期に、一度留学を経験することを勧めます。

18. 千葉美紀氏（20 代、女性）

所　　属：インフォシス・テクノロジーズ

肩　　書：エグゼクティブ・セールスサポート＆ビジネスアナリスト

留学先　：ジャワハルラル・ネルー大学（インド）

留学形態：経営学修士課程への正規留学

留学期間：1999 年８月～2001 年５月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 18 日メールにて

（１） 大学時代は国際関係学を広く浅く学んだため、経済学という専門を修士課程で身につけたいと思いました。特に興味を持っていたのは、発展途上国がどのように発展するかということ。そのため、当初はアメリカ・イギリス留学を考えていました。両親からは、奨学金が貰えないなら留学は応援出来ないと言われました。そして、ニューヨークに行くはずが、何故かニューデリーになりました（笑）。「何故か」と冗談ぽく言いましたが、もちろん理由はあります。つまり、開発経済に興味のある私が、発展途上国で実際に現場を見ながら学ぶということはとても大切であると思ったのです。また、インドは英語圏であり、その当時人気があった中国よりもインドに賭けようと思ったのも理由です。幸い、インド政府の奨学金も得られましたし。また、留学前にインドを訪れた際に、この国は成長する可能性を秘めているという直感も大切にしました。大学を選んだ理由は、大学（明治学院大学）時代の恩師である平島先生およびアジア経済研究所の内川さんより、ジャワハルラル・ネルー大学（JNU）が一番ということで即決しました。日本で言うと、筑波大学のような印象です。

（２） インドの教育機関は、イギリスと似ていて、小学校が６年、その後に High School（中学・高校がひとつになっています。）で７年目～10 年目となり、その後、２年間 College に行き、大学（文系は３年、理系は４年～場所によりそれ以上）となっており、私は文系の３年を終了した後の修士課程に２年間留学しました。日本やアメリカと異なり、修士課程でも講義が中心で、卒論は不要です。また、２学期制で、７月～12 月（モンスーンセメスター）、１月～５月（ウィンター・サマーセメスター）となっています。授業は英語で行われ、30 名ほどが座れる小さな塾のような教室で行われます。私が入学した際には、授業開始が

８月からでしたので、気温は 40 度。英語（しかもインド訛りが強い）で初めて微分積分を習ったので、毎日がチャレンジでした。また、夏場は計画停電がありましたし、私は高温にも慣れていませんでした。その上、蚊の大群にまで悩まされたりと、かなりつらい思いをしましたが、経済理論を習う程度の環境はちゃんと揃っていました。

（3） 良かったことは、インド人と一緒に勉強と住まいを共にして、本当に仲のよい友人が出来たことです。また、人生で生きることにおいて大事な家族との関係や論理的な思考を考えることができました。例えば、何かを達成するにはどのようなオプションがあり、どの道が一番早道かということを考えます。今までは適当にやって来ましたが、それは日本であったためです。日本はモノが溢れていて人も親切なので、何とかなりました。しかし、インドで適当にやると、騙されたり遠回りをしたりして、いつまでたっても目的を達成出来ない状態になります。そういった効率の悪い環境で、どのように効率よく生きていくかの知恵が身についたと思います。悪かったことは、デリーは夏がとても暑く、冬がとても寒いので、体に自信のある人でも辛い地域です。また、日本食は手に入るものの、値段は日本の定食屋と同じかそれ以上（1000 円～2000 円）なので、資金のない留学生にはとても高価なものになります。また、入学手続きや寮などの手続きがとても面倒でした。自力で１キロ２キロ離れたそれぞれの建物に居る担当者にサインを貰わなければいけないので、忍耐が必要です。また、大学の職員はインドの国家公務員なのですが、怠け者が多く、行っても居なかったり、対応が悪かったりします。

（4） 当時はクラスの中に１人だけの外国人だったので、他のインド人のクラスメートから、生活・勉強などで助けられました。インドでは日本人に対する人種差別がないせいか、いつでも話しかけられて、本当に幸せな日々を送りました。日本の大学と比較すると、要領よく勉強する学生が多かった気がします。暗記力も日本人以上なので、授業に出なくても試験で必ず高得点を取る人たちが多かったです。私も必死に勉強しました。インド人は先生に対する尊敬の念が高く、アメリカの学生は普通前の席に座る人が多いですが、インドの場合、日本人の学生と同じで後ろの方に座る人が多いのには驚きました。

（5） インドというアジアでも特殊な文化を経験した結果、現在注目されているインド

の IT のオフショア業務で非常に役に立っています。というのは、日本人はインド人の思考回路がよくわかっていない人が多いので、プロジェクトで泣き寝入りするケースが多いからです。一緒に苦労をし、汗をかいたインド人の思考回路を参考にして、プロジェクトで失敗しない秘訣を得ています。また、激しい競争社会のインドで、忍耐力とアピールの方法を身につけることが出来たと思います。

（6） インド人は非常に頭がいいので、頭の悪い私の偏差値を上げて貰いました。環境的には辛い場所ではあると思いますが、是非インド人のクラスメートと一緒に汗をかいて勉強して下さい。何をしようか決まっていない人や、普通の留学に物足りない人には是非インド留学をお勧めします。額はわずかですが、インド政府の奨学金を取得すると授業料が無料になりますので、是非奨学金を利用されることをお勧めします。

19. 荒川ひろこ氏（30代、女性）

所　　属：アーンスト・アンド・ヤング（Ernst & Young Pvt. Ltd.）

肩　　書：日系企業担当（Executive, Japanese Business Services）

留学先　：ジャワハルラル・ネルー大学（インド）

留学形態：修士および博士課程への正規留学

留学期間：1999年8月～2005年7月

インタビュー実施年月日：2006年9月28日メールにて

（1） 大学２年のとき、初めて行った海外のインドで、一言で言えばいわゆるカルチャーショックというものを受け、インドのことをもっと知りたいと思いました。留学先を探していたところ、よい評判を聞き、また、外国人の入学枠もあったジャワハルラル・ネルー大学（JNU）に応募したところ、合格したので入学しました。

（2） 修士号（M.phil）はコースワーク１年と論文１年。博士号（Ph.D）は論文のみで授業は基本的にありません。最初のほうは生活に慣れるだけで精一杯でした。慣れてくるにつれ、何よりも自分のペースを守ることが大事だと思い至り、極力無理をしない生活を心がけました。体力的にも、精神的にも。インドでの生活自体が勉強という感じでした（それはインドで暮らす今でもそうですが）。

（3） 良かったことは、まず寮に住み、生活を通してインドを知ることが出来たことです。次に、インド全国から学生が集まっており、また、どちらかといえば自由な雰囲気だったので、色々な価値観を学ぶことが出来たことです。変人も一杯いて面白かったです。同様に、３番目として、外国人留学生も国際色豊かだったことです。例えば中央アジアの国々など、日本にいた時は殆ど知らなかった（ごめんなさい）地域についても興味が広がりました。逆に悪かったことは、それらと矛盾するかもしれませんが、キャンパス内に寮があって、殆どの人がそこに住んでおり、自分で意識して脱出しなければその狭い世界に安住してしまいそうなところです。中には殆どキャンパスから出ないインド人もいたりしました。次に、寮の住環境です。JNU でのそれは、日本的基準のアメニティとはかなりかけ離れたものでした。ただしそういう環境で生活することから学ぶものは大きかったと思います。大学の事務は最悪でした。しかし、それはこと大学に限ったものではなく、インドのお役所はどこもひどいので、そういう意味では対応術を習

得するのに役立ちました。

（4） 欧米の大学には行ったことがないので、比較出来ませんが、はっきり言って、最新情報へのアクセス、文献の豊富さ、インフラなどではいわゆる先進国が圧倒的に有利であり、インドは太刀打ちできません。授業の質も教授次第でかなりばらつきがあります。但し、今の世界が抱える諸問題について、違った角度から考えることが出来るかと思います。日本にいれば他人事に思えてしまいがちな様々な問題が、インドでは日常と隣り合わせになっていることも多いです。また、インドの学生は政治にとても敏感なので、議論をしたりするのもかなり面白いです。

（5） 語学関係（英語、ヒンディー語）は仕事上役立っていると思います。基本的に今デリーで仕事をしているのは、仕事を通して学生の視点とはまた違った側面のインドを学びたいという動機が大きいので、そういう意味で学生時代の視点は、比較の対象となっています。但し、これは私個人の内面の問題であり、仕事上役立つかどうかという話とはまた別ですが・・・。

（6） とにかく頑張ってください！

20. 長島絵里氏（30 代、女性―後記 21 も参照のこと）

所　　属：なし（フリーランス）

肩　　書：日本語教師

留学先　：インドネシア大学（インドネシア）

留学形態：語学留学

留学期間：1998 年８月～1998 年 12 月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 29 日メールにて

（１） インドネシアに行ったのは、日本で勤めていた会社の合弁会社がインドネシアのジャカルタ近郊にあり、そこへ親しい先輩が転勤になったため、同期の友達と遊びに行ったのがきっかけでした。先輩の知り合いを通じて仕事を得たのですが、元々言語に興味があったので、もっと幅広い範囲で使えるインドネシア語を習得したくて、インドネシア大学付属の語学学校（以下BIPA）に入学を決めました。インドネシアでは語学学校は大学付属のものしかありません。首都のジャカルタにはBIPAしかないというのも１つの理由ですが、その他の理由としては、充実したプログラムやインドネシア一の名門大学ということでした。そこに通う現地の学生との交流や、各国や企業からBIPAに派遣されてきた研修生たちとの交流も目的のひとつでした。

（２） 公私共々充実しておりましたが、やはりいつもレポートや発表準備などに追われ、きつくもありました。学生のレベルがとても高かったので、そのレベルについていくため必死でした。

（３） インドネシア大学の良い点は、大学の中を専用のバスが一周するのに何分かかるかわからないというほどの広大な規模と、色々な施設が整っていることです。キャンパスの中には広場や大きな池などもあるので、散策を楽しんだりもできます。語学プログラムに関しては、初級・中級・上級の３段階にしか分かれていないのですが、中級では既にかなり高いレベルを学びます。ですので、中級を修了しただけでもかなり内容には満足出来ると思います。また、課外活動として、インドネシアの文化体験もできます。日本で習おうとしたらかなりお金のかかる各地域のダンスやバティック（ジャワ更紗）なども希望者はただで受講出来るということが本当に良かったです。悪かった点は、キャンパスが広すぎて、違う学部の現

地の学生と知り合う機会が殆どなかった事です。また、今は大分簡略化されたようですが、当時はビザの手続きが複雑だったこと、申請の期間が少なくとも半年という長い期間かかることが面倒でした。

（4） 語学留学でしたので、現地の学生との交流もそれほどなく、インドネシア大学のことはよく分かりません。ただ、インドネシアでは大学の卒業が非常に難しいという話は聞きました。特にインドネシア大学はインドネシア一の大学ですので、中でも殊更に厳しいらしく、20代後半になっても卒業出来ない人も多数いると聞いております。

（5） インドネシア滞在中は、日・英・インドネシア語を使用し、ビジネス交渉の場で語学力を活かしておりました。

（6） アジアだけには限りませんが、留学する度に思ったことは、日本のことをよく知る必要があるということです。外国人は文化、政治、歴史など、多くの面で日本に興味をもっています。それらを上手く説明し、伝えられるよう母国のことをしっかり学んでおくことです。それと同時に相手国を理解する努力も重要です。良い経験も多い反面、先進国で育った私たちには理解し難いことにも多々遭遇します。しかし、いつも日本と比較すると、自分が追いやられてしまいます。その環境に適した思考が必要になるでしょう。

21. 長島絵里氏（30 代、女性―前記 20 も参照のこと）

所　　属：なし（フリーランス）

肩　　書：日本語教師

留学先　：韓国外国語大学

留学形態：学士課程への正規留学

留学期間：2001 年９月～2006 年２月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 29 日メールにて

（１） 渡韓したのは、交際していた韓国人との結婚を決めたからでした。韓国外国語大学（以下韓国外大）を選んだのは、色々な外国語に興味があったためです。

（２） 韓国外大では日本語学科とマレーシア・インドネシア語学科に所属しました。学部生として1年から通い、４年で卒業するまで在籍しましたので、期間が長い分大変でした。インドネシア大学と同じく（前記20参照）、学生のレベルがとても高かったので、そのレベルについていくため必死でした。いつもレポートや発表準備などに追われてきつかったのも、インドネシア大学と同じです。

（３） 韓国外大の良い点は、外大という事もあり、外国語である日本語に興味を持つ人が多かったことです。学生だけでなく、教授や講師の方々もとても日本や日本語に興味をもっていて、親しくなりやすかったことが良かったです。一般教養などでは、講義についていくのが大変でしたので、同じ講義を受けている学生と日本語との交換学習をして、お互いに勉強になったり交友を深めたり出来ました。悪い点は、冷暖房の施設が整っていない講義室もあり、快適な環境で講義を受けられなかったことです。また、図書館があまり広くないのでテスト期間などは席を取るのが大変で、これは非常に不便でした。その反面、図書館の一部は24時間オープンですので良かったです。私にとって一番悪く思えた点は、一科目当たりの単位です。韓国の大学では、殆ど一科目が３単位です。しかし、韓国外大では卒業単位が140と他の大学より多いのに、言語を専攻している場合、１科目は殆ど２単位で、中には１単位のものもありました。しかも、私の場合、その殆どが必修科目だったので、受講せざるを得ませんでした。したがって常に受講科目が多かったです。そのため、沢山の科目を深く研究する余裕がありませんでした。また、一時限は２時間でお昼の時間は設けられていません。昼食をまともに取れな

いことも多々ありました。

（４） 韓国は、インターネットの普及が日本より早く進んだので、2001年には既に大学の受講申請などはインターネットで行っていました。当時は学生が一度にアクセスすると、それに対応しきれず時間がかかるなど不便もありましたが、それも早いうちに改善されました。韓国人は一般的に勤勉です。しかし、高校まで体育の授業ですらまともな運動をせず、勉強ばかりして来た人（特に女性）が殆どです。ですからスポーツで汗を流そうという人はそう多くありません。そのために、日本の大学ほどスポーツサークルが盛んではありません。また、学部では指導教授もいませんし、ゼミもありません。学部生の殆どが熱心に勉強するのは、自分の専門分野よりも英語です。韓国は就職にはTOEICの高得点が必要です。大企業になればなるほど高得点を求められます。しかも、年々高い水準を求められ、今ではTOEICのスコアだけ900点を超えるくらいでは大企業には入れません。英語は基本で、その他に第２外国語を求められるようです。それに加えて最近では、語学が達者なだけでは十分ではなく、経営学などの分野で基本的な知識を求められるようになって来ました。したがって、専門分野よりも就職のための勉強をする学生が目立ちます。

（５） 現在は、韓国で日本語教師・日韓の翻訳などを行っておりますが、いままで学んで来た語学力を活かし、更に幅広い活躍したいと思っております。

（６） 前記20の（６）を参照。

22. 宇野咲子氏（20 代、女性）

所　　属：映像配給会社

肩　　書：社員

留学先　：ソウル大学（韓国）

留学形態：語学留学及び学部への正規留学

留学期間：1999 年３月～2005 年 12 月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 13 日

（１） 高校の時、「これからの世の中は英語なんて出来て当然の世界になる」と母親に言われました。母は英語の教師をしていたので、このアドバイスには説得力がありました。それがきっかけで、高校を卒業したら日本や英米以外の大学へ進学しようと思うようになったのです。中国というのも考えたのですが、丁度母の友人に韓国人の方がいらっしゃったので、思い切って韓国へ留学することにしました。幼い頃からこの国には少し興味がありましたし。進学先として具体的に考えたのは、ソウル大、延世大、梨花女子大の３校です。この内、後の２校は日本人留学生が多いということがわかり、出来るだけ日本人の少ないところを希望していた私は、迷わずソウル大を選びました（ただ、今はソウル大学も日本人留学生が激増しており、当時の 10 倍位の数になっていると聞きます）。そして 18 歳で高校を卒業してすぐ、日本の大学を経ずに韓国へ渡りました。

（２） 最初の１年３か月はソウル大学語学堂というところで、韓国語だけを勉強しました。この部分はいわゆる語学留学ですね。ただ、この語学堂には卒業という概念があり、在学中はどこかの級に属し、それを上がって行くことによって規程のコースを全て修了しなければなりません。私は途中１級から３級へ飛び級したりして、かなり効率的に学んだ方です。語学堂を卒業してすぐ、私はソウル大学の社会科学学部外交学科へ進学しました。出願にあたっては韓国語の能力証明と共に、小学校からの成績証明書を全て提出しなければなりませんでした。しかも、日本語で書かれたものは韓国語の訳をつけなければなりませんでしたから、そのために公証人事務所などにも行ったりして、手間のかかる大変な手続きを踏みました。若かったからこそ出来たことかもしれません（笑）。外交学科というだけあって国際色は豊かで、ハンガリー、パラグアイ、スペインなどといった国からも（在

外韓国人）留学生が来ていました。但し、韓国人学生と私たち留学生とは余り交流があったとは言えないですね（後述）。

（３） 良かったことは、地方へ旅行したりした時に、地元の方々に歓待していただいたことですね。日本人は嫌われているのかと思いきや、「あなたのような若い方がよくぞ来てくれた」と仰って下さる方が多くて驚きました。それから、日本から１年程度の交換留学というような形で東大や早稲田といった所から留学生が毎年いらっしゃるのですが、彼らとはすぐに友人になれ、色々と協力し合えたことは良い思い出です。悪かったことは、（２）で述べたように韓国人学生との交流という面でちょっとした壁があったことです。私は学部入学前に語学堂に１年３か月通ったせいで、ソウル大の同級生たちよりはほんの僅かだけ年長でした。しかし韓国の文化では、これが決して僅かでない違いなのです。年上というのは絶対的な存在ですから。１人だけ同い年の同級生がいた[123]ので、彼女とはとても仲良しでした。あとは、歴史的な観点からの日本人への複雑な感情でしょうか。バスの中で日本語で喋っていたら、年配の韓国人が急に近寄って来て「日本語を話すな」と怒鳴られたこともあります。もちろん、そうではない冷静な人たちも多いということは強調しておきたいと思いますが。

（４） 私は日本の大学を経験していないため、確実なことは言えないのですが、韓国の学生パワーは凄いものがありますね。ソウル大学はもともと国内でも学生運動の牙城と呼ばれた所で、かつては学生デモが出来ないよう政府によってキャンパスの郊外移転まで強制実施された大学です。移転した後もソウル大学は学生運動が盛んで、私の在学中に韓国人女学生が米軍の戦車に轢かれて死亡するという事件があったのですが、その時も物凄い数のビラが学内に貼られていました。

（５） 今の仕事はテレビの韓国ドラマを輸入したりすることなので、留学経験は言葉を含めて非常に役立っています。特にこの留学は、靖国神社参拝や竹島の領有を巡る論争など、日韓の間に横たわる複雑な問題を考える契機を与えてくれました。そのようなことを経験したおかげで、両国の友好や相互理解のため何をすれば良いかということを考えるようになり、結果として今の仕事に就いたわけです。そういう、言わば大きな方向性を与えてくれたという意味でも、私にとって韓国留学は大きな意義がありました。

[123] 他大学へ数年通ったことによる。

（6） 韓国へ留学して、韓国人とはもちろん友だちになったり話をしたりしましたが、その他にも留学生として来ていたドイツ人やフランス人など様々な国籍の人たちと交流することも多かったです。韓国というアジアのひとつの国へ留学して、こんなにも国際的な経験が出来るとは留学前には思っていませんでした。これから留学を考えている若い人には、このような点も是非知っていただきたいです。

23．鈴木崇弘氏（50 代、男性）

所　　属：自由民主党シンクタンク準備室

肩　　書：室長

留学先　：マラヤ大学（マレーシア）

留学形態：大学院課程における聴講生

留学期間：1982 年 3 月～1983 年 1 月

インタビュー実施年月日：2006 年２月 27 日

（１） 第一に、とにかく途上国へ行ってみたかったんです。あの当時のマレーシアは途上国の色がまだ濃かったですから。加えて、マレーシアはアジアでありながらアジアだけではないものを持っているような気がします。イスラムの国ですからね。そういう意味で、例えば中東などとの架け橋的な存在のように思えました。

（２） 留学期間は約１年だったのですが、実はその前がそれ以上に長かったんですよ。１年半くらいビザが下りなかったですから。マレーシア大使館の人にも「お気の毒ですね」なんて言われて（笑）。当時は大学（東大法学部）を卒業したばかりでまだ若かったので待てましたけれど、今ならどうですかね（笑）。何が理由かはわからないのですけれど、やはりまず日本人留学生が当時はまだ珍しかったということなのでしょうね。それから、今はどうかわかりませんが、当時のマレーシアは大英帝国時代の色がまだ濃く、イギリス本国やオーストラリア、ニュージーランドなど、イギリスのグループ国にある大学しか大学と認めないという部分があったような気がします。つまり、日本の大学を卒業していても、マレーシアからしてみれば（その質が）よく判断できなかったのでしょう。でも留学してからは自由を謳歌しましたよ。政治・経済を学びながら、現地事情を知るためにマレーシア文学なんて科目を取ったりもして、知的な意味でも自由を味わいました。下宿先の人にも、近くの食堂のおばさんにも親切にして貰いました。

（３） 良かったことは、自由さでしょうね。私は留学時代を「よく遊んだ」という風にいつも表現します。それは、色んな国・職業・年代の人に会えたし、畑違いの科目も取れたからです。逆に、悪かったことは余り思いつかないですね。実は、私は上記（２）に述べたような理由で大学院の正規留学生としては扱われず、いわゆる non-graduate でした。ですから、１年学んでも同期の友人たちのようには

正式な学位が貰えなかったのです。この点について「残念だったね」とよく人に言われるのですが、確かに学位がもらえるのならもっと真剣に勉強したかも、とは思います。ですが反面、non-graduate 扱いだったおかげでより自由に学べたわけで、これには一長一短があります。ですので、自分としては単純に悪かった点としては捉えていないのです。

（4） キャンパスが日本の大学に比べれば広大で、勉強する雰囲気には恵まれていました。人と触れ合う上でも、日本ともアメリカとも違う、独特の楽しさがありました。何よりマレーシアの文化には、単に狭い意味での東洋的なだけではないバラエティがあります。但し、時に自分の発言が「日本の方が上だと思っている」「優越感を持っている」などと現地の人に批判されることがありました。これはアメリカではなかったことです（後述）。もとよりこちらにはそんな気はまるでなく、自分としてはちょっとショックでした。当時のマレーシアはまだ貧しく、日本（人）に対する意識の表れなのかなと思ったりもしました。

（5） 昔からずっと、私の仕事は世界の状況も踏まえて政策を考えることです。その際、途上国で実際に暮らした経験があるというのは強いですよ。現地の文化やものの考え方が身体に染み付いていますので、意識するしないはともかく、いつもそれを前提にものを考えていますから。あと、私はアメリカにも留学（ミシガンとハワイの大学）した経験がありますので、日・米・マレーシアという異なる３つの（国や文化の）視点を持っているわけです。これは、ものごとを立体的に見る上でとても役立っています。

（6） 生まれた国以外にできれば２つくらい、違う国に滞在する経験をしてみるのがいいと思います。もっとたくさんの国を旅行している人も多いでしょうが、せいぜい２～３週間の旅行と１年以上腰を落ち着けて現地に住むこととはかなり違います。暮らさなければ得られない情報、わからない文化というのはあるものです。これが出来るのは比較的時間のある若いうちしかない。頑張ってほしいです。

24. 工藤年博氏（40 代、男性）

所　　属：日本貿易振興会・アジア経済研究所

肩　　書：研究グループ長（主任研究員）

留学先　：ヤンゴン経済大学（ミャンマー）

留学形態：客員研究員として

留学期間：2000 年４月～2002 年３月

インタビュー実施年月日：2007 年２月 13 日メールにて

（１） 勤務先であるアジア経済研究所（以下アジ研）の海外研究員派遣制度を利用したため、研究所で担当していたミャンマーの大学・研究機関・役所などに赴任することが義務付けられていました。その中で、ヤンゴン経済大学を選んだのは、１）自分の専攻に合致すること、２）（アジ研における業務上）大学教授陣に既に知り合いが多かったこと、３）かつては開発経済学の碩学 H.ミントを排出するなど有名大学であったこと、などが理由です。

（２） 正直、軍政下の大学及び外国人研究者に対するかなり厳しい統制のもと、余り自由な研究活動や教授陣・学生との交流は図れませんでした。留学している間、合計３冊の研究報告書を先生方や学生さんと一緒にまとめましたが、いずれも「闇出版」的な扱いとなりました。加えて、教授陣は教務や大学行政に忙しく、また資金不足から、研究活動を殆ど行っていません。このため、あまり有意義な研究交流が出来たとは言えないでしょう。

（３） 良かったことは、人的なネットワークが出来たこと。悪かったことは、学術的な研究交流が出来なかったことです。しかし、これは現在のミャンマーのいずれの大学に行っても同様だと思います。

（４） 私はイギリスの大学院での留学経験があるのですが、ここと比べると教育内容・研究内容共に比べものにならないです。これは、ミャンマーの大学を取り巻く政策環境、財政環境によるところが大きいと思います。教授陣も郊外に移されてしまったキャンパスでの授業に忙しく、調査・研究に割く時間がないのが現状です。ヤンゴン経済大学の学生は優秀と言われていますが、教科書を学ぶのが中心で、ゼミや課外活動など、先生や学生同士が交流する機会が殆どなく、知的刺激に溢れているという環境ではありません。日本の大

学も同じような状況かも知れませんが、ミャンマーの大学生はエリートであり、今後、国の発展を担って行くべき人たちです。現在の大学教育状況の悪化は深刻です。

（5） ヤンゴン経済大学に籍を置き、ミャンマーに滞在出来たことは、その後の調査・研究の土台となっています。正直、ヤンゴン経済大学で学問的に何かを学んだことは余りありませんが、籍を置かせて貰い、多くの人と話をし、交流したことは、私の仕事上及び私生活上の財産です。

（6） 現状では、ミャンマーの地域研究以外の学問をするためにヤンゴンの大学へ留学することは意味がないと思います。しかし、どんな分野であれ、ミャンマー研究を志すならば、ヤンゴンの大学に籍を置く意味はあると考えます。

25. 井手健介氏（20 代、男性）

所　　属：石川島播磨重工業株式会社

肩　　書：社員

留学先　：フィリピン大学（フィリピン）

留学形態：社会科学・哲学学部への交換留学

留学期間：2003 年４月～2004 年３月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 23 日

（１） 日本の大学（中央大学法学部政治学科）に入学した時既に、留学について漠然と考えていました。ゼミで国連大学グローバルセミナーに参加するなど、世界のことに興味がありましたから。どうせなら先輩が誰も行っていない国、自分自身も行ったことがない国にしようと思い、フィリピンを選んだのです。その上で、中央大学とフィリピン大学との間に交換協定があることを知り、大学３年の時に応募しました。

（２） フィリピン大学で私が在籍したのは、社会科学・哲学学部（Department of Social Science and Philosophy）です。この学部は同大法学部と共に、将来のフィリピンを担うエリートたちの進学先として有名で、実際私が見たところでも非常に優秀な学生が多かったです。私は１年で 30 単位弱を取得し、そのうち幾つかを中央大学での単位に振り替えました。

（３） 良かったことは、現地のエリート層と知り合え、なおかつ一緒に勉強出来たことです。彼らの優秀さは私がフィリピンへ来る前に予想していた以上でした。もっと良かったことは、同じく日本から留学していた今の妻と知り合えたことでしょうね（笑）。悪かったことは特に思いつかないです。入学時などに見られる大学事務の非効率性は、私も問題だと思います。けれどもこのような点は、どこの途上国でも見られることでしょうし、仕方のないことだと思いますから。

（４） フィリピン大学って、確か 15 歳からなんですよね。だから同級生は 17-18 歳で大学３、４年生というのが多かったです。一部で飛び級制度もありましたから、17 歳で大学院生という優秀な人もいました。既にこの年頃で将来を見据えてるという点で、非常に人として成熟しており、日本の大学生と比べ、学習意欲も高かったと思います。これは私にとっては非常に新鮮でした。

（５） まず就職活動で役立ちました。どこの会社の面接でも、やはりフィリピンへの留学経験というのが珍しいらしく、よく話を聞いて貰えました。今の会社に決めたのは、留学経験を最も評価してくれたからです。逆にフィリピンに留学していなければ、東南アジアをメインで担当させてもらえたかどうか・・。収益の４割が輸入で、その半分以上がアジアの国々という今の会社は、アジアで商売の出来る人材を欲しているようです。私は入社２年目でまだその途上ですが、将来はアジアを舞台に仕事がしたいです。

（６） 私はもともとジャーナリストになりたかったので、留学したら色んなことを見てやろう、聞いてやろうという主義で挑みました。これからの若い人にも、どんどん外へ出て、自分の目で見たり耳で聞いたりする体験を重ねて欲しいですね。独自の世界観はそんな風にしてしか出来ないものですし。それに、そんなことが出来るのは若いうちだけですから。

26. 市川幹人氏（40 代、男性）

所　　属：株式会社 J.D. Power Asia Pacific

肩　　書：サービス・アンド・テクノロジー産業グループ部長

留学先　：シンガポール国立大学（シンガポール）

留学形態：経営学部修士課程への正規留学

留学期間：1996 年７月～1998 年５月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 21 日

（１） アジア経済を専門として大手シンクタンクに勤務していた頃、タイなどアジアの国々で現地企業の方々とよく議論をしました。こちらもプロなので、議論の内容はそれなりのものでした。しかし、文化や習慣など何かもっと深いところで「果たして自分は本当に現地のことがわかっているのか」と自問することがありました。このような体験から、いつかはアジアのどこかで真剣に学んでみたいと考えるようになったのです。会社にはもともと社員の留学制度があったので応募したところ、幸いにも合格することが出来ました。社内の多くの志願者が欧米の一流大学を目指していた中で、アジアの大学へ行くという私のアイデアが珍しがられたようです。その後色々と紆余曲折はあったのですが（後述）、最終的にチュラロンコン大（タイ）とシンガポール国立大に候補を絞り込みました。ビジネススクールで経営学修士号（MBA）を取りに行くということだけは既に決めていたので、両大のビジネススクールを比較したところ、シンガポール国立大の方がより国際色豊かな学生構成になっていること、教育・生活の環境が整っていることが判り、最終的にそちらに決めました。もちろん、英語が通じるというのも決定要因のひとつです。

（２） シンガポールは小さくて狭い国なので、これといった娯楽もありません。そのため、私の留学生活は基本的には大学と自宅との往復でした。最初に困ったのは自宅を決める時です。シンガポールは国民のほぼ８割が住宅開発公社が建築したアパートに住んでおり、いわゆる賃貸用の物件は資金に余裕がある外国人向きのものしかありません。それらの家賃は当時月平均40～50万円程度とべら棒に高く、私が探した中では最低でも30万円前後が相場でした。派遣元である会社の理解もなく、当時は途方に暮れたものです。幸い外国人が誰も住まないようなローカル

色の濃い地域に格安物件が見つかり、ことなきを得ました。エアコンをつけて貰うために会社と交渉したことなど、今でも苦々しい思い出です。大学の話ですが、ビジネススクールには私の他にNTTと野村證券から派遣されていた２人の日本人がいました。欧米の大学院などでは日本人はとかく「群れる」ということを聞いていましたが、我々３人は暗黙のうちにそんなことがないよう意識して行動していました。そのため、同じ授業を選択したとしても、教室では並んで座ることは殆どありませんでし、グループワークで一緒になることも極めて稀でした。

（３） この大学に留学して良かったことは、無理やりにでも授業の内容に積極的に参加せざるを得ない環境の中で学習出来たことです。シンガポール国立大では基本的にハーバード大学ビジネススクールなどで作られたケースを使っており、その殆どが欧米か日本の企業を題材にしています。日本企業が話題になった時には、頻繁に自分が先生に当てられ、意見を求められました。日本人がどのようなコメントをするのかと、他の学生からも毎回射るような視線を感じたものです。そのため、「これでは下手なことは言えないな」と思い、必死に勉強しました。欧米の大学院なら、たとえ日本が話題になった場合でも、毎回日本人留学生が意見を求められるということはないと思いますし、仮に指名されたとしても日本人留学生の数が多いですから、私ばかりということはなかったと思います。あれほど自分を追い込み、その結果として頻繁に発言する機会があったのは、日本人留学生が珍しいシンガポール国立大に留学したからこそだと思います。また、中国・香港・マレーシア・インドなど他のアジア諸国からの留学生と交流出来たことも利点でした。反対に悪かったことは、上記のケースメソッドに関することなのですが、シンガポールまで来てわざわざ日本企業の分析を聞かされるというのが苦痛でした。欧米企業のケースの場合でも、ハーバードではもう使わないような古いケースも一部にあり、少なからず失望しました。シンガポール或いは東南アジアでのビジネスに焦点を当てた独自のケースを開発すべきだと、自ら学長に直談判までしましたが、学長曰く、シンガポールではケースの執筆が学者の業績として評価されないと一蹴されました。

（４） 研究や教育の質（オリジナリティ）という点で、シンガポール国立大は欧米や日本の大学に比べて残念ながら見劣りする気がします。上の（３）で述べたように、自ら新しい教材を開発するような熱意もないので、この点は大きな、そして高等

教育機関としては根本的な問題だと思います。反面、学生は優秀だと思います。授業中のとんちんかんな質問も殆ど皆無ですし、第一、皆よく勉強します。特に違いを感じたのは、中国からの留学生についてでした。歴史的にもシンガポールは中国との関係が深く、この大学にも中国人留学生がたくさんいました。授業ではいつも最前列に陣取り、必ず質問をするなど、彼らの勉学に対する情熱は半端ではありませんでした。ノート作りも完璧で、授業で学んだあらゆる内容が網羅されています。毎日朝早くから夜遅くまで図書館で勉強している姿を見て感心しました。そのように、中国人留学生が新しい知識を吸収していく能力や姿勢には脅威すら感じたのですが、逆に知らないことも多いように思いました。例えばビジネスの常識的な部分とか、一般的な知識の面です。ある時、音楽産業を扱ったケースについて皆で議論していたところ、ビートルズを知らないという中国人留学生がいて非常に驚いたことがあります。

（5） シンガポール国立大で学んだスキルやテクニックの中には、今でも役に立っているものがあります。卑近な例を挙げると、限られた時間で資料を仕上げプレゼンテーションしていく、といったスキルなどがそうです。けれども、それ以外の大半は残念ながら実際の業務では直接使えないというのが実態です。帰国後の担当業務が必ずしもビジネススクールで学ぶような内容と関連が薄かったという点も大きいと思います。ですが、決してそれだけではないと思います。（3）の冒頭で述べたように、研究や教育の質という点で欧米の大学に比べ見劣りがする、ということも一因になっているような気がします。実は私は、シンガポール国立大への出願前に、ペンシルバニア大、ミシガン大などのアメリカのビジネススクールにも出願し、合格していました。会社は「欧米行きの候補者は幾らでもいる。お前はアジアへ行け」の一点張りでしたが。ですので、あの時自分の意志を通すために、もし会社を辞めてアメリカの大学に進学していれば、現状は違ったものになったのではないかと想像することがあります。加えて、これらアメリカのビジネススクールや、日本の慶應ビジネススクールの場合には、同窓会組織も各々機能的で、実際にビジネスの人脈形成という点で大きな役割を果たしているように見えます。シンガポール国立大の場合にはそのような旨みは皆無ですから、この点でも損をしたと感じることがあり、これからも後悔し続けると思います。ただ、今の会社に転職して、アジアを視野に入れたビジネスの開発といったテーマ

があり、今後何かの機会にかつての留学経験が役立つことを期待しています。

（6） 世間はアジアの時代と囃し立てますが、こと留学に関する限りまだまだそんな時代は遠いと思います。アジアに興味を持つことは良いことですし、そこに留学をするのも悪くありませんが、若いのだからよく考えて行動しなさい、というのが私のアドバイスです。アジアの専門家になるというのなら話は別ですが、「何故アジアでなければならないのか」を自問自答してみることが必要でしょう。一言で言えば、応用範囲の狭い経験であるため、アジアという地理的な枠を取った時、その留学経験で勝負出来る場面は極めて限定されてしまいます。アジアを専門にしたキャリアを積んで行きたいという強い意志を持った人でなければ、安易にアジア留学を勧める気になれません。それよりはむしろ、誰もが知る欧米の一流大学に留学して、そこからアジアの大学へ短期交換留学するという方法を勧めます。その方が同じ２年間を過ごすのであれば、色々な意味で将来役立つ経験になるだろうと考えます。

27. 吉田均氏（40 代、男性―前記 17 も参照のこと）

所　　属：山梨県立大学

肩　　書：国際政策学部助教授

留学先　：台湾師範大学（台湾）

留学形態：語学留学

留学期間：1984 年３月～1986 年４月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 25 日

（１） 東京経済大学を卒業してすぐに就職する気にもなれず、かといって大学院へ進んで本格的に勉強を続ける気にもなれませんでした。そんな時に頭に浮かんだのが留学です。で、どこへ行こうかと考えた時に、丁度知り合いに台湾人留学生がおり、彼女から聞いた話から台湾という国に興味を持ちました。大学では第一語学として中国語を選択していましたし。また当時、台湾はいわゆる NIEs のひとつとしてその急激な経済成長が国際的にも注目され始めた時でしたので、その影響もあったでしょう。韓国なども考えたのですが、経済的な面でアルバイトをしなければ生活が出来ないこともあり、外国人のアルバイトにより寛容な台湾にしました。留学にあたって、私は特に何かの専門を極めるという意思はなかったので、取りあえず語学を勉強しようと思いました。前述の留学生から、中国語教育なら台湾師範大学が一番だと聞き、応募しました。

（２） 台湾師範大学では国語教学センターというところに所属し、来る日も来る日も中国語の勉強をしていました。日本にいる時に中国語は少し勉強していたのですが、センターでは初級クラスに配属されました。重要なテストで 85 点以上取ると奨学金が貰えることになっていたので、かなり一生懸命勉強しました。結果は見事に合格。喜び勇んで学生課へ行き、奨学金の申請をしようとすると、日本人は対象外とのこと。日本政府は台湾を国家として承認せず、台湾の留学生にも国費留学を認めていないため駄目だと言うのです。師範大学は国立ですからね。資金計画が狂って慌てた私は、急遽日本語学校で講師としてアルバイトすることになりました。台湾にいた２年半の間、奨学金は残念ながら貰えなかったものの、最後は上級クラスまで到達しました。

（３） 悪かったことは全く思いつきませんね。若かったので、あらゆるものが珍しく、

人との出会いが楽しかったです。留学生同士でマンションの部屋をシェアして暮らしていたのですが、そこには日本人の私以外にカナダ人やアメリカ人、ドイツ人などがおり、非常に国際的でした。彼らから得たものの大きさは計り知れません。毎週のようにパーティを開いたり、留学生だけで旅行に出かけたりと、楽しい思い出は尽きないですね。最も大きな成果は今の妻を見つけたことでしょうね（笑）。当時アルバイトをしていた日本語学校の同僚でした。

（4） 師範大学は台湾を代表する難関大学のひとつですから、日本で通った大学よりも図書館などあらゆる施設が立派でした。そして学生たちも実に優秀でしたね。大学生というのは、こんなに勉強するものなのかと思い、驚いた覚えがあります。今までの自分自身を反省したりもしましたね。彼らの勤勉さに触れることで、常に学習することを怠らない今の私の基礎が作られたのだと思います。あと、大学当局は日本と違ってとても学生を大切にしていました。当時の師範大学には 200 人から 300 人の留学生がいたのですが、窓口の担当者は全員の顔と名前はおろか、学生が今何に関心を持っているか、どういう悩みを抱えているかなど、色々なことを把握していました。私自身もいつも名前で呼ばれていました。

（5） 私が今研究者として大事にしていることのひとつに、現場主義ということがあります。二次情報に可能な限り頼らず、とにかく自ら現場へ赴き、腰を落ち着けて情報を得る。出来れば一定期間住んでみる。そういった姿勢を植え付けてくれたのが、台湾への留学経験だったと思います。また、世界への目を開かせてくれたのも台湾留学でした。自分がこの先、国際関係を勉強して行こうと考えるようになったのも、台湾へ留学したからこそだと思います。そういう意味では、台湾への留学が有形・無形で仕事に役立っていると言えますね。

（6） 前記 17 の（6）を参照。

28. 除村美幸季（30 代、女性）

所　　属：株式会社アルク

肩　　書：日本語・マルチリンガル教材編集部　副編集長

留学先　：国立政治大学（台湾）

留学形態：学部への正規留学

留学期間：1995 年９月～1999 年７月

インタビュー実施年月日：2006 年６月８日

（１） 台湾留学までには長い話があります。というのも、実は台湾留学の前に一度中国へ留学しているのです。中国好きな叔父の影響で、高校時代から中国には漠然とした興味がありました。調べてみると、拓殖大学には分校制度があり、留年せず留学出来ることがわかりました。私は拓殖大学の外国語学部中国語学科へ進み、３年生の時に９か月間北京へ留学したのです。大学を卒業して２年間は会社員をしていましたが、日本語教師になりたいと思い、その後半年インターカルト日本語学校の日本語教師養成講座で勉強しました。そして、YMCA が日本人の教師を台湾へ派遣するというプログラムに応募したのです。結果は合格。縁があって、台南で日本語教師を１年やりました。台湾の人たちを教えているうちに、今度は私が学びたくなって来ました。周囲の人に相談したところ、中国語の先生に国立政治大学を紹介されたのです。

（２） 国立政治大学ではジャーナリズム学科に所属しました。ジャーナリズムという専攻は、その国の政治や経済、心理学まで、様々なことを学ばなければなりません。ある分野を深く掘り下げる、というよりは、広く色々なことを吸収したいと考えていた、当時の私にぴったりの専攻でした。但し大学院ではありません。私は日本で一度学部を出ていましたが、ジャーナリズム専攻ではありませんでしたので、この分野の基礎を身につけるため台湾でももう一度学部へ進むことにしたのです。勉強は大変でした。宿題が多かったですからね。当たり前ですが、グループワークもテストもレポートも、全て中国語でこなさなければいけません。ジャーナリズム学科ではパソコンが必修でしたので私もやりましたが、その扱いも中国語で覚えました。忘れ難い思い出もあります。政治大学は「大学報」[124]という台湾で

[124] 台湾各地の大学で起こったニュースをまとめた新聞。

も有名な新聞を発行しているのですが、ジャーナリズム学科の学生は3年時全員がその発行に何らかの形で関わります。私はそのスポーツ面を担当し、他大学の学生にインタビューすることになりました。が、逆に私の方が「どうして日本から？」などと質問されて目を白黒。楽しかったですね。アルバイト探しは苦労しませんでした。日本語教師の経験が生き、口が一杯あったからです。

（3） 良かったことは、私よりもずっと年下のクラスメイトに溶け込めたことでしょうか。マレーシア華僑のような留学生もクラスにはいたのですが、中国語を母国語としない国からの留学生は私一人。当初はどうなることかと思いましたが、台湾の人々は優しく、また価値観も日本人と似通っていたので、クラスの人が私を日本人だと意識して特別扱いすることはなかったと思います。大学そのものへの不満もないですね。事務もしっかりしてましたし。いちばん大変だったのは、英書購読の授業などで苦手な英語を勉強しなくてはならなかったことでしょうか。私の場合、英語が嫌で中国語を勉強したという面もあるので（笑）、英語では苦労しました。それと関連し、経済学などのいわゆる欧米からの輸入学問を中国語で習うというのは大変でしたね。私はまず日本語の本を探して読んで、概略を理解するという方法を取っていました。

（4） 台湾の大学は、日本の高校までと環境が似ています。クラスがとても重要なのです。クラスには担任もおり、体育も授業もイベントも何をやるにもクラス一緒です。そのため、日本ではクラブやサークルでまとまりますが、台湾では学部単位で結構まとまっていました。そして、同じ学部の1年生から4年生を縦割りにして、「家族」という単位を作り、食事会などを催して親睦を深める制度がありました。また、1年生の時、入寮する学生の部屋割りが出身地別になっていたり、学生たちが早く大学に馴染めるような配慮もありました。いずれにしろ、こういった学部とか出身地などという単位の先輩後輩の間で、先生の評判や試験の乗り切り方などの情報が交換されていました。

（5） 現在の勤務先は出版社、つまりマスコミですから、留学で学んだ専門分野はそのまま役に立っていますね。中国語も思ったより使う機会が多く、これも学んだことがそのまま役に立っています。

（6） 中国語の学習というと大陸へ留学するという人が多いのでしょうが、台湾は日本と価値観が共通するところが多く、日本に興味を持っている人も多いです。その

ため友達も出来やすいかもしれません。特に私の場合は、台湾の大学、それも学部に入学し、台湾人の同級生と一緒に苦労や喜びを共有したからこそ、国は違っても仲間としての一体感が味わえたのだと思います。しかし、中国語が上達するかしないかはやはり本人の努力次第だと思います。

29. 古川　淳氏（30代、男性）

所　　属：Nemic-Lambda(M)Sdn.Bhd.社

肩　　書：アシスタント・セールスマネージャー

留学先　：東呉大学（台湾）

留学形態：語学留学

留学期間：1995年８月～1996年４月

インタビュー実施年月日：2006年８月23日メールにて

（１）所属していた日本の大学（拓殖大学）の交換留学制度を利用しました。当時はまだ今ほど中国語を学ぶ学生は多くなかったのですが、中国の歴史に関心があったことや、台湾出身の留学生の友人から強く勧められたこともありましたし。就職を考えた時、私の卒業期は不景気で就職難が予想されていましたので、何かひとつ、大学時代にこれだけはやったというものを得たい、できれば社会に出てから役立つものがよいと考えていました。留学生との交流を通じて、外国人のものの考え方や文化にも強い関心を持ち、中国語圏への留学を希望しました。中国語圏は、北京と台北がありましたが、現地の学生と相部屋で生活出来る学生寮だったため、台湾を選択しました。

（２）上述のとおり、学生寮に入って生活しました。４人１部屋で、日本人は１人、他の３人は台湾人です。台湾では、日本人に対する感情が総じてよいということもありますが、寮のルームメイトにもよくして貰いました。授業は語学関係のみならず、台湾の歴史や政治、文学などにも及び幅広く台湾のことを理解出来るよう授業が組まれていました。交換留学には10人が選抜されて参加することが出来るのですが、殆どは中国語学科の３年生の学生で、多少の中国語を既に話すことが出来る人たちでした。政治学科だった私は、自分の名前もろくに話せませんでした。したがって、授業では当初何を言っているのかさっぱり分からず、まるでついていくことができませんでした。そんな中、勉強から、生活のことまでいろいろ助けてくれたのが日本語学科の台湾人の友人でした。彼らは日本人や日本語に対する関心が強いこともあり、多くの人とすぐに仲良くなれました。中国語は特に日本人にとっては発音が非常に難しいですが、彼らに日々特訓してもらったおかげで、３か月を過ぎた頃には、ある程度会話が成り立つようになり、半年を過

ぎた頃には講義の内容もある程度理解でき、また発言も出来るようになりました。最終的には日本人学生10人が参加するスピーチコンテストで３位になるまでに上達しました。現地の学生との日々の交流を経て、語学の上達だけでなく、現在まで続く友情をも持てたことが何よりの成果でした。

（３） 留学から10年以上経過した今も、交友を続けている友人がいます。こうした友人が出来たことが一番良かったことだと思います。また戦時中に、日本の教育を受けた友人の祖父母の方々から、生きた台湾の歴史をうかがえたこと（殆どの方は日本語で会話します）は、貴重な経験でした。悪かったことは思い出せません。強いていえば、夜、部屋の鍵をかけ忘れて、寝ている間に腕時計を盗まれたことくらいです。これは当時悔しい思いをしましたが、鍵をかけ忘れた自分の責任です。その後、余りある利益を取り返したと感じています。

（４） 自分の将来に対して、はっきりとした目標を持っている学生が多かったのが印象的でした。日本では明確な目標を持てず、何をしたら良いのか分からないと感じている学生が多かったのに対し、当時の台湾の学生は、大学で学んだことを生かして仕事をしたいと考えている人が多いと感じました。卒業後にどんな仕事に就きたいかという問いに対し、殆どの人が明確な回答をしました。

（５） 社会に出てから殆ど海外駐在を続けておりますので、会社のスタッフや取引先が外国人という中で仕事をしています。言語面で意思の疎通が容易であることはもちろんですが、日本との習慣の違いや、ものの考え方の違いを理解していることがむしろ有益だと考えています。特に、日本から派遣されている駐在員の多くは、そうした部分の理解が乏しいため、現地スタッフとの間に溝が出来てしまいがちです。大抵の日本人は、何かしらの責任者として赴任することが多いため、私自身がそうした日本人責任者と現地スタッフとの間に入って、双方の考えの相違を説明したり、接し方などについてのアドバイスをしたりしています。

（６） 私は個人的には留学を強く勧めることはしていません。留学の本質が言語の習得にあると考えると、せっかくのチャンスも得るものが限られたものになるからです。言語の習得だけなら、日本国内にいてもある程度は可能です。今でこそ、中国語を習得するために留学する日本人は増えてきましたが、そうした人たちの中には、現地の学生と積極的な交流もせず、また理解をしようという積極性もなく、授業の時間以外は殆ど日本語を話して暮らす人も散見されます。学びに来たもの

は中国語であって、それが習得できればよい、ということなのかもしれません。社会に出て、海外駐在を長くやっていますが、中国語が出来るだけでは、仕事の上ではあまり役に立たないのです。企業の立場から見ても、日本語の出来る現地人を採用したほうがコストも安く上がる、ということになってしまいます。大切なことは、日本人として、現地の習慣や、現地人の考え方などを理解していると言うことだと思うのです。言語はあくまでそのための手段であり、ツールです。社会に出ると問われるのは、言語を使って何が出来るかです。外国語で、外国企業のお客さんと商談が出来る、或いは特別な技術を外国語で社員に教育出来るなどです。言語の習得が最終目的でないことだけはどうかご理解下さい。そして言語以外の何かについて理解を深められたら、素晴らしいことだと思います。

30．増田ちなつ氏（20 代、女性）

所　　属：三井物産タイ支店就職内定

肩　　書：なし

留学先　：チュラロンコン大学（タイ）

留学形態：人文学修士課程への正規留学

留学期間：2003 年６月～2005 年６月

インタビュー実施年月日：2006 年４月７日

（１） 私の所属していた学習院大学が、毎年チュラロンコン大学から学生を受け入れているのです。１週間程度の日本研修旅行で、学習院大には２～３日滞在します。その間に日本の学生とタイの学生が交流をするのです。それが縁でタイ、わけてもチュラロンコン大学への留学に興味を持ちました。けれども、じゃあどうしてタイを選んだのかと突き詰めて聞かれると、完璧にはうまく答えられない部分もあります。自分でも常に問い続けている部分ですし、きっとこれからもその答えを見つけようと努力するでしょう。

（２） まず留学の準備ですが、情報は殆ど大学のウエブサイトから得ました。タイ語は全くできなかったので、最初から英語で勉強出来るところということで修士課程の文学部タイ研究科を選びました。他に東南アジア学科というのもあり、幾つかの授業はどちらの学科の学生も取ることが可能でした。これはチュラロンコン大学全般に言えることですが、この大学がアメリカ式の教育を志向していることは明らかです。そのため、先生にも欧米留学の経験者が多かったですし、学生にもアジアだけでなく欧米など海外からの留学生が多くいました。私はタイへ留学したわけですが、こういう人たちからタイ以外の文化やものの見方を学び、まさに国際的な雰囲気の中で留学生活を送ることが出来ました。

（３） 上記（２）で述べたように、良かったことは欧米留学の経験がある先生がたくさんいらしたことです。日本の大学では、先生との双方向のコミュニケーションが成立する授業は少数ですが、チュラロンコン大では逆にそういう授業の方が主流です。それに加え、タイ学科には私と同じような立場の外国人留学生が一杯いたのも大きな刺激になりました。しかも彼らはオックスフォード大やケンブリッジ大の卒業生だったりして、レベルも非常に高かった。彼らからは本当に多くのも

のを得、今でもとても感謝しています。一方、悪かったことは大学の留学生に対する対応でしょうか。まだ慣れていないという気がします。休講や教室の変更など、英語での案内がないために私を含め困っている留学生がたくさんいました。本来はOffice of International Affairsが所管している事項のはずなのですが、彼らは協定留学生の世話で手が一杯で、それ以外の私費留学生にまでは手が回らないようです。もっとも、情報の滞留がそういう軽微なものだけで済めばいいのですが、時にはそれが死活問題になることもあります。例えば、修士論文の書式が変更になった場合などです。実際私には全く連絡がなかったので、一度書いた論文をかなり時間をかけて修正しなくてはなりませんでした。こういうことを含め、留学生向けに英語で書かれた案内文またはマニュアルのようなものがあればよいのですが、大学はそんなものをいちいち用意してはくれません。また、せっかく用意したのにそのこと自体の案内がないために、末端の留学生まで行き渡らないといったことは頻繁にありました。

（4） 日本の大学と比べ、先生に女性が多いです。私のいた学習院大では常勤の教授というとほぼ全員が男性なのですが、チュラロンコン大では私のいた人文学研究科だけでなく、各学部に女性の先生がたくさんいらっしゃいます。この点がまず大きく違うと思いました。また、これは同じ学科のカナダ人留学生から聞いた話ですが、カナダの大学では（修士・博士）論文を書く学生のために、その方法論を前もって講義してくれるというのです。チュラロンコン大では全くそのようなことがなく、とても困りました。そのため、これについては先生に１対１で聞くか、友人に聞くかしか方法がありません。論文の章立てや構成、長さ、図表の挿入方法といった細かな決まりは誰もが気にすることなのですが、そのためのマニュアルもなく、途方に暮れました。

（5） 勉強してきたことをこれからどう生かすか、今一番悩んでいるところです。自分が就きたい仕事を最初に決めて、そのためにどういうことを学ぶのか決定するというのが一般的に望ましい順序なのでしょう。しかし、私は仕事以前にまず勉強したい事柄が先にありました。ですので、今まさに自分のキャリアについて真剣に考えている最中です。とは言っても既に決めていることは、何か非営利の仕事に就くこと、できればアジアや途上国を対象とすること、そして教育分野で働くことの３点です（特に教育については学習院で教職の資格も取得しました）。

（6） 私の場合には、語学を勉強するためのアジア留学ではなかったので、何故タイなのか、何故アジアなのかという自分の中での理由付けが必要でした。しかしその答えはまだ見つかっておらず、帰国した今になって自分の立ち位置を探しているような状況です。ですので、これから留学する方々はその辺りを真剣に考えた方が良いと思います。実際、企業の面接でも留学の理由をうまく説明することは必要でしょうし。あと技術的なことで言うと、論文の一般的な書式を事前に勉強しておくと後々役立つと思います。

31. 芦澤知子氏（20 代、女性）

所　　属：立教大学社会学部

肩　　書：学生（３年生）

留学先　：チュラロンコン大学（タイ）

留学形態：教育学部への交換留学

留学期間：2005 年６月～2006 年３月

インタビュー実施年月日：2006 年４月 26 日

（１） 高校１年生の時、NGO の OISCA が主催するタイ植林ツアーに参加し、タイという国に強い印象を受けました。それまでメディアなどを通じてこの国に抱いていたイメージと現実とがかなり違っていたので、この国のことをもっと知りたいと思うようになったのです。そしてそれ以来、都合６回もタイを訪れ、スラム街や観光地など様々な所を見て回りました。特に繁華街の華やかさとスラム街との対比は強烈でした。どうしてこんな格差が生じるのだろうと不思議に思い、とりあえず自分の中でこれには教育が関係しているのでは、というひとつの仮説を立てました。同時にタイと日本には歴史や文化で様々な共通点があることも知り、ますますこの国への興味が募りました。このような理由から、いつかタイへ留学し、この国の教育について勉強してみたいと思ったのです。大学生になり、所属する立教大学がチュラロンコン大学との１年間の交換留学協定を結んでいたので、試験を受けたら運良く合格しました。

（２） 日本にいた頃とは違って、タイの大学ではよく勉強しました。周りがそういう環境なのです。私は語学が好きなので、タイ語を特に熱心に勉強しました。タイ語は日本にいた頃からプライベートで習っていたのですが、留学した当初はタイ人の学生との意思疎通が思ったように行かず大変でした。でも最後には日本語とタイ語の通訳が出来るようになりました。現地の住まいは、大学から歩いて通える（実際にはバスで通っていました）距離にある学生寮でした。ここは私のような多くの留学生が住んでいて、国籍もラオス、インドネシア、ベトナムと様々でした。おかげで、タイ以外の文化や習慣についても学ぶことが出来ました。私はこのうちインドネシア人の留学生と仲良くなり、彼女に触発されてインドネシア語の勉強も始めたほどです。

（３） 印象深かったのは、学生がとにかくよく勉強するということです。日本の大多数の大学のように、学生がアルバイトなど自分の都合で授業をさぼるということはおよそ考えられません。たとえ授業で先生が出席をとらなくても、学生は皆自主的に授業に出ます。もちろん、タイの学生も日本の学生同様よく遊びます。東京と同じでバンコクも誘惑が多い街ですから。けれど、それでも学生は授業にだけは真面目に顔を出します。また、授業自体も魅力的なものが多いです。特に、先生と学生との対話の多さ、双方向性という点では、日本の大学はその足元にも及びません。仮に先生の話の途中であっても、学生は聞きたいことを聞きたい時に聞きたいだけ聞きます。つまり、授業中は先生と学生との関係はかなりフランクです。私はよく知らないのですが、この点は日本よりもアメリカなどの大学に似ているのかもしれません。一方で、大学における縦社会の強固さは相当なものです。上級生や先生には絶対服従です。例えば、新入生は入学直後から様々な面で先輩たちの指導を受けます。この点で有名なのは、同じバンコクにある伝統校タマサート大学とのサッカー定期戦です。毎年その季節になると、試合直前に全校挙げての応援練習があります。この時、下級生は上級生から徹底的にしごかれます。しかし同時に、上級生は実に良く下級生の面倒をみます。私はこれで上級生の名前を殆ど覚えました。日本の大学ではあり得ないことです。よく出来たことに、チュラロンコン大では１年生だけが違う制服の着用を義務付けられており、誰が新入生かは周囲がすぐわかるようになっているのです。いずれにしろ、同じ大学内なら学生同士の結びつきは日本と比較にならないほど強く、上級生が示す厳しさと優しさは同じコインの裏表なのです。悪い方で印象に残っているのは、チュラロンコン大生の持つ強烈なエリート意識でしょうか。これが良い方に出れば、授業への積極的な参加とか社会に対するボランティア精神や無私の心のようなものになるのでしょう。しかし悪い方に出ると、他大学の学生に対する排他性や優越意識になります。実際、このような人や言動を多く見かけました。

（４） 上記（３）で述べたように、学生の真面目さや先生の学生に対するフランクさ、授業の双方向性、学生同士の結びつきの強さ、という点でタイの大学は日本の大学よりもいいと思います。タイの友人を見ていて、大学というのは勉強するところなのだと改めて思いました。また、チュラロンコン大生が持つエリート意識も、日本の学生にはないものではないでしょうか。それが良いことか悪いことかは一

概には言えない気がしますけれど。

（5） タイへ留学したことで、日本以外の国でも働けるという自信が出来ました。異文化の中に放り込まれても何とかやって来られましたし。いつか実際に、タイをはじめとするアジアの国々で仕事が出来たらいいなあと思っています。

（6） タイへ留学したことでタイのことは当然よくわかるようになりましたが、同時に母国である日本についても深く考える習慣がつきました。留学前の私には愛国心のようなものは余りなかったのですが、タイに留学してみてタイ以外の国の人たちとも友達になり、私はやはり日本人なのだと意識させられることが多かったです。帰国して、今私は俗に言う逆カルチャーショックを味わっているのですが、こんな経験が出来るのも留学をしたからこそ。タイはアジアの中でも日本との共通点がとりわけ多い国ですが、それでも（短期の旅行ではなく）生活してみると微妙なところで違うことが見えてきます。絶対に良い経験になると思いますよ。

32. 春木政宏氏（30 代、男性―前記１も参照のこと）

所　　属：専門商社

肩　　書：社員

留学先　：チュラロンコン大学（タイ）

留学形態：人文学修士課程への正規留学

留学期間：2003 年 11 月～2006 年６月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 13 日

（１） タイに行ったのはふとしたことがきっかです。同志社大学を卒業してある会社に就職し、１年半が経った頃のことです。私は中国語が出来るということで、中国・青島への赴任が決まりかけていました。しかし、その頃の私には中国への思い入れはもうそれ程なかったのです（前記１参照）。そんな私ですから、青島での仕事は正直荷が重いと感じ、退社することにしたのです。タイに渡ったのはその直後です。タイは学生時代に一度訪れており、二週間程の滞在でしたが、とても良い印象を持っていました。タイに渡った当初はバンコクで語学学校に通いながら、簡単な翻訳などのアルバイトをして生計を立てていました。そのうち語学だけでは飽き足らなくなって、やはり何か専門を身につけようと思い、チュラロンコン大学への進学を決めました。

（２） 大学院はタイ学科（Thai Studies）です。私自身はお守りの研究をしました。タイはご存じのように敬虔な仏教徒の国で、神社の数も多い。そんな中で私がユニークだと思ったのは、お守りの存在です。有名なお坊さん自らが魂を込める儀式を行い、一般に売り出されます。実に様々なデザインがあり、大変な人気を博しています。お守りを専門に扱う雑誌が 48 種類もあるのです。これはもう、一部のマニアの話ではありません。このお守りには、サンスクリット語や古代クメール文字が書かれており、タイ人でさえ一般の人は読むことが出来ません。そのため、私は他大学の聴講生としてこのような古代語の研究までしました。

（３） 良かったことは、質の高い教授陣がたくさん大学にいたことです。サンスクリット語や古代クメール文字を勉強出来たのも、チュラロンコン大ならではだと思います。そしてプライベートな面で良かったことは、友人がたくさん出来たことです。友人はそのまた友人を引っ張ってきたりするので、チュラロンコン大学以外

の大学生とも仲良くなりました。中でもカセサート[125]大学の友人とは、母校同志社大学との相互交流計画を推進し、国際交流を専門とするサークル同士の交流が始まりました。これは留学の嬉しい副産物です。悪かったのは大学の事務ですね。私の卒業が半年遅れたのも、元はというと事務連絡の不徹底からです。最初から言ってくれれば良いのに、と何度思ったことか。このことについて西欧からの留学生は、私たちアジアからの留学生以上にはっきりと大学当局に苦情を申し立てていたような気がします。だけど変わらないんですよね。

（4） チュラロンコン大学の学生は概して真面目です。日本の大学生よりも余程勉強熱心です。タイの大学生全般を念頭に置いても、チュラロンコン大学の学生は一番真面目ですし、よく勉強すると思います。このような傾向は、例えば私が勉強の相談をした時などに顕著です。私の代わりに図書館で調べてくれたり、専門の先生を紹介してくれたりするのは、やはりチュラロンコン大の友人です。しかし、よく勉強するということには反面悪いこともあります。それは例えば、自分に得になることしかしない、という学生の存在です。それが証拠に、勉強時間がなくなるとか自分の勉強に役立たないという理由で、タイの大学はどこもサークル活動が低調のような印象を受けました。

（5） 今勤めている会社は、自動車の保安用品を扱う商社です。数年前タイに現地事務所を作りました。近い将来、私はそこに赴任する予定です。ですので、タイで勉強したことは語学、人間関係を含め必ず役に立つと思います。とりわけ、タイ人労働者と日本人労働者との関係を上手に構築していくことには自信があります。現地の生活にも全く困りませんし。

（6） 前記１の（６）を参照。

[125] タイ語で農業の意。

33．吉原祥子氏（30 代、女性）

所　　属：国際海事大学連合

肩　　書：コーディネーター

留学先　：シーナカリンウイロート大学（タイ）

留学形態：公的資金による人文学部、社会学部への留学

留学期間：1992 年４月～1993 年３月

インタビュー実施年月日：2006 年５月 17 日

（１） 私が高校生だった頃、タイやシンガポール、マレーシアなどアジアの新興工業国が世間の注目を浴びていました。そんな時に先輩から「大学でしか学べないという語学を」というアドバイスを受け、東京外国語大学のタイ語科に進学しました。大学へ入った頃から留学は意識していましたが、当初、留学とは先進国に行くことだと思っていました。ところが、一度タイへ行ってからは印象も変わり、どんな国や場所へ行っても学ぶことはあると思うようになりました。シーナカリンウイロート大学は東京外大と協定を結んでいたので、３年次が終わった段階で１年留学することにしました。

（２） シーナカリンウイロート大学で取得した単位は、東京外大でも認定されます。ですが、私はそのようにはせず、外語大は休学という形をとって留学しました。ですので、タイ留学中はユネスコなどから奨学金をいただいて、何とか生活していました。留学先では特にひとつの学部に所属することなく、人文学部または社会学部のどの授業に出ても良いことになっていました。但し、その他のことは全てタイ人学生と同じ待遇でした。例えばタイの大学には制服があり、私もこの制服を着ました。授業はもちろんタイ語、試験もタイ語で受け、１年間で 60 単位を取得しました。

（３） 私はその後、アメリカの大学院にも留学しました。ですので、日・米・タイという３つの異なった文化を知り、それぞれに違う視点を身に付けることが出来たということがとても良かったと思います。悪かった点は大学の学習・研究環境でしょうか。当時は図書館にも新しい本は余り多くなかったように記憶しています。市内の主だった本屋さんでも品揃えは多くありませんでした。それを考えると、やはり日本って凄いなと思いました。そんなことに気づいたのも留学したからこ

そですが。

（4） 日米の大学と比べて一番違うのは、図書館が貧弱なことですね。今もそうなのかどうかわかりませんが。あとは学ぶことの内容ですね。日本の大学もそうかもしれませんが、タイの大学で学ぶことはアメリカの大学で学ぶことに比べ普遍性が少ないと感じます。アメリカの大学の方が、世界のどこでも通用するような考え方や論理をより重視する傾向があると思います。

（5） タイ留学中の細かな知識や人脈といったことではなく、既に述べたように日・米・タイという３つの視点でものごとが見られること、これが役立っています。例えば、アメリカのある組織と仕事をしていて考えが煮詰まったような時に、ふと「タイ人ならどう考えるかな」と思うのです。このように考えられることはタイへ留学したことの財産であり、仕事をする上でそれはとても大きいと感じます。

（6） アメリカの大学院で書いた修士論文のテーマは、「東南アジアへ留学するということ」というものでした。私はこれを書くために、東南アジアへの留学経験を持つ様々な国籍の人９人にインタビューをしました。受け止め方にこそ差はありますが、東南アジアはどの人にとっても強烈な印象を残しています。その印象が余りにも強いために、帰国した後も留学先が忘れられず、その国の文化にのめり込んでしまう人が結構いるようです。こういう例を見ていると、アジアへ留学したことがかえってその人の人生の幅を狭めてしまうのではないか、と感じることがあります。例えば、タイで一生懸命勉強して、タイ人のものの考え方がわかったとしても、それは世界のどこでも通用するようなものではありません。既に述べましたが、その意味ではアメリカの大学で学ぶことの方が余程普遍性があります。アジアへ留学することの限界をも合わせて考えておく必要があると思います。

34. 大西好宣（筆者、40 代、男性）

所　　属：国際連合大学

肩　　書：プログラム・オフィサー

留学先　：チュラロンコン大学（タイ）

留学形態：高等教育学科博士課程への正規留学

留学期間：2001 年６月～2004 年 10 月

（１） 日本人は一方ではアジアが大事と言いながら、他方、留学先としては殆どが欧米を選びます。政府にしても、アジア重視を声高に唱えつつ、若手の官僚はその殆どが国費で欧米へ留学します。このように言わば二枚舌を使い分けているような状況に、心の中で小さな反発がありました。偉そうなことを言っている私自身も、実はそのことに気づいたのは米留学（修士課程）から帰って来てからでした。そこで、博士号は是非（日本以外の）アジアの大学で取ろうと考えたのです。選んだのはタイでした。チュラロンコン大学の知名度は日本ではそれほど高くないのですが、東南アジア各国での存在感は抜群です。それまで仕事で訪れたベトナムやカンボジア、ミャンマーやシンガポールなど、あちこちでこの大学のことを聞き、会議などでは先生とも個人的に話をさせていただいたりしていました。そして90年代後半、やっと実際にこの大学を訪れることが出来ました。一目惚れしました。アクセスの良さ、広大なキャンパス、充実したカリキュラム、研究の質の高さ、殆どの先生が英語を話せることなどなど。すぐにOffice of International Affairsを訪れ、出願方法について尋ねました。

（２） 博士課程は基本的に論文を仕上げればよいのです。講義中心のコースもあるのですが、経験豊富なミッドキャリアの人たち用に、もうひとつ別のコースが用意されています。そこでは論文指導が中心で、私はこのコースを選びました。と言うより、大学にとってはそれまで講義中心のコースが主で、私自身が初のモデルケースだったようです。そのため、私の場合は講義に出席する必要は基本的にありませんでしたが、幾つかの講義には好奇心から出席しました。私の場合は研究対象が大学ですから、タイの大学がどのようなものか興味があったのです。また、忘れられないのは博士号候補になるための試験、いわゆるコンプ(comprehensive examination)のことです。高等教育専修の場合には、統計学、学生指導論、高等

教育経営論、カリキュラム論などが必須科目で、２日から３日に及ぶ筆記試験が課される他、博士論文の予定内容についての口頭試問があります。どれか１科目でも70点以下の場合には不合格となり、もう一度だけ全体の再試験を受けることが許されます。それでも合格しなければ待っているのは退学、という厳しい試験です。実際、私の１期上の先輩たちが大量に不合格・再試験を告げられ、図書館に集まって皆一様に青い顔で今後の相談をしていたことを思い出します。私自身は同級生や上級生と一緒に勉強会をやり、無事一度で突破することが出来ました。何より、他の学生と協力しながら一体感を味わえたのがとても良い思い出になっています。

（３） 悪かったことは、Office of International Affairsの対応でしょうか。留学生にとって必要な情報が全然下りて来ませんでした。担当者もコロコロ代わり、学生証ひとつ作るのも大変な作業でした。同じ意味で、大学院（事務局）自体も決して親切ではなかったと思います。チュラロンコン大では博士論文の提出方法が実に複雑で、何か英語の案内文でもあればよいのですが、それもありません。私自身タイ語が出来ないという弱みもあり、余り強くは言えなかったのですが。反面、良かったことは山ほどあります。まず最も大切なことは、自由な発想と研究が認められ、公正で透明性のある指導と審査が受けられたこと。これは博士課程における本質的なことですから。例えば自由という点では、課程の２年目に１週間だけアメリカを訪れ、ハーバード大（院）の集中講義を受講しました。チュラロンコン大の先生（指導教官）はとても喜んでくれました。研究には直接役立たないが、何かの刺激にはなるだろう、それが大事だと。また、公正という点では、例えば博士論文の口頭試問で、公正を期すため他大学からも審査官を２名受け入れていました。とかく閉鎖的になりがちな大学（国立）という場所で、これは凄いことだと思いました。二番目に良かったことは、研究を進めて行く上で、実際の政策との関連を常に意識出来たこと。それはこの大学の教授陣が政府関連の要職についていることに関係しています。三番目に、日本とも欧米とも違う、タイ独自の文化を経験出来たこと。これは今も自分の血となり肉となっていると思います。

（４） 一般にタイの大学は、日本の大学よりもアメリカのそれに近いシステムを採用しています。例えば、博士課程生から博士号候補に、そして博士にという流れは典

型的なアメリカの制度を導入したものです。前述のコンプも、アメリカの大学ではごく一般的ですが、日本の大学では余り見かけません。また特にチュラロンコン大では、透明で公正という部分を重んじていると思います。そのため、日本の幾つかの大学のように、博士号を持たない先生が、博士論文の指導をするなどということは、少なくともこの大学では考えられません。国際的にどう見られるか、ということをいつも非常に気にしていると感じました。このように、大学当局としては欧米流の高等教育機関のあり方を志向している様子が窺えます。その反面、タイ人学生の外国人留学生に対する態度はむしろ日本の学生に似ています。アメリカの大学では良い意味でも悪い意味でも自国の学生と留学生は対等です。個人が自立しているお国柄だからでしょう。ところがタイでは、学生は留学生の世話を焼きたがります。実際、私自身はアメリカの大学にいる時よりも、チュラロンコン大での３年間の方が同級生、上級生に大事にされたという感覚があります。日本人の留学生が珍しいということももちろんあるのでしょうけれど。

（５） 私の仕事相手は留学生や大学職員ですから、私が学んだ高等教育学は直接役に立っています。私自身が留学生として味わった経験も、目には見えないところで役立っていると感じます。特にタイは途上国ですから、その文化を少しでも知る私としては、タイ人の学生が日本の大学に来て何に戸惑っているかということが幾らかは想像できます。

（６） 私のように課程の最初から最後までチュラロンコン大学で過ごす、というのも良いのですが、内情をよく知らない人には不安かもしれません。そこで、例えば日本或いは欧米の大学（院）に籍を置きながら、１年程度の交換留学先としてこの大学を選ぶのもおもしろいかなと思います。もっとたくさんの人に、アジア留学の楽しさや意義を知って欲しいです。

35. 秋葉亜子氏（30 代、女性）

所　　属：なし

肩　　書：通訳

留学先　：ハノイ総合大学（ベトナム）[126]

留学形態：語学留学＋学部の聴講生

留学期間：2001 年６月～2004 年 10 月

インタビュー実施年月日：2006 年６月 13 日

（１） ベトナム戦争たけなわの頃、東京都の教員だった両親が反戦運動をしていました。その関係で、子供の頃からベトナムという国を身近に感じていました。そして進学したのが東京外国語大学インドシナ語学科（当時）です。東京外大は当時ハノイ総合大学から定期的に客員教授をお招きしており、私はその関係で同大へ留学しました。修士課程の１年生を終えた頃です。

（２） 留学先のハノイ総合大学には、当時ベトナム語学科という留学生受け入れのための専門課程があり、日本からは私以外にも慶應や東大の学生、元ジャーナリストという社会人らが留学生として在籍していました。ただ、これらの人はおそらく全く或いは殆どベトナム語の学習歴もなくベトナムに来ていたと記憶します。ですから、彼らは留学期間の１年全てをベトナム語の学習に費やしたはずです。しかし、私は外語大での５年間のベトナム語学習歴がありましたので、留学期間の後半半分は教授から論文指導を受けたり、学部の授業に出席したりしても良いことになりました。ただこれとても、自動的にそうなったわけではありません。私自身が大学に対して強い希望を出し、私を受け入れてくれる先生を探すという努力をしたのです。現地の学生との触れ合いが余りなかった前半半年の語学学習時に比べ、後半半年の語学文学科の授業ではやっとベトナム人学生の友達も出来、大きな刺激になりました。

（３） 良かったことかどうかわかりませんが、今でも強烈な印象として残っているのは、バスの中で出会った詐欺師のことです。論文を書くために、友人たちと小数民族の村に行ったのですが、その時に乗ったバスの中で、トランプを使った賭けをしようと持ちかけて来た男がいたのです。バスの中の乗客から有り金を全て巻き上

[126] 現在のベトナム国家大学ハノイ校。

げ、男はバスを降りて行きました。それを見ていた私たちは唖然としましたが、なかなか出来ない経験をしました。悪かったことは、何でも届けが必要だったことです。学内のことはもちろんですが、観光のために市外へ出る際すら当局の許可が必要だったんです。つまり原則的に、留学生はハノイ以外へ出てはいけないのです。黙っていればわからないと思うでしょう。でも、結構色々なことがばれているんですよ、公安警察には。ある時、友人たちと取り決めたことを見ず知らずの公安担当者に指摘されたことがあります。私と友人以外には絶対に知りえない私的なことを、何故この会ったこともない男が知っているのだろうと、当時は愕然としたものです。考えてみると、私への小包なども開封されていることが多かったです。

（4） 授業自体は日本の大学とそれほど差はないと思います。ただ、こと学生の構成となると日本とはまるで違う点が幾つかあります。まず、学生の平均年齢はベトナムの方が高いでしょう。ベトナムには兵役がありますから、26 歳あたりで兵役が終わって大学に入学して来る学生が結構いましたので。それから、ハノイ総合大学は全国から受験生が集まるのですが、入学後にはその出身地から寄宿生と自宅通学生に分かれます。前者の場合には成績という点でも経済的な豊かさという点でもかなり幅広いのですが、後者の場合にはやはりほぼ一律に裕福な家庭の子女という色彩が濃かったように思います。

（5） 私の場合はベトナム語の通訳・翻訳を仕事にしているので、留学経験はもちろんとても役に立っています。現地の人や文化、日常生活に肌で触れることが出来ましたし、ベトナムという国を理解する上で非常に良い経験をしたと思います。

（6） 恋愛やギャンブルなど、留学先で勉強以外のことをより一生懸命にやる人たちがいます。若いので無理もないのですが、やはり留学の主目的は勉強です。自分の立ち位置をしっかり守り、真面目に勉強して下さい。

36. 上田義朗氏（50 代、男性）

所　　属：流通科学大学

肩　　書：教授

留学先　：ハノイ国民経済大学（ベトナム）

留学形態：本務校のサバティカル制度を利用し客員研究員として

留学期間：1998 年８月～1999 年３月

インタビュー実施年月日：2006 年９月 16 日

（１） 94 年に、勤務している大学のプロジェクトとしてベトナムで調査をしたのです。１か月程の調査だったのですが、現地の人と生活を共にしているうちにお互い仲良くなりましてね。その時に、ベトナム人が日本人と同じような感覚の人たちであることがわかりました。その後も幾つかのプロジェクトに関わるうち、いつしかベトナムに多くの知人・友人が出来ていたのです。98 年に、勤務していた大学のサバティカル制度（有給の研究休暇）が利用出来ることになり、それではベトナムの大学へ、となったわけです。当初はアメリカのエール大学にと考えていたのですけれど、幸か不幸か出願した時点で既に受け入れ予定人員が埋まっていました。しかし結果的に、その代わりとしてベトナムを選んだことは、当時必ずしもネガティブ・チョイスとは考えていなかったですね。あくまでも前向きに、「これからはアジアの大学だ」と自分を叱咤していた程です。大学選びについてですが、ハノイ貿易大学にするか、ハノイ国民経済大学にするかで悩みました。貿易大学には日本語学科があるので、日本語も通じます。当時、私はベトナム語がそれ程うまく話せませんでしたので、確かにその環境は魅力でした。ですが、せっかくの機会なのにベトナム語を勉強する気が失せてしまうのでは、との懸念もありました。そして、最終的にハノイ国民経済大を選んだというわけです。

（２） 大学近くの安いホテルに長期滞在しました。留学の身分は客員研究員で、自分の好きな研究を心行くまでやれ、というわけです。当該大学で講義するわけではありませんし、研究員としての義務は多くなく、かなり自由な環境で自分の研究が出来ました。研究テーマは日系を含めたベトナム国内の企業調査でした。国内の規制などで、もしうまく研究が運ばなければ、この機会にたくさん本を読んで博士論文でも仕上げようかと、日本から今まで読めなかった多数の文献を持参して

いました。自分が思い描いていた研究は順調に進み、持参した書籍の重量オーバーで 100 ドルほどの出費がムダになりました（笑）。ベトナム語は、週２回家庭教師をつけて習っていました。そうそう、たったひとつあった留学生としての仕事は、研究セミナーを主催することでした。日本から視察にやってきた神戸大学の先生たちの協力で成功でした。また、東アジア経営学会をベトナム国家大学ハノイ校で開催するための準備を日本側代表として現地でお手伝いしました。たとえば寄付金集めでベトナム日系企業にお願いに行ったりもしました。これらは、すべてうまく行きましたよ。

（３） いいことは一杯ありますよ。今もあの時の経験が仕事に役立ってます（後述）。ベトナム語も少しは上達しましたし。客員研究員としての縛りが強くなく、自由に研究させて貰ったこともありがたかったです。しかし他方、余りに自由なのもどうかなとも思います。欧米の大学なら客員研究員にはもう少し課題が与えられるというようなことも聞きますし、この点、ベトナムの大学にもう少しリーダーシップ或いはイニシアチブがあってもいいのではないでしょうか。同時に、私自身からももっとベトナム人教員や学生に向かって働きかけるべきだったのかもしれないですね。この点は今ではちょっとした反省点です。しかし、そのためには研究費も必要で実際には事前準備が必要ですね。他に悪かったことというのは余り思いつきません。

（４） 驚いたのは、現地で用意された研究環境への対価を払え、と要求されたことです。私にはハノイ国民経済大学の研究室に机や椅子、コンピューターなどが提供されたのですが、欧米の大学では普通このような環境に対してお金を払うように言われることはありません。ところが、ベトナムのこの大学ではなんと 100 米ドルを私に払えというのです。当時のことですから、コンピューターといってもインターネットも満足に使えません。日本語のフォントも入っていない。この環境で 100 ドルは明らかに高い。しかも毎月ですよ。けれど、現地の人間関係を悪くするのもどうかと思い、結局はそれがベトナムの大学の慣習なのだと自分を納得させて支払うことにしました。同じように客員研究員として来ていたオーストラリア人の女性研究者には、上田先生が悪い前例を作ったと後で苦情を言われましたが（笑）。もうひとつびっくりさせられたのは、ベトナムの大学が意外にしっかりと論文の審査をしていることです。私自身も立ち会ったのですが、この国では

修士論文にしろ、博士論文にしろ、かなり慎重にかつ公平に審査されています。この点は、おそらくベトナムの主だった大学教員にモスクワ大学など旧ソビエト連邦への留学組が多いことの影響ではないかと推測しています。多少、権威主義的な傾向はあるのですけれど（笑）。また教員の評価も厳しいようです。降格人事の事例も聞きました。

（5） 私は今もベトナムについての幾つかの研究課題を抱えているので、留学によって得られたものは数限りなくあります。調査・研究へのヒントとか、人脈とか。加えて、ベトナム人のものの考え方に生で触れられたのも貴重な経験だと思っています。実は今年、私は大学で教鞭を執る傍らで自分の会社を設立しました。ベトナムとの貿易・投資促進を目的としています。パートナーとなる現地企業のベトナム国内での登録や株式の上場など、やらなければならないことは山ほどあるのですが、そんな時に協力してくれるのが留学当時から築いて来た人脈です。これは本当にありがたい。ベトナムでの仕事を共同ですると言っても、時には口約束でしか物事が進まないこともありますから。そんな時に信頼出来る友人がいるというのは非常に心強いのです。その友人の紹介ということで、新たに信頼出来るベトナム人と知り合えるのです。ハノイ国民経済大学に籍を置いていたというのも、ベトナムでは有利に働きます。社会で活躍している卒業生が多いですし、時にはそんな彼らの同窓生扱いされることもあって（笑）、光栄に思ったりもします。

（6） 先に研究環境に月 100 ドル要求された話をしたのですが、海外ではそのような話が幾つもあります。しかし、それも現地の文化・慣習だと割り切って、敢えてそれに従うという選択もあり得ると思うのです。ベトナムというのは「お土産文化」ですから、このような例は多数あります。欧米人などはそれらを一切拒否する人も多いのですが、私の立場はそれら現地の慣習を何割かは受け入れるというものです。賄賂まで行けば悪いことなのですけれど、ちょっとした心遣いが必要な場面は必ずありますよ。それで円滑な関係が出来れば、安いものです。ただし、上の 100 ドルの例ではちょっと反省もあるのです。当時は何もわからなかったとはいえ、相手の言うまま 100 ドルそっくり支払ったのですからね。今なら間違いなく「そんなに高いわけがない」と言って値切るでしょうね（笑）。

第VI章：まとめ

最終章では、これまでの調査結果を中心に、第Ⅰ章から第Ⅴ章までを要約すると同時に、それらに対する筆者なりの見解を示し、本調査のまとめとしたい。

１． 本研究の目的

飽和状態にある欧米への留学希望者に比べ、日本からアジア諸国への留学は中国を中心として今後の成長性が大きく見込まれる分野である。よって、本調査では、企業の視点を中心に、アジア留学と欧米留学との比較を試みる。具体的には以下の３点を目的とする。

（１） 日本人の留学やアジアの大学に関する先行研究をレビュー・整理し、
（２） 欧米留学組との比較の観点から、企業は日本人のアジア留学組をどう評価しているかを明らかにする。さらに、
（３） アジア諸国に留学経験のある日本人へのインタビューを通じ、留学した側、採用される側からの視点を併せて提供する。

２． アジアの大学に関する先行研究

80 年代後半のアルトバックによる研究をその嚆矢として、アジアの大学や高等教育に関する研究は、質的にも量的にも、実はもう十分なされていると言っても良い。少なくとも、日本語におけるこの種の文献は、質量共に欧米の大学研究に関するそれを凌駕せんばかりの勢いである。

例えば、北京大学や清華大学、シンガポール大学など、個別の大学について論じたもの、中国やベトナム、韓国などといったある特定の国の大学について論じたもの、或いはいわゆる従属理論的見地からアジアの大学に見る西欧の大学的特質の優位性を説いたもの。さらには、ある国の高等教育の成り立ちを歴史的な視点から紐解いたもの、アジア各国における大学の現在の様子を報告したものなど、内容は実にバラエティに富む。

それらの研究を総合すると、アジアの高等教育に関して次の２つの傾向が見て取れる。ひとつは、制度の面でアジアの旗艦大学は日本の大学と「対等」どころか、それ以上に素早くダイナミックな動きを見せ始めているということだ。例えば、中国で 1996 年に

始まった「211 工程」と呼ばれる重点大学育成策、シンガポールやマレーシアで盛んになって来た海外の一流大学との提携プログラムはその一例である。また、わが国における国立大学法人化の実施、或いは株式会社立大学の設置認可以前に、マレーシアやシンガポール、或いはタイなどで同様の試みがなされていたことも特筆すべきである[127]。

他方、研究や教育といった内容の面では立ち遅れが目立つ。この点がもうひとつの傾向として挙げられよう。近年アジアの大学は中国を中心に（特に自然科学分野における）研究面の充実を急いで来た[128]。ところが、この分野では設備の拡充や人材の早期育成、産業界の重層的な支援など実に様々な条件が必要であり、アジアの多くの国ではまだこの点が日本以上に整備されているとは言いがたい。したがって、特に自然科学分野の研究面でアジアの大学は日本のそれの後塵を拝しがちである。

さらに教育という点でも、スローパー（1995）によるベトナムの大学のレポートや第Ⅴ章で多くのアジア留学経験者が語るように、アジアの大学の多くは、たとえ旗艦大学といえども未だに暗記・詰め込み型が中心であり、創造的なアイデアや研究が生まれにくいという土壌を持つ。第Ⅱ章で紹介した東京大学教授・末廣の次の発言が、この事実を最も的確に表現している。

「例えば、チュラーロンコン（原文ママ）大学で、先端的研究をやろうとしても、それを支えるすそ野や基礎研究がまだ整備されていない。チュラーロンコンの中で一番進んでいる分野の一つは化学だと思うんですが、国際的なレフリー制ジャーナルに、博士論文を書いて通った教員はほんとんど（原文ママ）いないわけです。そういう状況のもとで高度化、高度化と言っても、やっぱりむなしいのであって、ある程度の時間をかけて、すそ野から教育基盤をつくっていくというプロセスが必要じゃないかと思います。ですから数字の上で進学率は非常に上がったけれども、中身のほうがそれについてきていないというのが、私の印象です」（再掲）

[127] マレーシアについては第Ⅱ章参照。シンガポールでは企業的大学（entrepreneurial university）、タイでは自治大学（autonomous university）と呼ばれる。
[128] 中国が、欧米の一流大学院へ留学した中国人研究者を海亀派と呼び、高い報酬と地位を約束することで国内への回帰を推進しているのは広く知られるところである。

これらの点から、第１の制度面はともかく、大学本来の使命である教育や研究という点では、アジアの大学の多くは金子（2001）の言う「発展途上大学」であり、今のところ、特に自然科学分野においては日本の大学がまだ比較優位を保っていると思われる。

３． アジアへの留学の実態とそれに関する先行研究

しかし、たとえアジアの大学が、上記２で紹介した程度に未成熟な状況にあっても、日本人のアジア留学は急激に拡大している。2003 年における文部科学省統計によれば、アジアへの日本人留学生数は 16,028 人で、北米への 42,295 人に次いでおり、欧州への 12,151 人を既に上回っている。

留学生数の伸びは言うに及ばず、その内容についても、中国やインドへの MBA 留学という新たな傾向が第Ⅴ章では報告されている。よって本項では、これらの事実を取り巻く背景について、１）アジア各国における留学生受け入れ策：プル要因として、２）わが国政府と個別大学：プッシュ要因として、という２つの視点からまとめてみたい。

（１）アジア各国における留学生受け入れ策：プル要因として

まず、アジア各国政府の立場については、外務省人物交流室（2004）が主要各国の留学生受け入れ策を紹介している。例えば、中国にとっての留学生受け入れはいわば国策であり、「規模の拡大、レベルアップ、質の保証、規範の管理」がその課題となっている。特に「規模の拡大」については、2007 年に留学生受け入れ総数 12 万人という目標がある。同様に韓国は 2010 年までに５万人、台湾も 2010 年までに留学生数倍増（15,000 人）を目指す。シンガポールやマレーシアは数値目標の明言こそないものの、相次ぐ欧米の一流大学との提携プログラムで、より多くの留学生の獲得を目指している。いずれの国においても、日本人留学生の獲得は重要なテーマだ。

但し、その具体的な方策としては、中国や韓国のように政府支給による奨学金を拡充するという方策もあるものの、今のところは各個別大学の方策に任されている部分が大きい。例えばその成功例として、前記のシンガポールの場合には、シンガポール国立大学やナンヤン工科大学という２大国立大学が中心となり、米・マサチューセッツ工科大学やわが国の早稲田大学などと留学生獲得のための提携プログラムを実施している。そして政府は、従来存在していた大学ごとの留学生割り当て枠を撤廃するなど、側面支援に徹している。

鄭（2006）の韓国に関する報告は、留学生獲得策の失敗例である。2006 年、ソウル大学は特別外国人留学生受け入れプログラムを実施したものの、「国費奨学金以上の好条件」にも関わらず、募集人員 63 人のところ応募は 20 人に留まったという。

日本人のアジア留学促進に関するプル要因として、今最もダイナミックな動きをしているのは中国の各大学であろう。日本をはじめとする各国の大学と、相互の提携関係を強力に推し進めている。日本の大学がこれに呼応することで、様々な交換留学プログラムが共同開発されており、この点で日本の各大学から見てプッシュ要因ともなっている。

（２）わが国政府と個別大学：プッシュ要因として

日本人のアジア留学促進をプッシュする要因として、ここでは政府と各個別大学という２つの主体を考えてみたい。まず、わが国の留学生派遣策としては、（厳密な意味で政府案とは言えないものの）2003 年 12 月 16 日付で中央教育審議会から日本政府に答申された「新たな留学生政策の展開～留学生交流の拡大と質の向上を目指して～」がある。この答申では「アジア太平洋大学交流機構(UMAP) が開発した UMAP 単位互換方式(UCTS) の活用が有効」と、日本人のアジア留学促進を示唆している箇所もあり注目される。ところが一方で、「短期留学の推進に当たっては、（中略）アジア等への派遣、欧米等からの受入れを推進するなど、交流の地域の均衡に留意していく必要がある」とも述べられているため少し混乱する。

「均衡が取れていない」ので「交流の地域の均衡に留意」する、というのはもちろん悪いことではない。しかしながら、その手段として短期留学の推進を活用する、というのは議論のあるところであろう。確かに短期留学ならより多くの人の参加が期待出来るため、数は稼げるであろう。そしてその（数合わせの）結果として、欧米とアジアの差は少しは縮小する。また、将来のより長期の留学につながるようなきっかけ作りとしては、ごく短期の留学にも意味はあるであろう。実際、政府以外のもうひとつの主体としての日本の各大学が実施しているアジアへの留学促進策も、ごく短期の留学を意図したものが多い。第Ⅱ章で紹介した南山大学の短期アジアプログラムなどはその例であり、実態としてこれらのプログラムが日本人のアジア留学を促進する大きなプッシュ要因となっていることは確かに否定出来ない。

けれども、アジアへは長期留学でなく短期留学を奨励、という誤ったメッセージを政府が発することになれば、それはそれで問題であろう。最近では、第Ⅱ章で紹介した早

稲田大学のシンガポールでのダブルディグリー・プログラム、神戸大学のサンドイッチ・プログラムなど、より長期の本格的な留学を企図する試みも幾つか生まれて来ているので、なお一層、短期留学中心で行くという方針には違和感を禁じ得ない。

実のところ、短期留学ではどうしても語学学習が中心とならざるを得ず、その点、同じ 2003 年 12 月 16 日付中央教育審議会答申で「アジアにおいても世界トップクラスを目指す高等教育機関が出現」したと、その教育・研究面を賞賛している事実との間に少なからぬ矛盾や齟齬を生じている。ただそれでも、将来の本格的アジア留学拡大に向けた過渡的な施策のひとつ、或いはきっかけ作りとして、過渡期である今は短期留学中心の方策をひとまず受け入れる、という選択は可能かもしれない。

しかしそれにしても、短期・長期というのは何ら本質的な事柄ではない。この意味で前記の答申がもっと問題なのは、卑近な数合わせの論理からのみアジア留学促進の必要性が論じられていることで、アジア留学が持つ本来の意義や本質的な価値という側面からではないことであろう。そこには政府としての哲学や理念のようなものが一切垣間見えない。

その点、わが国の各個別大学の理念や方策の方が、かえってアジア留学の意義や本質をより的確に捉えており非常に示唆に富む。本項でそれら全てを紹介することは出来ないが、全体をより大局的に理解しようとすれば、仲上（2001）の言う４つの意義と三上（2005）の主張する３つの意義を対比するのが良い。

まず仲上は、日本人のアジア留学に関して、１）アジア地域の発展にとっての意義、２）留学する学生にとっての意義、３）企業などの各団体にとっての意義、そして４）（日本の）大学にとっての意義、という４つの意義を提起する。中でも、日本人留学生が、既に日本は全ての面でアジアのトップではないという現実を理解し、アジアから学ぶという姿勢を身に付けることが出来る、という意義は貴重な示唆である。

これに対して三上（2005）は、工学専門家の立場から、大学卒業後「アジアの技術者との密接な共同作業に」携わるであろう工学部生には、学生時代にアジアを肌で知った経験が将来必ず役に立つと言う。また、「科学技術で日本がリーダーシップをとる上で、学生が途上国の実際の問題に現場で接すること」の効用をも説く。そしてさらに、「アジア地域における地域経済統合の進展と日本の国際貢献にとって」日本人のアジア留学の効用は大きいと主張する。

両者共に、人や地域の交流或いは共同作業、経験の共有といった点で共通点を持つ。重要なのは両者の相違点である。仲上は、アジアには既に日本より進んでいる部分があるので、そこから学べと唱える。これに対して三上は、遅れている途上国の現状を体で味わえ、と言う。つまり、進んでいる点、遅れている点、その双方から日本人は共に学ぶことが大事だ、というのが両者の主張に関する筆者流の解釈である。

このように、一見相対立するような意見が提起されるのは、しばしば「混沌」とさえ表現されるアジアのダイナミックさゆえであり、まさにそこにこそアジア留学の本質的な意義が隠されているように筆者には思える。そして、現実にこのような両者の視点に立って、アジアの大学との学生交流を実践している日本の大学は多い。

但し、単なる学生の派遣・交流というところから、教員の交流やカリキュラムの共通化まで枠を広げれば、「東アジア、及び東南アジアの高等教育機関で海外の諸大学と連携して共同カリキュラム・教育プログラムが積極的に行われていないのは、日本と韓国だけ」という岡崎（2005）の指摘がある。将来的により大きな可能性や広がりのあるこうしたプログラムには、日本の大学は他の多くのアジアの国ほど熱心でない、という事実は重い。

４． 企業の視点

本項では、本調査の核となる企業アンケートの結果をまとめてみたい。

（１） アジア留学経験者の採用に積極的な企業

欧米留学組を積極的に採用していると回答した企業は、有効回答総数 87 社中 22 社、アジア留学組のそれは 13 社である。採用を検討中のものを含めると、欧米留学は 39 社、アジア留学は 35 社となり差が縮小する。

そして、アジア留学経験者の積極採用を実施していると回答した企業 13 社は、全て例外なく欧米留学経験者の採用実績がある。採用を検討中と回答した企業を含めれば、欧米留学組の採用に積極的な企業群がアジア留学組の採用にも積極であることは、統計的にもさらに明らかとなっている。

また、これら 13 社の業種は様々であり、製造業・非製造業のどちらにも偏っていない。因みに、欧米留学経験者を採用（または採用を検討）しているか否か、製造業か非製造業か、企業規模は従業員 1,000 人以下、1,001 人から 3,000 人、或いはそれ以上か、

という指標を使った重回帰分析では、回帰式が以下のように得られた。yはアジア留学経験者を採用している企業群、x_1は欧米留学経験者を採用している企業群、x_2は製造業であること、x_3は従業員が 1,001 人から 3,000 人の大企業であること、x_4は従業員が 3,001 人以上の大企業であること、をそれぞれ表す。

$$y = -0.62999 + 1.649033x_1 - 0.19339x_2 - 0.45545x_3 - 0.27965x_4$$

本調査で得られた指標の組み合わせの中では、上記回帰式の自由度調整済み寄与率が最も高くなる。その意味では確かに相互関係を最もよく説明し得る回帰式ではあるものの、自由度調整済み寄与率 0.618486 は一般的に決して高い数値とは言えない。

つまりこのことは、わが国の企業がアジア留学経験者を採用するに際し、より大きな要因はおそらく他にもあるのではないかということを示唆している。例えば、アジア各国における支社や工場の有無、アジア市場での製品シェアの大きさなどが真っ先に考えられる。或いは、永野（2004）らの調査が示唆するように、大卒文系について「新卒者にも即戦力が求められる」と考える企業かそうでないか、というのも有力な説明変数になり得る。いずれにしろ、今回の調査では必ずしも明らかにはならなかった。今後の研究課題であろう。

（２） アジア留学経験者の採用数

次に具体的な採用人数を見てみると、2006 年秋から過去３年間、実際に欧米留学経験者を採用した企業は全部で 48 社、採用総計は新卒・中途合わせて 382 人（新卒 288 人、中途 94 人）で、１社１年あたり 2.7 人を採用している計算だ。

これに対して、アジア留学経験者を採用したと回答した企業はわずか 19 社、総採用人数は３年間で 73 人（新卒 47 人、中途 26 人）、１社あたりの採用人数は１年に 1.3 人に留まる。

しかしながら、確かに採用総数の比こそ約５：１となるものの、2003 年の文部科学省統計に見るように、もともとの日本人留学生総数が両地域で 3.4：１という現実がある。つまり、もともとの分母が違うというのが、採用数の差を生んでいる最大の要因である。５：１という数値のみを必要以上に悲観すべきではない。

（３）企業が評価する留学先

欧米ではアメリカ、アジアでは中国が、今のところ企業の評価する留学先の圧倒的第１位である。前者は全体の 43.48%、後者は 45.16%の支持を集めており、特に後者は香港を加えると優に 50%を超す。

また、言語で見た場合、欧米ではアメリカ・イギリスを含む英語圏がほぼ９割、アジアでは中国・台湾・シンガポールなどの中国語圏がほぼ８割という風に、それぞれ圧倒的な支持を集めていることもひとつの大きな特徴である。

また、留学先の大学が有名か無名かについては、９割近くの企業が欧米に関してもアジアに関しても「気にしない」と回答してはいるものの、他の回答と照らし合わせると決して整合性が取れているとは言い難い。

（４）企業が評価する専攻分野

企業が評価する専攻分野として、欧米留学、アジア留学共に最も多い回答は「特に気にしない」で、前者では 30%、後者では 37.93%である。「留学経験は国を問わず本人の積極性を判断する材料のひとつに過ぎないと考えている」（小売業・従業員数 200 人台）という声に代表されるように、特に何かの専門知識を期待しているわけではない、という企業が圧倒的に多い。

「特に気にしない」という選択肢を除き、アジアへの留学に関して企業が最も評価する専攻分野は「語学・通訳」の割合が最も高く、回答を寄せた企業の 20.69%を占める。アジア留学についてはこの項目がひとつ突出して高い山になっているのに比べ、欧米留学については「ビジネススクール」「語学・通訳」「その他人文・社会科学」という分野がそれぞれ 15%を占め、中程度の山が３つあるという形状になっている。

また、欧米留学では理科系の専門が計 20%を占めたのに対し、アジア留学では 13.79%と比較的低い評価になっていることもひとつの特徴である。本章の２で紹介した末廣の認識、すなわち「先端的研究をやろうとしても、それを支えるすそ野や基礎研究がまだ整備されていない」という見方を、現段階では企業も共有しているものと推察される。

（５）企業が評価する留学生の能力・資質

企業が評価する留学生の能力・資質について、欧米留学組とアジア留学組の双方を採用している企業群で比較した時、両者の差は殆どない。しかし、欧米留学組のみを採用

また採用の計画があると回答した企業群と、上記の企業群（双方採用）とを比較した時には若干の差異が見られる。すなわち、アジア＞欧米となった上位３項目は次の通りである。

第１位　留学した国・地域に関する知識　差 10.20％
第２位　語学力　差 4.71％
第３位　異文化への適応力　差 3.44％

反対に、欧米留学経験者の方がアジア留学経験者よりも高く評価されたのは、以下の３項目である。

第１位　向上心・チャレンジ精神　差 7.67％
第２位　語学など以外の一般的コミュニケーション能力　差 6.80％
第３位　交渉力　差 1.92％

アジア留学経験者が比較的ローカルな能力を評価されたのに比べ、欧米留学経験者はより普遍的な能力を評価されている。この点につき、第Ⅴ章の留学経験者インタビューで、シンガポールへ留学した市川幹人・J.D.　Power Asia Pacific 社部長は「（アジア留学は）応用範囲の狭い経験」という言葉で表している。また、アメリカとタイ双方への留学経験を持つ吉原祥子・国際海事大学連合コーディネーターが同じ文脈で次のようなことを述べており、極めて興味深い。

「タイの大学で学ぶことはアメリカの大学で学ぶことに比べ普遍性が少ないと感じます。アメリカの大学の方が、世界のどこでも通用するような考え方や論理をより重視する傾向があると思います」

（６）短期語学留学への評価

短期語学留学については、「大いに評価」に３点、「少しは評価」に２点、「余り評価せず」に１点、「全く評価せず」には０点を与え加重平均をとったところ、全体で欧米への短期語学留学は 1.96 点、アジアへのそれは 2.14 点であった。

総じて、否定的な回答は少なく、たとえ短期間の語学留学であってもある程度は評価されているものと考えてよい。但し、欧米留学組のみを採用していると回答した企業に限れば、否定的な回答は40%を超えており、比較的高い率となっている。これらの企業では、例えばMBAや法曹資格者など、より専門性の高い留学経験者も同時に採用しているはずで、それらの人材との比較から「英語を少しかじって来たくらいでは・・」と考えているのではないかと推察される。企業の本音の部分である。

（7）学位への評価

学位の有無を「気にする」と回答した企業は、欧米留学組に対して14.29%、アジア留学組に対しては13.10%に過ぎない。留学した地域に関わらず、企業の学位への評価は甚だ低いと言わざるを得ない。

（8）アジア留学経験者採用の必要性と能力への評価

アジア留学経験者に対する採用の必要性を、欧米留学経験者に対するそれとの対比で尋ねたところ、統計的に有意な差はなかった。すなわち、多くの企業が欧米留学組と同程度の必要性を感じているという結果である。

しかし、個人の能力という指標については、欧米留学組の方がほんの少しではあるがアジア留学組よりも高い評価を受けている。統計的な有意差は測定不能であるものの、企業からは「アジア地域への留学生は知的レベルが低い印象がある。国内や欧米の大学に受からなかった人材といったイメージが出来てしまっている」（電気機器・従業員数2,000人台）という厳しい指摘がある。もしそれが単なるイメージに過ぎないのであれば、ステレオタイプ的な偏見は速やかに駆逐されなければならない。アジア留学経験者の側からのより多くの情報発信や、より検証可能な手法による後続の調査研究が待たれるところである。

５．　留学経験者の視点

本項では、実際にアジア各国へ留学した日本人へのインタビュー結果をまとめ、それに対する筆者の見解を述べる。インタビューという調査手法の形式上、それをまとめたり自己の見解を述べたりする際に、どうしても筆者自身の主観が混じることは避けられない。この点、予めご容赦願いたい。

（1）国や大学を選んだ理由

その国や地域にそもそも関心を持ったきっかけは人により異なっている。例えば、友人・知人にたまたま韓国人や台湾人がいたとか、両親がベトナム反戦運動をしていたからとか、仕事や旅行で訪れて好きになったとか、実に様々である。中には在日の中国人が、自らのルーツを探るため中国へ留学したと回答したケースもある。

但し、留学の目的意識という点では皆驚くほど似通っている。すなわち、当該国・地域における経済的・社会的発展の様子を現在進行形で体験したかった、というのがその最大公約数である。留学先の国や地域はまちまちでも、アジアはその殆どが発展途上の国として分類されるためであろう。

（2）留学生活について

どのような留学生活であったか、という漠然とした質問には、例えば、語学留学と学位取得目的の留学とではかなり様相が異なる。但し、どの経験者も留学生活が辛かったとは述べておらず、全般的に現地での体験を楽しんだ様子がうかがえた。

語学留学の経験者に共通しているのは、現地学生との交流機会が予想以上に少ないと嘆く声である。しかし、これは何もアジア留学に限ったことではないであろう。また、現地学生との接点のなさに失望したこれらの経験者も、後段の（3）で述べるように、各国の語学留学生との交流は大いに楽しんだと回答した者が多い。これに関連し複数の経験者が、まだ現地語が十分に習得出来ていない段階では、異なる国からの留学生同士のコミュニケーションにおいて、世界共通語である英語の役割を再認識したと述べており、この点も注目される。

また、中国やベトナムなど社会主義国への留学経験者は、現地での政治的な困難さや情報流通・開示のあり方に疑問を呈した者が多かった。但し、これらの経験も他では得難いものと積極的に受け止める様子もうかがえた。

（3）留学して良かったこと、悪かったこと

留学して良かったことの筆頭は様々な意味で「異文化体験が出来たこと」であり、この点は第Ⅱ章で紹介した JASSO 留学センター（2005）による留学生追跡調査の結果とも符合する。また、現地の学習環境への満足度は意外に高く、多くのアジア留学経験者が

一部未発達の学習設備や生活環境について途上国なら当たり前と良い意味で鷹揚に捉えていた。

アジアへの留学ということで、現地の学生との触れ合いのみを期待していたところ、留学生には留学生のコミュニティがあり、意外にも世界各国からの留学生との国際交流が楽しめた、という回答も多かった。英語の重要性に改めて気付いた、と述べる者が複数いたことは既に上記（２）で述べた。

（４）日本や欧米の大学との比較

日本や欧米の大学と比較してどこが違うか、という質問をしたところ、まずハードの面では、特に中国の大学の場合、スーパーマーケットなど生活に必要な殆どの施設がキャンパス内にあることに驚いた、と報告した者が複数いた。

ソフトの面では、日本の大学生に比べ、現地の学生は実によく勉強すると答えた者が大多数であった。特に中国人学生の勤勉さを指摘する者が多く、その内容は殆ど驚嘆や賞賛に近い。現地学生と余り接触の機会がなかった語学留学経験者ですら、同じキャンパスのあちこちで、早朝から深夜まで勉学に励む中国人学生を間近に見て、大いに刺激を受けたと報告している。

但し、そのように勤勉な学生も、多くの大学では暗記中心の教育法であるため、独自のアイデアや持論を展開するということはなく、むしろ知識を詰め込む方にエネルギーを注ぐという。また、そこで教えられる内容も、良い意味でオリジナリティのあるものでもなければ、他で応用のきく汎用性のあるものでもないという。

他に少数意見として、同窓会組織などのシステムが未発達（シンガポール）、先生や先輩の権限が大きい（韓国）などの声もあった。もっとも、大なり小なりこれらの傾向は他のアジアの国にも共通した事象であろう。

（５）仕事への有用性

アジアへの留学経験が仕事にどのように役立っているか、という質問にも実に多様なコメントが寄せられた。但し、どの経験者にも共通しているのは、異文化を体験したことが有形無形でプラスの財産になっているという回答である。この点は上記（３）の「留学して良かったことは？」という質問への回答とも符合する。

語学に関する評価は賛否が分かれる。留学先で習得した語学を、今の仕事でも継続して使用しているような場合には全員が「役立った」と回答している。例えば、今も通訳として活躍する尾上氏（インタビュー番号７番）や秋葉氏（同 35 番）のケース、現地のビジネスパートナーを持つ小野崎氏（同６番）らの場合がそれである。

しかしながら、現地で学んだ語学を留学後に使わなくなったなど、運悪く縁遠くなってしまった場合には、当然ながらその有用性への評価は低い。中国語を学んだ後、さらにタイへも留学した春木氏（同１番）のケースがそれである。さらに、留学で習得した語学を今も使うという人の中にも、高畠氏（同５番）のように「確かに中国人のビジネスパートナーと中国語で会話するという状況はあるのですが、一定レベル以上の中国人は英語を話す人も多い」ので、結局英語の方が大事だと述べる人もいる。

（６）アジア留学を志す若者へのメッセージ

これからアジア留学を目指す若い人たちへのメッセージも、経験者によって実に様々である。その中から留学前に注意することを拾ってみると、

- まず日本のことを勉強せよ
- 留学先国のこともよく調べよ
- アジアに留学することの意味や目的をよく考えよ

というようなアドバイスが寄せられている。一方、留学した後では、

- 身の安全に注意せよ
- 同じ日本人留学生を邪険にしてはいけないが、かといって日本人ばかりと一緒にいてもいけない
- とにかく一生懸命勉強せよ

という忠告が複数の経験者からあった。総じて、アジアへ留学すること自体については積極的に捉え推薦する者が多い。

６．　むすびにかえて

以上見て来たように、アジアの大学に関する研究は進んでいるにも関わらず、そこへ留学する日本人の数は欧米へのそれに比べて少ない。わが国の各個別大学や学生個人を

中心としてアジアへの留学生数は徐々に増えて来ているものの、そこには残念ながら国益という観点はない。それら留学生の最終的な引き受け先となる企業は、アジア留学経験者に熱い視線を注ぎつつも、現状は情報収集にもそれほど熱心ではなく、様子見の観が強い。

このような３つの大きな矛盾を孕みつつ、それでも日本人のアジア留学生は年々増加の一途を辿っている。そこでまず必要なのは、欧米留学とのアンバランスの解消といった単なる数合わせの論理でない確固とした国策だ。筆者が 2004 年に提唱した「人事院実施の国家公務員海外留学制度において、一定割合を欧米以外の国に」というアイデア[129]はその意味で今でも有効だと信ずる。

そしてもうひとつ必要なのは、日本人のアジア留学に関する情報発信と研究である。現実の施策と、情報発信・研究とはどちらが欠けてもいけない、いわば車の両輪である。本稿が後者における小さな礎のひとつとなれば、筆者として、またアジア留学経験者の１人としてこれ以上の幸せはない。

[129] 大西（2004）。

参考文献

●日本語（アイウエオ順）[130]

P. G. アルトバック、馬越徹編、北村友人監訳（2006）「アジアの高等教育改革」玉川大学出版部

イカロス出版編集室編（2006）「中国留学サクセスブック 2006-2007」イカロス出版

池田充裕（2001）「21 世紀に羽ばたくシンガポールの大学―知識経済に勝ち抜くための大学教育改革」『IDE 現代の高等教育』2001 年 7 月号、民主教育協会

池田充裕（2006）「シンガポールの高等教育の現状と海外戦略」『留学交流』2006 年 10 月号、日本学生支援機構

石井米雄（2001）「アジアの大学と日本の大学」『IDE 現代の高等教育』2001 年 7 月号、民主教育協会

伊藤洋一（2007）「IT とカースト　インド・成長の秘密と苦悩」日本経済新聞社

今西淳子（2005）「新しい留学政策の推進を」朝日新聞（アジアネットワーク）、2005 年 12 月 9 日

馬越徹・大塚豊監訳（1993）「アジアの大学：従属から自立へ」玉川大学出版部

馬越徹（1989）「現代アジアの教育」東信堂

馬越徹監訳（1994）「比較高等教育：「知」の世界システムと大学」玉川大学出版部

馬越徹（1995）「韓国近代大学の成立と展開：大学モデルの伝播研究」名古屋大学出版会

OECD 編著、御園生純監訳（2006）「世界の教育改革２　OECD 教育政策分析：早期幼児期教育・高水準で公平な教育・教育的労働力・国境を越える教育・人的資本再考」明石書店

大塚豊（1996）「現代中国高等教育の成立」玉川大学出版部

大塚豊監訳（1998）「変革期ベトナムの大学」東信堂

大塚豊（2001）「21 世紀に羽ばたくベトナムの大学―ドイモイ政策と大学」『IDE 現代の高等教育』2001 年 7 月号、民主教育協会

大塚豊（2006）「留学をめぐる中国の国家戦略」『留学交流』2006 年 10 月号、日本学生支援機構

[130] 雑誌『留学交流』の発行元表記は日本学生支援機構の名称で統一した。

大西好宣（1998）「ミャンマーにおける放送教育の可能性：首都ヤンゴンでのサンプル調査の結果から」『教育メディア研究』第５巻第１号、日本教育メディア学会
大西好宣（2003）「なぜ今アジアの大学か」『TOEFL メールマガジン』26 号及び 28 号、国際教育交換協議会
大西好宣（2004）「日本と ASEAN の未来」神戸大学懸賞論文・最優秀賞
大西好宣（2006）「タイ王国への大学院留学」『留学交流』2006 年４月号、日本学生支援機構
近江彰（2001）「明海大学におけるアジア諸国の大学との交流」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
岡崎智己（2005）「アジアにおける大学連携のための基礎的研究―共同カリキュラム・プログラム開発に関わるフィージビリティ・スタディ（１）－」『九州大学留学生センター紀要』第 14 号、九州大学留学生センター
岡本聡子（2005）「上海の MBA で出会った中国の若きエリートたちの素顔」アルク社
沖園カナ子（1993）「北京ダックス：中国のヤングエリート・北京大学生」第三書館
外務省人物交流室（2004）「主要国・地域における留学生受入れ政策」外務省
加藤重雄（2006）「ミャンマーの高等教育事情」『留学交流』2006 年７月号、日本学生支援機構
蟹瀬誠一（2006）「４つの資産：成功の黄金法則・僕の場合」講談社
金子元久（2001）「台頭するアジアの旗艦大学と日本」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
川口真保（2001）「漢語本科生としての留学」『留学交流』2001 年７月号
カンピラパーブ・スネート（2006）「タイにおける高等教育の国際化と留学生施策の動向」『留学交流』2006 年２月号
喜多村和之（2001）「日本にとってのアジアの大学」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
木村尚三郎（2006）「経済教室：老成日本　若さ取り込め」『日本経済新聞』2006 年２月 21 日東京版
金素英（2001）「韓国への留学について」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
工藤俊一(2003)「北京大学超エリートたちの日本論：衝撃の『歴史認識』」講談社

熊慶年（2004）「飛躍的に発展する中国の高等教育」『IDE 現代の高等教育』2004 年４－５月号、民主教育協会
黒田千晴（2003）「中国の留学生受け入れ政策の展開」『国際文化学』第９号（2003 年９月）、神戸大学国際文化学会
黒田千晴（2005）「中国の戦略的留学生受け入れ政策」『国際文化学』第 13 号（2005 年９月）、神戸大学国際文化学会
黒田千晴（2006）「グローバル化時代における中国の対外教育戦略」『留学生教育』第 11 号（2006 年 12 月）、留学生教育学会
鯉渕信一（2006）「アジア夢カレッジ―キャリア開発中国プログラム：産学連携による四年一貫の留学教育の取組」『留学交流』2006 年 11 月号、日本学生支援機構
紺野大介（2006）「中国の頭脳：清華大学と北京大学」朝日新聞社
近藤大介（1997）「北京大学三カ国カルチャーショック」講談社
小中倫子（2001）「中国への学生派遣について」『留学交流』2001 年７月号、日本学生支援機構
佐藤東洋士（2001）「21 世紀に羽ばたく台湾の大学―全入時代の優秀な学生確保策」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
澤昭裕、寺澤達也、井上悟志編著（2005）「競争に勝つ大学：科学技術システムの再構築に向けて」東洋経済新報社
財団法人静岡総合研究機構編、馬越徹監修（2005）「アジア太平洋高等教育の未来像」東信堂
所澤[131]潤（2006）「アジアへの交換留学は不振―戦略的改革を」『留学交流』2006 年 11 月号、日本学生支援機構
末広美樹（2006）「日本人留学生のアイデンティティ変容」大阪大学出版会
杉本美紀（2004）「アジア諸国の高等教育政策と留学生問題」『Between』2004 年４月号、進研アド
杉本均（2006）「マレーシアの高等教育の現状と留学生施策」『留学交流』2006 年 10 月号、日本学生支援機構
鈴木正夫（2001）「上海への学生派遣―横浜市立大学の場合―」『留学交流』2001 年７月号、日本学生支援機構

[131] 読み：しょざわ

鈴木有一（2001）「インドネシアへの留学について」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
鈴木悠子（2001）「留学体験記：台湾」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
鈴木佑司（2006）「日本人のアジアへの留学と大学の国際化」『留学交流』2006 年 11 月号、日本学生支援機構
高木淑人（2005）「『松下アジアスカラシップ』と松下国際財団の活動」『留学交流』2005 年 9 月号、日本学生支援機構
高橋史郎（2005）「早稲田大学のアジア留学」『留学交流』2005 年 9 月号、日本学生支援機構
丹英子（2001）「21 世紀に羽ばたくインドの大学―プライバタイゼーションと IT 化の潮流」『IDE 現代の高等教育』2001 年 7 月号、民主教育協会
地球の歩き方編集室（2001）「中国・韓国・アジア留学」ダイヤモンド社
千葉大学（2006）「千葉大学海外派遣留学生帰国報告」千葉大学
中央教育審議会（2003）「新たな留学生政策の展開について（答申）～留学生交流の拡大と質の向上を目指して～」文部科学省
鄭圭永（2006）「韓国高等教育の国際化と留学生施策」『留学交流』2006 年 10 月号、日本学生支援機構
トーマス・フリードマン（2006）「フラット化する世界」日本経済新聞社
友光愛（2001）「留学体験記：香港」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
仲上健一（2001）「アジア太平洋時代の留学」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
中島直忠編（2000）「日本・中国　高等教育と入試：二十一世紀への課題と展望」玉川大学出版部
長田博（2001）「国際開発研究科におけるアジア諸国との学生交流」『留学交流』2001 年 10 月号
永野仁編（2004）「大学生の就職と採用」中央経済社
西功（1995）「就職氷河期を勝ち抜く法」ごま書房
日米教育委員会（2006）「アメリカ大学・大学院留学の手引き」日米教育委員会

日本学生支援機構留学生事業部留学情報センター（2005－１）「平成 16 年度　海外留学経験者の追跡調査報告書」日本学生支援機構
日本学生支援機構留学生事業部留学情報センター（2005－２）「『海外留学経験者の追跡調査』結果の概要」『留学交流』2005 年５月号
日本国際教育協会留学情報センター(2001)「中国への留学について」『留学交流』2001 年７月号、日本学生支援機構
日本労働研究機構（1999）「職業能力評価および資格の役割に関する調査報告書」日本労働研究機構
羽田積男（2001）「21 世紀に羽ばたく韓国の大学―”アメリカ水準”で運営するトップレベル」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
服部誠（2001）「アジアの多様とアジアの現実を視る―NAP：Nanzan Asia Program（南山大学短期アジア留学プログラム）について―」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
秦佳朗（2000）「中国留学ガイドブック」三修社
林黙章（2001）「教育の国際化を進める台湾への留学について」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
林行夫（2001）「21 世紀に羽ばたくタイの大学―グローバル化とローカルの知」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
原武道（2001）「21 世紀に羽ばたく香港の大学―90 年間の発展と変身」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
広島大学高等教育研究開発センター/日本高等教育学会編（2006）「日中高等教育新時代―第２回日中高等教育フォーラム/第 33 回（2005 年度）研究員集会の記録―」広島大学
藤田康介（2001）「上海に住む」『留学交流』2001 年７月号、日本学生支援機構
プラニー･チョンスッチャリットタム（2001）「タイ国カセサート大学への留学について」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
堀江未来（2005）「大学の国際化とアジア諸国への交換留学の意義」『留学交流』2005 年９月号、日本学生支援機構

松尾隆（2001）「中国への学生派遣について―成蹊大学における北京大学短期派遣留学の事例・プログラムコーディネーター及び引率者の立場から―」『留学交流』2001 年７月号、日本学生支援機構
三上喜貴（2005）「日本人のアジア留学の意義と大学の国際化―長岡技術科学大学の事例」『留学交流』2005 年９月号、日本学生支援機構
水野仁（2004）「大学生の就職と採用」中央経済社
宮崎恒二（2001）「21 世紀に羽ばたくインドネシアの大学―維持するエリート養成機能」『IDE 現代の高等教育』2001 年７月号、民主教育協会
村石美奈子（2001）「留学体験記：シンガポール」『留学交流』2001 年 10 月号、日本学生支援機構
モリー・N・N・リー（2004）「マレーシアにおける高等教育改革」『IDE 現代の高等教育』2004 年４－５月号、民主教育協会
安田雪（1999）「大学生の就職活動：学生と企業の出会い」中央公論新社
山田清志（2006）「東海大学のアジア交流：タイ王国モンクット王ラカバン工科大学を例として」『留学交流』2006 年 11 月号、日本学生支援機構
横田雅弘・白土悟（2004）「留学生アドバイジング：学習・生活・心理をいかに支援するか」ナカニシヤ出版
横田雅弘（2006－１）「アジア地域で巻き起こる留学生争奪戦と日本の行方：オーストラリア、シンガポール、香港の戦略と日本」『アジアの友』第 447 号（2006 年８月発行）、アジア学生文化協会
横田雅弘（2006－２）「世界の留学事情と岐路に立つ日本の留学生受け入れ」『留学交流』2006 年 10 月号、日本学生支援機構
李大淳（2004）「韓国における大学改革の最前線―国立光州・全南連合大学の胎動」『IDE 現代の高等教育』2004 年４－５月号、民主教育協会

●英語（アルファベット順）

David Sloper (1999) “Higher Education in Cambodia,” UNESCO, Bangkok
Nguyen Xuan Que & Harutoshi Kagoshima (1999) “A Challenge for the Curriculum Reform of Vietnamese Higher Education,” Statistics Publishing House, Ho Chi Minh City

Yoshinobu Onishi (2004) “The Impact of Middle Class and Open Universities in Thailand on its Economy,” Chulalongkorn University, Ph.D. Thesis., Bangkok

質　問　票

Ⅰ．　欧米留学経験者の採用について

アメリカ・イギリスを中心とした、いわゆる欧米地域への留学経験者（日本人）採用について伺います。御社では、

1.　中途・新卒に関わらず、欧米留学経験者を対象とした人材募集（例：海外でのリクルート活動、就職情報誌への募集広告掲載等）を行っていますか？

1　行っている
2　行っておらず、行う予定もない
3　行っていないが、現在検討中

2.　過去３年間、実際に合計何名程度の欧米留学経験者を採用していますか？

新卒（　　）名程度　　中途（　　）名程度

上記問２の回答がゼロである場合、下記Ⅱまでお進み下さい。問２の回答が計１以上である場合、以下３～７の質問にお答え下さい。

3.　採用結果などから判断し、留学先として特に評価している国はありますか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい（３つまで複数回答可）。

1　アメリカ　　2　イギリス　　3　オーストラリア
4　カナダ　　5　ニュージーランド　　6　フランス
7　スペイン　　8　イタリア　　9　ドイツ
10　その他（具体的な国名：　　）

4.　留学先の大学が有名か無名かは気にしますか？　当てはまるものにひとつだけ○をつけて下さい。回答者個人のお考えで結構です。

1　気にする。
2　気にしないが、実際に採用されるのは有名大卒が多い。
3　気にしないし、実際、採用結果から見て大学名は関係ない。

5.　どのような分野の留学生/卒業生を採用していますか？（３つまで複数回答可）

1　ビジネススクール
2　ロースクール
3　語学・通訳
4　その他の人文・社会学系
5　IT/理工学系
6　バイオ・化学・薬学系

7　その他の自然科学系
8　特に気にしない

6.　欧米留学経験者のどのようなところをプラスに評価しますか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい（３つまで複数回答可）。

1　語学力
2　留学した国・地域に関する知識
3　交渉力
4　上記以外の一般的なコミュニケーション能力
5　専門知識
6　発想の柔軟さ
7　異文化への適応力
8　向上心、チャレンジ精神
9　協調性
10　調査・研究能力
11　先進性
12　人脈
13　わからない、特にない等
14　その他（具体的に　　）

7.　欧米への、いわゆる（短期）語学留学はどのようにお考えですか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい。

1　大いに評価する
2　少しは評価する
3　余り評価しない
4　全く評価しない

Ⅱ．　アジア留学経験者の採用について

中国・韓国・インド・東南アジアなど、いわゆるアジア地域への留学経験者（日本人）採用について上記と同様の質問をさせていただきます。御社では、

1.　中途・新卒に関わらず、アジア留学経験者を対象とした人材募集（例：海外でのリクルート活動、就職情報誌への募集広告掲載等）を行っていますか？

1　行っている
2　行っておらず、行う予定もない
3　行っていないが、現在検討中

2.　過去３年間、実際に合計何名程度のアジア留学経験者を採用していますか？

新卒（　　）名程度　　中途（　　）名程度

上記問２の回答がゼロである場合、下記Ⅲまでお進み下さい。問２の回答が計１以上である場合、以下３～７の質問にお答え下さい。

3.　採用結果などから判断し、留学先として特に評価している国はありますか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい（３つまで複数回答可）。

１　中国　　２　台湾　　３　香港　　４　韓国
５　インド　　６　タイ　　７　ベトナム　　８　マレーシア
９　シンガポール　　10　その他（具体的な国名：　　）

4.　留学先の大学が有名か無名かは気にしますか？　当てはまるものにひとつだけ○をつけて下さい。回答者個人のお考えで結構です。

１　気にする。
２　気にしないが、実際に採用されるのは有名大卒が多い。
３　気にしないし、実際、採用結果から見て大学名は関係ない。

5.　どのような分野の留学生/卒業生を採用していますか？（３つまで複数回答可）

１　ビジネススクール
２　ロースクール
３　語学・通訳
４　その他の人文・社会学系
５　理工学系
６　バイオ・化学・薬学系
７　その他の自然科学系
８　特に気にしない

6.　アジア留学経験者のどのようなところをプラスに評価しますか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい（３つまで複数回答可）。

１　語学力
２　留学した国・地域に関する知識
３　交渉力
４　上記以外の一般的なコミュニケーション能力
５　専門知識
６　発想の柔軟さ
７　異文化への適応力
８　向上心、チャレンジ精神
９　協調性
10　調査・研究能力
11　先進性
12　人脈

13　わからない、特にない等
14　その他（具体的に　　）

7.　アジアへの、いわゆる（短期）語学留学はどのようにお考えですか？　回答者個人のお考えで結構ですので、お答え下さい。

1　大いに評価する
2　少しは評価する
3　余り評価しない
4　全く評価しない

Ⅲ.　両地域留学経験者の比較について

欧米留学の経験がある人材と、アジア留学の経験者とを比較した場合、どのような問題があるかについて伺います。御社では、

1. 留学経験者採用の際、MBA など学位取得の有無は気にされますか？　回答者個人のお考えで結構ですので、欧米留学、アジア留学それぞれについてお答え下さい。

（1）欧米留学の場合
1　気にする
2　気にしない
3　どちらとも言えない

（2）アジア留学の場合
1　気にする
2　気にしない
3　どちらとも言えない

2. 欧米留学経験者に対する採用の必要性を３とした場合、アジア留学経験者のそれはどのレベルの必要性があるとお考えでしょうか？　回答者個人のお考えで結構ですので、数字を○で囲んで下さい。

5　4　3　2　1　0
←より必要　同じ　不要→　わからない・比較不能

3. 欧米留学経験者の業務遂行能力に対する評価を３とした場合、アジア留学経験者のそれはどのレベルの評価でしょうか？　回答者個人のお考えで結構ですので、数字を○で囲んで下さい。

5　4　3　2　1　0
←より優秀　同じ　劣等→　わからない・比較不能

4. アジア（日本除く）留学やアジアの大学に対する課題や注文、現時点での評価や将来の見通しなどについて、ご意見を自由にお書き下さい。回答者

の個人的なご意見でも結構です。
《　　》
ありがとうございました。

著者略歴

大西　好宣（おおにし　よしのぶ）　国際連合大学プログラムオフィサー

1961 年、兵庫県姫路市生まれ。慶應義塾大学経済学部、米コロンビア大国際・公共問題大学院修士課程、タイ・チュラロンコン大高等教育大学院博士課程で学ぶ。博士（高等教育学 Ph.D.）。

日本放送協会（NHK）、笹川平和財団（SPF）を経て 2003 年より現職。民間の非営利国際財団である SPF 時代からベトナムやラオスなどの大学改革プロジェクトに携わり、現在は国連職員として、日本の大学で学ぶ途上国出身の留学生を対象とした、貸与型奨学金のプログラムを担当。

本業の傍ら、2005 年より 2006 年まで桜美林大学総合研究機構・客員研究員、2006 年春より現在まで学習院女子大学大学院・非常勤講師、2006 年秋より経済産業省・日本―マレーシア経済協力事業・審査委員などを兼務。近著に「プログラム・オフィサー：助成金配分と社会的価値の創出」（牧田東一らとの共著、学陽書房、2007 年 1 月刊）がある。